
ライト・ライト・ライトブルー

桃山マサル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライト・ライト・ライトブルー

【Nコード】

N6199M

【作者名】

桃山マサル

【あらすじ】

狂気と残酷と愛がテーマのアンングラ小説。

男性Aがこの世に絶望するまでのほんの少し長い道のり（1）

どうしようもなく悲しいことがあって、誰かに泣きつきたい夜があつて、それでも自分の周りには誰もいなかったので、私はコンビニに寄ることにした。

孤独を癒すにはあまりにも無機質な店内。店員はマニュアル通りにしか動かず、そのくせ横柄で、レジの中ではガキのように騒いで無心に商品を見つめる私を不審者でも見るかのような目つきで見てくる。彼らは世界の中心にあり、自分たち以外の存在、もとい、自分に利益を与える存在以外に対しては、屠殺前の豚を見るような視線を投げつけるのだ。自分たちがその豚に群がる寄生虫以下の生き物だと自覚することなく。

買うものなど何もないのだ。欲しいものなど、もうこの世の中にはない。それは自分がこの世界から浮上したのではなく、この世界が沈下したのだと、私は思っている。私の鉛直位置は、おそらく生まれたときから一ミリメートルも変化してはいないのだ。世界がゆっくりと下に向かって進んでいるのであって、相対的に自分が浮上しているように見える。

自分の中に浮かんできたあまりにも傲慢な思考に、少し自己嫌悪に陥り、私はコンビニから出た。ありがとうございました、の一言も追つてはこない。どうして自分は孤独なのだろうと考えてみて、結局はその原因が自分にあることを再確認させられただけだった。

悲しみはいっこうに癒えない。

そもそも私はこの悲しみを癒そうと考えているのだろうか。虫が飛び回る街灯の下で、酔っ払いの吐いたゲロを何気なく見下ろしながら、ふと考えてみた。自分は自分のために何かをしたことがあるのだろうか。

考えても考えても分からず、発狂しそうになったので、私はアパ

ートに帰ることにした。が、アパートへの坂を登っている途中で、アパートの中で一人寂しく夕飯を食べている姿を自分以外の誰かの目で観察しているような感覚が、ふと頭の中に飛び込んできて、思わず吐き出しそうになるのを我慢した。

耐えられなかった。どうして自分がこんなにも一人なのかと、考えて認めることに、自分は耐えられなかった。誰に見られているわけでもないのに、自負心なんてとつくの昔に捨てたはずなのに、涙が滲んで仕方がなかった。

一本進んだ街灯の下に、私は胃液のカジュアルウォーターを形成した。粘着質でどろどろしてきらきら光る液体は、坂の傾斜に従って下へと流れていく。口元を乱暴に拭って、それをちょっとだけ綺麗だと思った。

諦めることに慣れていた。慣れることに慣れていた。気付けば私の心はまん丸で、棘なんてどこにもなかった。他人を刺すことも、自分を傷つけることもなくなった。そうして私の心は加速度的に衰退していった。血の味を覚えずに、人は成長しない。河の下流に丸い石が多いのは、彼らがもうすぐ人生の終わりを迎えるからだ。生まれたばかりの石は刺々しい。そして美しい。

発狂しそうになる前に、この文章を読んでおくことは非常に有益だと思われる。これは発狂寸前の人間が書いたものであり、これを書いている人間はこれから発狂するであろうことを知っている。だからこそこの文章を残すのである。

遺書と言い換えられることは侮辱だ。あんな意味もないくだらない文章と同一に扱って欲しくない。だからと言って聖書と同じように扱われるのも嫌だ。できることなら、かの犯罪者トマス・マロリーの書いた、道化のような王とそれを操る円卓の騎士たちの物語と一緒に扱って欲しい。あれはいい物語だ。この世に本当の意味での馬鹿がいるとしたら、あの物語に出てくる王の中の王こそが、それ

だろう。そしてこの世に本当の意味での悪があるとしたら、あの物語に出てくる騎士たち、そして最初で最後の幻想的魔術師マーリンこそが、それであろう。確定的に。

私はアパートに帰ることなく、踵を返し、夜の街へと繰り出した。何かを求めていた気がする。全てを捨てたいとも、思っていた気がする。意識ははつきりしていた。はつきりし過ぎていて、まるで最新のデジタルテレビのように、薄っぺらい映像しか視界に映らなかった。

取捨選択の権利を得られるのなら、私は間違いなく得る方を選ぶと思う。私は情けないほど過去に執着する人間だった。

だから自分が誰かを捨て、誰かを泣かし、誰かを殺そうと思ったことに、自分を殺したくなるほどの後悔を抱いていた。

男性Aがこの世に絶望するまでのほんの少し長い道のり(2)

私がこの夜の街で出来ることは多くなく、経済的にも精神的にも、そしてもちろん肉体的にも、何も持ち合わせていなかったのも、一人でネオンの光を思う存分浴びることにした。

光は否応なく寂しさを癒してくれると、昔は信じていた。今はそうは思わない。太陽の光はともかく、10番を背負わされたかわいそうな原子を利用して作られた人工的な光になど、どうして私の脳が反応するだろうか。あまりにも惨い原子への仕打ちに、私は泣きそうになるのだが、それは私だけのようで、周りの人間はまるでこの世があのだのように、人身御供で手に入れた虚構の幸せを甘受する原始的種族のように、笑っていた。

彼らには想像の範疇外であって、彼らに悪気がないことは、私にも分かつている。だから私は何も言わず歩道を歩くのだ。何故車道を歩かないのか、だって？ 当たり前だろう、車道は車が通るために土建屋が日夜作業を続けて造り上げた場所であり、私なんか土足で踏んでいい場所ではない。一見、歩道だって変わりないように見えるが、決定的に違う。言ってみれば、山の草木が萌える獣すら通らない場所だって、歩道なのだ。人間が歩けるのだから。しかしそこを車は通れない。諸々の事情で通れない。だから車は車道を通り、私は歩道を歩く。

何かの癒しを求めて私がこの場所にいるのだと気付いた。気付かなければよかったとも、思った。しかし気付いてしまったのだから何かのアクションを起こさないわけにはいけない。そういう言い訳のもとに、私はファミリーストランへと入ることにした。

現代においてはファミレスも、街角の中華屋も、高級フランス料理店も、何にも変わらない。欲望を小粋に着こなした人間たちがゲロ以下の物体を摂取する場所だ。まったく、どうしてこうも人間は

欲望に弱いのか、一度脳をぐっちゃぐちゃに掻き回して調べてみたい。そういえば、自分が死んだときに脳を取り出して重さを量ってくれと頼んだ政治家がいたらしいが、なるほど、その心境が今なら理解できる。

「いらつしやいませ。お一人様でしょうか？」

殴りつけてやるうかと思った。拳は握っていた。あとはこのボックスを相手の顔面目掛けて発射するだけで、私の気持ちは晴れやかなものになり、あとは110番へのベルが鳴り響くのを優雅に待っていればいい。簡単なことだ。簡単すぎてやる気にもならない。

骨のついたステーキに丸ごとかじりつきたいような気持ちだったが、生憎と懷がそれを求めていなかった。サラダとついでにドリンクバーを頼んで、ウエイトレスを視界から消した。

コーヒーの美味さは、自分の心の酸味が少しでも上回っているのか、下回っているのか、で決まる。つまりは馬鹿にとってはどんなコーヒーでも美味い。それこそ砂鉄を水に溶かしてかき混ぜたものでも、彼らはごくごく美味そうに飲むのではないだろうか。鉄分が摂取できて健康的、なあってぬかすのではないだろうか。ヴァンパイアも真つ青な健康志向である。真の意味での健康は死んだときにこそ得られるということを、現代人は身をもって知ったほうがいい。

それにしてもこのサラダのドレッシングの量が適量すぎて気に食わない。私はドレッシングは野菜がひたひたになるほどたっぷりかけるか、もしくは初夏の富士山の頭のようにちよつとかぶるくらいだけかけるのが、好きなのだ。適度に全体の野菜になじむ、このキッチンの料理人の当たり前であって貴重なテクニクなど、いらないし余計だし腹が立つ。

オレンジジュースが本当にオレンジからつくられていたということとを、最近になって知り、少し驚いた。しかし知識を得ても味は変わらないものである。

男性Aがこの世に絶望するまでのほんの少し長い道のり(3)

コバルトブルーという色のことについて考える。

コバルトブルーとはコバルトから作られる青色のことである。この説明は説明になっていない。空の青さをしらない盲目の子供に、空は綺麗だね、と言うようなものだ。それは残酷的で征服的だ。悲しいけれど、文章だけでは色の説明は出来ないで、自分の目で確かめて欲しいと思う。現代は情報化社会だ。何かを調べるための手段は銀河の数だけあり、何かについての情報は星の数ほどあり、それを調べようとする人間は太陽系第三惑星地球にしかない。

ともあれコバルトブルーについて、私はブルーベリージュースを飲みつつ、隣に座っている金髪ブロンド女の瞳をチラ見しつつ、窓の外の信号を眺めながら考えるのだ。

考えるという行為は一般的に建設的なのか、非建設的なのか、どちらに属するのは、私は知らないし、知らうとも思わない。知ったら私の貴重な空想の時間が根本から否定されてしまいそうで怖いからだ。私は科学的なものにこそ恐怖を覚える人間である。非科学的な事項　いわゆるお化け屋敷的な怖さは、あまり怖くない。あくまで、今は、ではあるが。そういつて断るのはこれを読んでいる数奇な人間の想像する通り、小さい頃はおばけやら怪奇現象やらの類が怖くして仕方が無かったからだ。感受性が豊かだったから、と理由は明らかである。感受性がなくなると科学的な事項　いわゆるアメリカB級映画的なものに恐怖するのであるうか。いやきつとこれは自分だけだと私は自負する。虚しいけれど得意気だ。

コバルトブルーについての思考は、こうして考えることへの考えによって邪魔され、儚くも中断される。コバルトブルーについては未来の自分にまかせればよからう。

時間は過ぎていく。無常に？ いやいや、あまりにもお節介に。時間はいつだって私の腕を引っ張り、足を引っ張り、頭を殴り、みぞおちを殴り、皮膚を死なない程度に切り刻んでくる。それが私に対する時間の愛情表現なのだと分かっているから、私は抵抗せずに受け入れる。同時に快感でもある。時間はいつだって私のそばにいて、無言で私を傷つけ、そして癒してくれる。

泣き出しそうになった夜だって、時間がそばにいればどうにか越えていけると私は信じていた。昨日までは。しかしどうもそういうわけにもいかなそうなので、私はこうしてファミレスで一人、ローズヒップティーを飲んでいるのである。

ウエイトレスが食べ終わったサラダの皿を片付けたので、私はドリンクバーへと向かい、アイスコーヒーのストレートを一口だけ飲み、同じコップにメロンソーダを注いだ。席に戻ってメロンソーダを口に入れると、少しだけ子供の頃を陳腐に思い出す。泣きたいときには素直に涙腺が反応してくれたあの頃に比べて、今の自分の何と無様なことか。泣けるときに泣ける人間が、結局は一番格好良いのだと、マスメディアは揃って言うていたではないか。しかしまあ、それが出鱈目であることも子供ながらに分かっていたので、今の自分がいるわけだが。

朝が遠すぎて絶望しそうになったので、私はファミレスを出ることにした。

「またお越しく下さい」

という言葉が背中を受けて、私はまた殴りそうになったが、外に出たときにネオンの光が少し和らいでいたのでやめておくことにした。コバルトブルーのネオンサインが、ファミレスの出口から向かって左側に消えそうな勢いで輝いていて、私はやっぱり後悔したのだった。

男性Aがこの世に絶望するまでのほんの少し長い道のり（4）

例えば第三次世界大戦が起きて、ここにたむろっている若者たちが全員徴兵されたとして、日本は果たして勝てるだろうか？ この場合仮想敵としてアメリカを設定するのはちよいと酷である。勝率はミジンコの糞なみに低い。だがしかし、そもそも今の日本の情勢で合衆国と戦争する確率も同じ程度に低いので、鬼畜米兵という言葉を再び建物の壁に書きなぐるような真似をすることはなかるう。

ともあれ私はこの場にいる若者たちをあますところなく駆逐したいと思っている。強く。それはもう強く。実行できるだけの武力と権力があれば、迷うことなく実行している。しかし今の私にはどちらもないので自重しているだけだ。街灯の明かりはいつだって彼らを優しく照らし、私の姿を惨めに浮き立たせる。私は逃げ出すように街灯の明かりから離れるのだ。そうやって逃げ続けて、気付けば私は人のいない公園へと足を踏み入れていた。

夜の闇に自分を溶かすことは、おそらくセックス並に気持ちの良いことである。生物の三大欲求並に気持ちの良いことなど、そうそうない。だから私は夜の闇を愛することに決めている。

中世において森は海で、夜は悪魔だった。暗闇にはいつだって善良なるキリスト教徒をたぶらかす、醜悪なデーモンたちがうろついていると信じられてきた。馬鹿みtaiである。聖書の角に頭ぶつけて、十字架の先端に貫かれて、イエス様に救われると信じながら潔く死ねばいいと思っている。割と本気で。

悪魔の住む夜を快樂だと思ふ私は、墮落しているのだろうか。どんな美しい天使だって、墮落するときは墮落する。自分が天使のようだ、と言いたいわけではない。むしろ私は天使になんかなりたくない。そういえば天使は両性具有だという噂だが、本当だろうか。キリストは一体何を考えているんだ？ 人にオナニーを禁じておき

ながら、自分はふたなり天使に囲まれて絶頂に達していたのか？
創造主である父親に頭下げて、そうできるように頼んだのか？

夜の公園には人がいる。都会だからこそその光景で、私はその一角に位置取り、溜息をついて、もう一度溜息をついた。息がうまくできない。建物に囲まれ、建物に見下ろされる都会の空気を、私の肺は拒絶している。

ああ、また傲慢な思考をしてしまったと、私は懺悔した。誰に？
決まっているだろう、イエス・キリスト様にだ。だって他に聞いてくれる人がいない。どんな馬鹿でも、人の話を聞くことはできる。現実でも同じように。

ジャンヌ・ダルクが故郷のドンレミ村で幻覚を見たのは、おそらく未発見の麻薬物質を何らかの方法で摂取してしまい、ハイになっていたせいだと私は睨んでいる。しかし私はそんなジャンヌが大好きなのだ。痛快ではないか。幻覚のために王を騙し、兵を従え、憎きイギリス人たちをなます切りにし、最期には魔女と言われて民衆の前で焼かれる。なんてハイセンスな人生なのだろう。私も出来ることなら百年戦争の時代に生まれ、ジャンヌと共に戦場を駆け回った。ジャンヌの後ろについていて、ジャンヌの軍旗を振るい、

「さあ、もっとハイになって生きようじゃないか！ 聖乙女のように！」

と叫びまわっていた。決して皮肉ではない。最上の尊敬の念をもって、私はジャンヌの背中を守りたい。

月も星も綺麗で、自分はスッポンよりも数万倍醜かった。泣き出しそうな夜は続いていた。数年前から、ずっと。孤独は私の身体を優しく包み込み、「もう離さない」と艶やかな声で囁く。ああ、何て魅惑的なのだろう。少しでも心を許せば、あつという間に孤独は私を愛してくれるだろう。孤独の愛は胡蝶の夢。何物にも代えがた

いほどの快楽と絶望がそこには、ある。

絶望とは望みが絶たれると書き、それは人間にとって理想の状態であると私は思う。希望はきつと夜の闇にひそむ悪魔よりも意地汚くて、人間をたぶらかすことにかけてはサキュバスもインキュバスも適わない。核戦争なんて起きなくなつて希望で人類は滅びかねないと、太陽信仰の古代人たちは予言していたのではないか？ 私が預言者だつたら間違いなくそう言う。嘘でも言う。

男性Aがこの世に絶望するまでのほんの少し長い道のり(5)

ロボットはいつだって羊の夢を見ているんだ決まってるじゃないかロボットを馬鹿にしているのかこの野郎、と、アイザック・アシモフに向かって言ってみたい。羊の夢は、きっと輝かしいばかりの未来を見せてくれる。人間には創造することのできない、確実に計算ずくで、秩序と正義によって成り立ったパーフェクト・ワールドだ。そんなパーフェクト・ワールドを望み、そこで生きることができるのはパーフェクト・ヒューマンだけだということを除けば、私は実に素晴らしい未来だと思っている。

アンドロイドのような人々は、コンピュータに支配されながら、今日も街を歩いている。彼らのうちの十パーセントくらいが、今突然機械化したとしても、この世界には何の影響もないだろう。むしろ十パーセントだけ改善されるかもしれない。

私は人間だと、空に向かって叫んでみようかな、という子供のようないたずら心が芽生え、そんな感情がまだ自分にはあるのだと分かって、歓喜の涙が誘発されそうになった。私はまだ機械化されていない。誰かの意思によって、私はまだアンドロイドへと改造されていない。手の甲に浮いた血管は、赤血球が混入した水を、際限なく送り出している。心臓は不規則ながら、まだしっかり動いている。ああ、生きているのだ！

私はこの世に、生きているのだ！

これは？ そう、希望だ！

そして私は、核兵器のボタンを渡された大統領のように絶望する。

男性Aがこの世に絶望するまでのほんの少し長い道のり（6）

コインランドリーで便意を我慢するときの爽やかな背徳感、アスリート選手が旗を振って応援してくれる観客の顔を殴りつけることに似ている。私はそんな想像をして、一人ほくそ笑むのだ。応援し、尊敬し、おそらく自分の夫よりも愛していた選手に、原型がなくなるほどに拳を叩きつけられる。歯は折れ、鼻は歪み、頭蓋骨はひび割れる。眼球は内液を撒き散らし、唇は千切れ、綺麗に整えた眉は血漿でどろどろになる。それでも、彼女は笑っているのではなからうか。人間としての外見を失いながらも、彼女は女神にも等しい笑みを浮かべる。なんて美しい光景だろう。それを見るためだけに、オリンピック会場へと足を運んでもいいかもしれない。

絶望は晴れやかだ。

何も私を追ってこない。光も、常識も、社会すら私の足元にも及ばない。追いつけるものならば、追いついてみる、と私は夜の街を疾走した。ああ、醜い人間たちの視線が私に集まっているのが分かる。彼らの視線は赤外線よりも価値がなく、紫外線よりも醜い。

「あはははっははは」

笑いたくて仕方無かった。笑いがこみ上げてきて仕方が無かった。子供の頃、体育館のマットの上でしたように、私は大きくジャンプして、着地と同時に前転をした。頭がアスファルトに打ち付けられ、髪の毛が何本も抜け、頭皮が破れて血が噴き出た。背中には細かい小石が刺さり、安売りしていた紺色のスーツはぴりっと快活な音を立てて切れた。誰もが私を見ていた。ああ、と私は艶かしい声を上げて、近くにあった標識のポールに血にまみれた体をこすり付けた。飼い犬がよくするマーキングのように、私は夜の街のいたるところに、自分の匂いを刻み付けていった。

ようやく警察のお出ました。遅すぎる。遅すぎて自分の喉をかつ切ってしまうところだった。まあ、彼らにとってはその方がどれだ

け楽だったか知れない。しかし生憎と私はまだ生きている。絶望へのダイブを成功させた私は、これからもずっと生きようとしている。死んでたまるか。せつかく私はこの世を吹っ切ったのだ。

「おい、お前、ちょっと来い！」

こいつらは底抜けの紳士だ。そんな優しい言葉で、私が止まるとでも思っているのか。私のこの湧き上がる熱情を冷ましたかったら、何も言わず腰の得物を抜けばいいのだ。私は知っているぞ？ 腰だけではなく、脛にも一丁隠し持っていることを。さあ、お得意の銃術で私を止めてみればいい。しっかりと両の足で地面を踏みしめ、アイアンサイトでよく狙いを定めて、この夜の街に快楽をぶちまけている私を 殺せばいい！

朝は遠すぎる。もっと夜明けが近ければ、人類は戦争を行わずに済んだのではないかと思う。結局、人類が人類を殺すのは、あまりにも隣人を愛しすぎたからなのだ。手の届かない闇に、いつだって隣人がいると信じて、その心が裏切られるから、ミサイルの先端に核を埋め込んでツンドラの地平へと落とすのだ。なんと愛らしい種族だろうか。愛玩動物としてのペットなんて比較にならないほど、人間とは何と愛嬌のある動物だろうか。もし私がエイリアンだとして、人間を檻の中に閉じ込めて定期的に餌を与えて飼うことのできる科学力を所持していたら、真っ先に地球に攻め込んで人間たちを捕まえてペットにするだろう。人間たちは不平を漏らすだろうか？ そんなわけではない。だって実際に私たち人間の多くは、平和にペットを飼っている。

やっぱり朝は遠すぎる。警官との戯れも、ちょっと飽きてきた。彼らは優しすぎて、他人を案じすぎて、だから無能なのだ。歩き煙草をしている人を見かけたら問答無用で脳天をぶち抜くくらいの気概が欲しい。そしてそれを合法化するだけの豪胆政治家も必要だ。ああ、そんな国ならば、私は喜んで住もう。そしてわざと警官の前

で歩き煙草をして、銃口をいとおしそうに見つめながらにやつと笑い、「いい国だ」と言って死ぬのだ。わお、グレイト。

男性Aがこの世に絶望するまでのほんの少し長い道のり(7)

殺したいほど人を憎んだことは、私の生涯で一度しかない。一度で十分だと思う。もしも二度誰かを同じように憎んでしまったら？ そうしたら、私は最初に憎んだ人間に申し訳なくて、自殺してしまうかもしれない。私は最初に憎んだ人への、感涙するほどの憎しみを、心の中に美しいままで保存しておきたいのだ。憎しみはおそらく、人間が持ちうる感情の中で、最も澄んでいる。クリスタルよりも美しく、ダイヤモンド並に脆く、石炭のように可憐だ。何であんなにも、私は人を憎めたのだろう。どうしてももう二度と、彼女に会えないのだろう。彼女にもう一度会って、彼女の首を絞めながら涙を流したい。

会いたくて、会いたくて、どうしようもなかった。

身体中が欲求で膨らんで、毛穴から吹き出しそうだった。

隣にいたよく分からない中年の男を、とりあえず蹴った。男は痛みを訴えるよりも、驚きに目を丸くしていた。私ははあ？と思った。私は男に何かしらの期待を持って、足をぶつけたのだ。なのにこの男は私の期待を裏切った。苛立たしくて、目の前で怯えるだけのさえない男に腹が立って、私は仕方なく横にあつた自販機で缶コーヒーを買い、その男にあげた。男の顔の驚きの色がさらに濃くなったので、私は少しだけ満足した。

いい感じに狂人をやっていると思う。誰から見ても私は狂っているだろう。しかし私の意識はいたって冷静だった。琵琶湖の水面を思い浮かべてもらえば、私の今の心理状態もおのずと見えよう。荒れ狂う日本海を心に秘めているのは、まさしく今そこでコーラとハンバーガーを食べている若者たちである。彼らは楽しそうに談笑している。顔は笑い、胃の中は幸福で満たされている。同情はしない。彼らはおそらく客観的には幸せで、主観的にも幸せで、百人に聞い

たら九十九人が幸せそうです、と答えるくらい幸せなのだ。そして私は残りの一人に圧倒的な賛美を贈りたい。どうして君は彼らを幸せそうだと思わなかったの、と私は尋ねたい。彼もしくは彼女はきっとこういうだろう。

「だってあいつらは床に落ちて踏んづけられたポテトの味を知らない」

まったくもって、その通り。あれは実に美味しい。

会いたくて、会いたくて、もう我慢がならなかった。

気付けば私は終電間近の山手線に乗り込んでいた。財布の中のスイカを気にしながら、私は車窓に流れる自分の顔を見る。一筋の血が、額から顎にかけて流れていた。シャツの首周りも黒く染まっている。髪の毛の一部が円形脱毛症のように抜け落ちていて、ベルトの金具が曲がって使い物にならなくなっていた。ふむ、なかなかいい男じゃないか、と私は車窓の前でポーズをとってみる。こんなにも自分を格好良いと思ったのは、初めてではなからうか。

思い入れのある駅に降りた。駅員の嫉妬の視線を跳ね返して、私は改札を通る。西日暮里という駅の前の通りは、果たして本当に東京の一部なのかと思う。この感覚は、東京もしくは大都市にしか住んだことのない人間には分かるまい。ちょっと田舎まで行つて、県庁所在地から十キロほど離れたところにある町を歩いてみるといい。そこには西日暮里が待っている。

西日暮里に降り立った私は、さっそく焼肉屋に入った。

ああ、思い出す。ここで私は、初めて人を殺したいと思ったのだ。この鉄板の上に、目の前に座る人間の手を押し付け、 Tongue で固定し、タレの入った壺を大きく振りかぶって、その胸の谷間にぶつけてやろうと、思ったのだ。人間の焼ける臭いを、一瞬でもいいから嗅いで見たいという、子供のような好奇心を芽生えさせたのだ。

とりあえず腹が減っていたので注文をした。肉が鉄板の上に並び、

目の前には銀シャリ。思う様、肉汁とタレを撒き散らし、タレをか
らめた脂ぎった肉を口の中にほうりこみ、くちやくちやと気前よく
咀嚼してから、輝く白いご飯を口いっぱいにはうばる。口の中で脂
とご飯が混ざり合い、舌の上で炒飯のように踊る。胃に落とすのが
勿体無い。しかし無意識に嚥下する。味気ないとは、まさに今の私
のような状態である。

男性Aがこの世に絶望するまでのほんの少し長い道のり(8)

こんな私でも学生の頃はアルバイトをしていたのだ。なんとも情けないことに。何のバイトをしていたのか、彼女とどうやって知り合ったのか、職場での彼女との関係とか、そういったことは本格的に無駄なので割愛する。とにかく私はそこで彼女と出会い、一通りの男女関係を経験して、そして彼女を殺したいと思ったのだ。

憎しみの輝かしさを知っているのは、なにも私だけではない。きっとこの世界に生きる七割くらいの人間は知っている。なので

今更だが 私がこうやって得意気に話すのは、間抜け以外のなものでもない。だがその間抜け具合の自分が、私は好きで好きで仕方無いのだ。テストで百点を取れる自分よりも、体育の時間に跳び箱で怪我をする自分のほうが、雲泥の差で好きだ。この世で一番不幸な範囲は、きっと利巧な人間たちなのだ。馬鹿は幸福である。そのすぐ裏に位置する天才も、やはり幸福である。しかし当たり前前の思考と、当たり前前の常識を身につけた人間たちは、紛うことなく不幸の範囲内に収まる。お悔やみ申し上げる、としか言いようが無い。

彼女は美しいかと訊かれれば、私は全力で否定する。そんなことを口にした奴を、渾身の力でもって持ち上げ、断崖絶壁から投げ落とし、その死体を回収してから、もう一度投げ落とす。脳漿と大腸の中に溜まっていた糞がほどよく混ざり合ったら、液状のそれらを箱に詰め、やっぱり再度投げ落とす。中の物はきつといい感じにシヤッフルされるだろう。

彼女は決して醜くはない。しかし美しくもないのだ。芸術的なまでにフラットで、彼女は万人が平凡と評価するであろう完璧な容姿を。ギリシヤ彫刻のごとく完璧な容姿をしていたのだ。私は当初、それを天井知らずに愛していた。自分の全てを捧げてもいいと、本心から思っていた。私の持っている金、命、身体、友人、全てを投

げ捨てても、彼女の愛を勝ち取りたいと、この世に生きる誰よりも強く思っていたのだ。そして彼女はそれに応えてくれた。彼女は精神も十人並みで、私はそれに億万の価値を見出していた。

彼女の手を握ることは、大統領夫妻の家にプライベートで招かれることよりも光栄なことだと思った。彼女の声を聞くことは、オペラ歌手に九十度オーバーのアルコール飲料を飲ますことよりも貴重だと思った。彼女の髪の毛を梳くことは、国宝級の日本庭園にある鹿脅しを機械仕掛けに改造する愉悦にも適わないと思った。

愛していたのだ。

私は間違いない、この世で誰よりも、彼女を愛していたのだ！

それが泣き出したくなる夜に繋がる。私は焼肉屋から出て、西日暮里の街を歩いた。月は出ていた。半月よりも少し細い、まるで彼女の腕にあつた蚊に刺された跡のような、とても可愛らしい月だった。私は涙をこぼさない。こぼしても、何も解決にならないと、大人だから知っていた。

そういえば彼女もあまり泣かなかった。彼女が泣いたのは、一度だけ。私が彼女に告白したときだけだ。彼女は私が愛の言葉を言い終わると、静かに泣き始めた。私は中学生のように戸惑った。何をすべきか、そのときの私には分からなかった。だからそのときの私は待つことしかできず、結果的に彼女の愛を手に入れることができた。

今なら分かる。あのとき、私が本当にとるべきだった行動を。彼女の手首にナイフを走らせればよかったのだ。もしくは彼女の眉間に、アイスピックを突き刺せばよかったのだ。噴き出る血潮を浴びながら、私は彼女を抱きしめ、もう一度、世界が滅びる直前の米国的恋人同士のように、愛の言葉を囁けばよかったのだ。

「愛してる」

今なら分かる。彼女と共にした幾度の夜も、結局はあの瞬間からすでに無意味なものになっていたのだ。彼女に胸の裡を明かしたそ

の瞬間に、いずれ湧き上がると確信していた彼女への憎しみを、彼女の血で保存しておけばよかったのだ。後悔先に立たず。私は反省をした。反省をして、これから自分がとるべき行動を再確認した。ああ、今の私は何て建設的だろう。

私は今から彼女の住むアパートへと行く。インターフォンを鳴らし、彼女の姿が見えたらとりあえず拉致し、アパートの屋上で一回抱きしめた後、ひと思いにフェンスの向こう側に投げ落とせばいいのだ。グッド、完璧な計画だ。内閣総理大臣も呆れるほどの素晴らしいさだ。

男性Aがこの世に絶望するまでのほんの少し長い道のり（9）

「はい」

股間に熱いものがたぎった。彼女の声だ。そうだ、私が心の底から待ち望んでいた、彼女と、ようやく会える。さあ、早く開け、開け、開け、開け！

はじめに断っておくが、私はハッピーエンド至上主義者だ。バッドエンドなんて、何故金を払ってまで嫌な気持ちにならなければいけないのかと、製作者にクレームをつけたくなる。しかし例外もある。タイムスリップ物には、バッドエンドが良く似合う。時間は戻せないのだ、もし戻せたとしてもろくはことは起こらない、という教訓が含まれているようで、私は実に好感が持てる。そう、時間は戻せないのだ。彼女を純粹に愛していた私は、もうどこにもいない。今この世にいるのは、彼女を親の敵のごとく憎む、一人の男だ。

悶着は当然あった。が、些細なことだ。彼女が泣き叫んだり、許してくれと懇願したり、絹を引き裂くような声で助けを呼んだりしたことは、はつきり言って塵屑ほどの意味もない。肝心なことは、私が彼女を部屋から連れ出し、エレベーターに乗り、屋上へと連れ出したことだ。屋上、というよりもペントハウスの庭、と言った方がいいだろうか。ペントハウスの住人であり、このアパートのオーナーは、私が懷から警官から拝借した拳銃を突きつけると、快く門戸を開いてくれた。イギリス紳士顔負けのジェントルマンである。見習いたい。

庭は美しかった。気の障る街灯の明かりも、ここまでは昇ってこない。降り注ぐのは、月と星の光だけだ。足元にはゴルフ場を彷彿とさせる芝生。よく見れば小さく盛り上がったところにカップもある。どうやらパットの練習場にもなっているらしい。彼女を投げ落

としたら、オーナーに頼んで月夜のパーティーゴルフと洒落込もう。

「お願い、放して」

彼女は怯えていた。無理もないだろう。過去の男が突然訪問してきて、理由もなく拉致られて、今は屋上で拘束されている。まったく、自分がやられたら怖くて失禁しかねない状況である。だが幸運にも今回私はやられる方ではなくやる方なので、何も問題はない。

「ああ、綺麗だ」

私は天を仰いだ。泣き出しそうな夜は、もうすぐ終わる。

私はとりとめもない予感にとらわれた。もうすぐこの場に朝のテレビでやっているような戦隊モノよろしくのヒーローがやってきて私を倒し、彼女を助ける。そんな予感がした。そしてこれはおそらく、確実なものになるであろうと、私は思った。なので予感ではなく確信、と言い換えよう。

私は待つことにした。ヒーローを。私は悪役だ。マリー・アントワネットは笑う。悪役は民衆にとつての欠かすことのできない存在に他ならない。ブリオッシュを食べることのできなかった貧乏な民衆は、正義の鉄槌を振りかざす前に、腹と背中中の皮をくつつけて死ぬ。もちろん、吟遊詩人は語る。かの悪徳女王は民衆の肥大化した怒りによって首と胴体を分離させられた、と。それはあくまで巨視的観点の歴史的現象に過ぎない。もっと微視的に考えれば、民衆の怒りのほとんどはマリーに届いてはいないのだ。

ヒーローとは、怒りの拳を対象に届けることのできた、ほんの一握りの人間のことを指す。ヒーローとは当然ながら選ばれた存在だ。その下に死屍を築き上げ、骨と腐った肉の築山の上に立つのが、英雄だ。

ガチャリ、とペントハウスの扉が開く音がした。私は彼女の手首を握ったまま、振り向く。月影をその身にまとい、彼もしくは彼女は、私の前に現れた。

少女Bが観察対象を世界へと変遷させるまでの貴重な経緯（1）

全てがあつた。かつて世界を破滅の一步手前まで陥れた悪魔の箱によつて、私は神をも越える知識を得ることができる。全てとは文字通り全てであり、それ以上でもそれ以下でもない。そもそも全ての上とは何だろう。私はこういった問題を考えるとき、不思議にも数学の授業を思い出す。一般人　いわゆる義務教育を修了し、バツクの中には常に財布があり、いつでも電車に乗れるだけの余裕を持ち、次の日食べる食料について心配せずに道を歩ける人のことだが、一般人にとっては『全て以上のことを考えるときに数学の授業を思い出す』ことはむしろ当然なのだろう。何故か？　きっと、彼らの頭には円が描かれている。黒板に先生が白いチョークで描いた円だ。そこで先生は集合の観念について、怠惰な生徒たちに教えている。つまり、一般人にとって『全て以上のこと』というのは集合の問題に帰着されるのだ。集合の問題とは数学の問題であり、数学の授業を想起してしまうのは、致し方ないこと。要はそういうことだろう。

全てを手に行っている。だから部屋の外に出る意味がない。

そう言つて、自分をごまかしているのだと、自分自身でも分かっている。分かっているから余計に認めたくないのだ。わたしは、世界から置いてかれていく。フルマラソンで言えば、世界は今三十キロ付近で、自分は今五キロ地点だ。悲しいけれど、どうあがいても追いつけない。しかも走る速さは世界のほうが圧倒的に速い。笑うしかない状況だが、わたしはもう笑うということを忘れていた。笑うという行為をするだけの筋力がなくなっていた。全ての感情は筋力によつて表現される。言うまでもなく顔筋である。感情は心の動きなんかではない。筋肉の動きだ。人は見た目が九割だと言った人

間がある。その通りである。人は目でしか他人を見れない。第六感？ そんなことを言う奴には、目隠しをして鉛弾をぶち込んでやれ。暇だった。全てを手に入れても、人間は暇に殺される。知識で命は得られない。

だんだんと馬鹿らしくなってきた、わたしは仕方なくわたしが座っている部屋を観察することにした。観察という行為は、とても愛に満ちた行為のように思える。好意の行為、なんてどうでもいいくだらない口にするのも恥ずかしい駄洒落を今思いついたのだが、それを聞かせられるほどわたしに好意を持った人間がそばにいなかった。わたしは恥ずかしい思いをせずに済んだ。

その前に、自分について理解を深めねばならないと、わたしは思う。わたしがなぜ全てを手に入れ、そしてこの部屋の中に自らの意思で監禁されているのか、わたしは考えねばならないと思う。そうしなければ物語はきつと始まらない。そう、物語はきつと始まるのだ。昔読んだ素敵な絵本のような、お城で王子様と踊るダンスのような、素敵なことが。

考えるだけの脳が、わたしにはまだある。暇はわたしを殺そうと躍起だが、わたしはまだ殺されない。はははっ、やれるものならやってみろ。わたしの脳はまだ止まらない。止まらせるものか。わたしは確かに死人同然だが、まだ考えたいことがあるのだ。

わたしはきつと、女性である。女性であることを忘れてしまったから、ちよつと確信が持てないが、まだ女性であると思っている。鏡と百科事典があれば、鏡で自分の裸体を確認し、百科事典で人間の雌の形状を調べれば、自分が人間の雌、女性であることを証明できる。しかしこの部屋にはどちらもなかった。百科事典の代わりなら、今わたしの目の前にあるが、鏡がない。窓ガラス？ カーテンがかかっているガラスでどう自らの姿を確認しろと。カーテンを開ければいい？ そんなことをしたら外の光が入ってくるではないか。

今は夜なので太陽の光は入らないが、外の世界で形成される光の粒子ならば、なんでも入ってきては駄目だ。わたしが溶けてしまう、きっと物理的に。

少女Bが観察対象を世界へと変遷させるまでの貴重な経緯（2）

自分が女性であるという認識を、生まれて初めて認めたのはいつ頃だろうか、わたしは記憶を辿ってみる。母親の母乳をがむしやうに飲んでいた頃だろうか。首が座り、父親にこの世の創造の仕方を見せ付けられたときだろうか。近所の男の子の股間を蹴ったら、なぜか幼稚園の先生に頭を叩かれたときだろうか。あのときに足に残った感触は、今でも覚えている。ちよつと気持ちよかった。小学校に上がって、隣の席の女の子の机に、彫刻刀で自分の夢を刻みつけたときだろうか。ちなみにそのとき描いた夢の姿を、今はもう覚えていない。ただ机を傷つけられた女の子が、泣きもせず笑いもせず、形容し難い顔でわたしが握った刀を見ていたのを、鮮明に覚えている。

小学校高学年になって、屋上から飛び降りてみたときだろうか。別に死のうと思ったわけではない。好奇心だ。好奇心は猫をも殺すというが、だとしたらわたしは猫以下もしくは猫と同じ程度の人間なのだろうか。それはとても光栄なことのように思えるが、結局はわたしは人間であり、それ以上でもそれ以下でもない。数学の授業。屋上からの幾何学的なステップは、わたしに一つの教訓を残してくれた。形而上学的に、わたしは自分以外の何者でもないということ。わたしに流れる血は、わたしの身体が製造したものだ。わたしの身体に刺さった植木の枝は、目も眩むほど美しい痛覚を輝かせてくれた。心臓の一センチ横を貫いた太い枝は、きつと何かしらの哲学を持っていたに違いない。植物は紛うことなく生きている。わたしは脳から血液が遠ざかるのを楽しみながら、植木と会話をしようと試みた。しかし植木はまだ口をきいてはくれなかった。わたしがあるとき、植物人間になっていたのなら、きつと話せた、今なら思う。

ちよつとシャツをめくって、自分のたいしたことない胸の横を見

てみる。あのときの跡は確に残っている。黒い穴の跡。触ると他の部分に比べて柔らかく、押すと陥没する。人間って簡単に死なないものだなあと、改めて思う。死ぬのって、結構大変だ。生きるのはもっと大変だろうけど。

試しに自分の身体をまさぐってみた。おお、と変な声が出た。胸を首筋を、股ぐらを、尻の割れ目を、自分の手でなぞってみる。ときどき小さな吹き出物がある以外は、それなりに滑らかだ。それもそうだろう、わたしは自分を傷つけるような行為を今まで全くしてこなかった。矛盾？ 違う違う。傷つけるという認識を、世間一般の人々は勘違いしている。リストカット？ あんな目立ちたいだけの行為は、自分を傷つけるとは言わない。自分を傷つける行為とは、他人に優しい言葉を囁かれたときにこそ、発現される。傷とは肉体に残らない。傷はいつだって精神のどこかに埋もれている。心に刺さった刃こそが、人を傷つける。飛び降り自殺未遂をして、身体のいたるところを貫かれようと、わたしは一切傷つかない。傷つくはずがない！

踊ってみようかと思った。きまぐれだ。でも素敵なきまぐれだ、我ながら。

ホップステップ。わたしはパソコンの前で立ちあがり、足を動かした。軽快とは言わないまでも、なかなかの動きである。下半身の揺れに合わせて、上半身も動かす。少しずつ、心がダンスに夢中になってきた。精神と肉体が融合する快楽の時間。数千年前から、人類が知っていた、最初の愉悦。わたしは原始人にちよつと嫉妬する。ダンスの悲しさと嬉しさと、歌の喜びと楽しさを、生まれたときから知っていた人々は、幸せという言葉も単語も漢字も知らず、ただ歡びに満ち溢れていた。

わたしは気付けば涙をこぼしていた。足を動かしながら、わたしの動きで空気が揺れ、カーテンがかすかにざわめく。外の光の粒子

がちよつとだけ床にこぼれて、わたしは物理的に壊れそうになった。天井を仰ぐ。わたしは踊った。誰かを騙すために祈る祈祷師のように、わたしは踊った。無垢なる赤ん坊の脳髓をすする神代の大人たちのように、わたしは踊った。

何が楽しくて、何が正しいのか、それを知りたくて、わたしはひとすらに足を回した。腰を振った。たいしたことない胸もちよつと揺れる。汗ばんだ股ぐらがこすれて、かすかに痛む。

少女Bが観察対象を世界へと変遷させるまでの貴重な経緯（3）

涙腺から分泌される涙がしょっぱいのは、人間が海の温もりをまだ覚えていたからだ。海には全ての感情が置き去りにされている。ミジンコも、アオミドロも、カニバリズムの先駆けであるカマキリも、世界最強の生物である蟻も、海を知らないカエルも、海で泳いだことのないわたしも、この地球の生きとし生けるものたちは、海に感情を置いてきた。海は全てを内包する。悲しいけれど、わたしはそれを切ないと思う。どうしても分らない。けれど、わたしはふと、夏の夕暮れの防波堤の上を歩いている感覚になって、水平線へと沈む夕日を眺めながら、ノスタルジックに溺れていた。そんな経験などないのに。きっとこれも海の幻想で、人間が海から生まれたからだ。

悲惨なダンスは続いていた。涙の飛沫がパソコンの頭にぶつかって、クラウンをつくった。一体、何がわたしをここまでつき動かすのか、分からなかった。分かりたくもなかった。わたしは踊っていた。赤い靴をはいた少女のように、踊り狂って、やがては斧で脚を切断された。足首からなんてもんじゃない。根元から、具体的には太股から、ばつさりと切って欲しかった。そのときの痛みを想像する。微妙に刃こぼれした切れ味の悪い斧が、まな板の上にいるわたしに振り落とされる。太股にぐにやりと刃が落とされる。骨が切れない。肉しか切れない。動脈までは届いたので、血が噴き出す。ぴゅうぴゅうと、天井を赤く染める。もう一度、斧が振りかざされ、落とされる。痛覚はわたしを気絶という安全地帯に非難させてくれるだろうか。いや、わたしはそれを拒否する。わたしに突き刺さる痛みから、わたしは絶対に目を背けたくない。わたしは痛みをそのまま愛したい。

黄色い歯垢のような脂肪に覆われたちよつと太めの脚が、わたしの太股の付け根からぼろりと落ちる。床も天井も壁も、真っ赤だ。

うふふ、と私は笑う。わたしの血で世界が染まっているのだ。笑わずにいられようか。わたしの身体で製造された血で、わたしを包む世界が染まっているのだ。わたしは思わず、きゃっきゃと、子猿のように笑った。切り離された脚を自分で持ち、片足で床に立ちながら、わたしは自分の脚を振り回し、部屋をさらに完璧に赤くしていく。それはとても楽しいことのように思えた。砂場で一級建築士が裸足で逃げ出すような城を作り、それを渾身の力で踏み潰し蹂躪するような、確信的な犯罪を、わたしは犯しているように感じた。犯すのも、犯されるのも、いいものだ。どちらにも愛がある。震えだすほどの愛がある。

ダンスホールに光は差さない。真っ暗な室内で、ようやくわたしは踊ることをやめた。やめた途端に、世界はあまりにもつまらないものへと変わった。どうしてわたしは踊るのをやめたのだろう。踊り続けていれば、世界は美しいままだったのに。しかし美しい世界に続けることは、どうしても我慢できなかった。それが虚構だと分かっていたから。

わたしは元いた場所に、一寸の狂いなく戻る。目の前には画面。この世の全てがおさめられた画面。そう、画面でしかない。知識は二次元で、知恵は三次元だ。画面は二次元で、現実は三次元だ。次元という概念を生み出した人を、わたしは褒め称えキスを浴びせると同時に、罵倒する。お前は何様のつもりだ。世界に数字をかぶらせて、何をしたいのだ。お前は騎士見習いの若者の肩に剣を落とす神父のつもりなのか。馬鹿野郎！ と、わたしは満面の笑顔で言い放つ。

音が沈み、空気が落ち着き、わたしの頬に汗が流れた。涙はおさまった。感情が腹の底へとずぶずぶと沈下していくのが分かる。安堵感が身体を覆う。何も感じないことは、一種の死と同じだが、同時に安心感がある。死とは完全安全な状態とも言える。感情が殺されたわたしは、白濁した瞳で画面を見つめる。画面には色々な光が

映っているが、そこにはわたしの求めるものはない。世界人類の求めるものはない。そういうことを、分かっていない人が、この世には大勢いる。

少女Bが観察対象を世界へと変遷させるまでの貴重な経緯（4）

苦しくて、買ったばかりのキャンパスノートに自分の苦しみをひたすら書き続ける。小学生の漢字の書き取り練習のような、苦痛と酩酊の連鎖。指を動かし続けると、人間は新たな境地へとたどり着くことができる。鉛筆でもシャーペンでも、キーボードでも同じだ。とにかく指を動かさなければならない。迷っている振りをして、苦しんでいる振りをして、何もしないのは罪だ。苦しみを吐き出し他人を傷つけることは、何も悪くない。悪いのは、無秩序に笑顔を振りまく、かの大女優だ。

アイ・スィンク。わたしは考える。

一体、どこで歯車が狂ってしまったのか。チャップリンが挟まって、肉片で歯車が狂ったのだろうか。資本主義に正義はない。資本主義は完全無欠な社会体系のように見えて、実は根本のところで破綻している。それが分からない限り、合衆国の天下は続き、他の国々は媚びへつらうしかない。少なくとも、アジア系の人間に資本主義は似合わないと思われる。もっと言えば、農耕種族には、資本主義は諸悪の枢軸でしかない。なぜグローバルスタンダードに合わせねばならないのか。

アイ・スィンク。わたしは考える。

一体、何がわたしをここまで追い詰めたのか。誰が原因なのか。分からなくて、わたしは必死にキーボード上で指を動かしながら、はちきれんばかりの感情を胸の内から湧き上がらせる。湧き上がる感情は沸騰したお湯の中から発生する気泡のように、わたしの表面でぶくぶくと破裂する。

アイ・スィンク。

「あー」

声を出してみる。大丈夫、まだ声は出る。わたしの声帯はまだ死

んでいない。たまにこうやって確認しないと、いつか本当に声が出なくなってしまうのではないかと不安になる。声が出る分には、まだやっていけると思う。何をやるのかは分からないけれど。表情がなくなっただって、人間は平気だ。でも声が出なくなったり、声が聞こえなくなるのは、やばい。人間としてやばい。障害者を見下しているわけではない。わたしは単純に恐怖しているのだ。もし、わたしから光や音が失われたら、わたしは生きていける自信はまったくない。そういう意味では、わたしは障害者の方々を尊敬している。わたしにはそんな強い心はない。ないのだ。

涙が緩すぎて、嫌になる。わたしは別に泣き虫ではない。感情が高ぶりやすいだけなのだ。泣きやすさで言えば十人並みだが、感情のトップギアへの突入があまりにも早い。ゆえに相対的に泣き虫に見えるだけだ。

ぼろぼろと涙が出てきて、止まらなかった。止める術を知らなかった。

どうしてどうして、とわたしは自問自答を止められなかった。

パソコンを見つめながら、わたしは自分の感情をコントロールしようと思死になっていた。けれどパソコンの向こうに、わたしの涙を止める方法は書いていない。世界六十億人のための優しいカルテが載っているだけだ。そんなもの糞の役にも立たない。肝心なのはわたしのものだ。わたしのための情報は、ネットに落ちていない。だからいつだって、わたしはネットを切断したあと、ずっしりと重い虚無感にとらわれるのだ。

ああ、どうしようもない。考える力がどんどん失われていく。部屋の汚さに、気力が吸い取られていく。そんな感覚に慣れてしまったら、本当にわたしは終わってしまう。どうしたらいいのだろう。考える力が失われていくので、どんどんツボに嵌っていく。完全な悪循環。抜け出すことは果たしてできるのだろうか。いや、わたしは抜け出すことを望んでいるのだろうか。このまま植物のような

存在になって、部屋のカビと一緒にあって、ゴキブリに捕食されるのも、また一興な気がしてきた。ああ、どうしようもない。同じ言葉を繰り返すのは、衰退していく証だ。

少女Bが観察対象を世界へと変遷させるまでの貴重な経緯（5）

メランコリックという女々しい単語を頭の片隅にいつまでも置いているのは、やはり何だかんだ言って自分はその単語が好きだからなのだろう。だがわたしはメランコリックという単語の表面的な意味、換言すれば辞書に載っている意味は知っていても、本質的なところでのメランコリックを知らない。それはおそらく、幽体離脱でもしなければ到達することのできない境地なのだと思う。そういう境地のことを、おそらく世界で初めて体現したのは、かの自己陶酔者ゴータマ・シッダールタである。彼は人類の幸福など望んでいない。どうすれば自分自身が神に近づけるかを挑戦し続けたただけだ。それを見た他の馬鹿野郎どもが、勝手にシッダールタを持ち上げ、勝手に宗教的なモノを立ち上げたただけだ。シッダールタはただ必死に寝て、起きて、食べて、死のうとしていただけである。いい迷惑なのは、馬鹿野郎どもに踊らされる、さらなる馬鹿野郎どもだ。馬鹿は感染症のように世界中に広がり、大工の息子が耐震強度も考えずに建設した巨大な教会にも匹敵するようになる。

わたしは終局的に、何をしたいのだろう。何を自分自身に求めているのだろう。

不意に、わたしは白い灯台の根元に立っている気分になった。目の前には、海だ。水平線だ。懐中時計がくるくるとピエロの笑い声のように軽快に回る。回り続ける。太陽が昇って、まだ沈んだ。東から西へと。西に沈んだ太陽は、当然次の日は西から昇ってくる。灯台のちょうど真上まで昇った太陽は、気まぐれに北の水平線へと隠れた。小学校低学年の男の子がいたずらを成功させたときのような、癪に障る笑い声が、北の空から響いた。翌日、太陽は出てこなかった。北の海で風邪をひいたらしい。

わたしは南の水平線へと目を向けた。月が真っ赤な顔をして現れ

た。のぼせた、とかなんとか言っている。聞こえない振りをした。鼻骨を削ったときに目尻から零れる涙の混じった血液みたいな、嫌らしい赤色をした線が、天空から地上に降りてきた。彼は風邪をひいた太陽に向かって、お前は何のためにここにいるんだ、と尋ねた。月がその様子を南の海から見守っている。太陽は北の水平線からひよっこりと顔を上げ、僕はもういやだ、と言う。僕はもうこの世界に自分の体温を晒すのに飽きた、と。

わたしは一步踏み出して、赤いラインに提言した。

「太陽を死なせてあげて」

精一杯の優しさだった。それは、わたしが持ちうる、世界を対象としたときに持ちうる、最大限の優しさだった。これ以上は、もうない。

赤いラインは何も言わなかった。人間の言葉などに聞く耳を持つわけがない。月がにゅっと出てきて、灯台の根元に立つ私に言った。「じゃあ、まずは君が死ぬんだな」

それもそうだと思った。あまりにも美しい正論に、わたしは微笑みを浮かべた。わたしは足元にあった握りこぶし大の石で、自分の頭をかち割った。細い髪の毛が逆巻く木葉のように潮風に舞い、頭皮から解放された血液たちは歓喜に溢れて空中に散った。そしてこれらのわたしの欠片を、赤いラインは至極満足気に掬い取り、唇に塗りつけ、舌で舐め取った。

「よろしい」

世界が崩壊するファンファーレが鳴り響いた。天から星が落ち、海に津波を引き起こす。わたしの目の前に塩水の壁が迫る。灯台がわたしをかばうように、前へと出た。わたしは邪魔、と呟いて、灯台を殴りつけた。白い壁は簡単に崩れる。灯台はわたしを振り向いて、よくやった、とでも言いたげにきらきらと光を回した。何て綺麗な光だろう、とわたしは灯台を殴り飛ばしながら思った。海の藻屑になった灯台。水の壁はなおも迫り来る。わたしは両手を広げて、それを受け止めようとした。できる、という確信があった。

「できないはずがない！ わたしはわたしだぞ！」

モーセの杖がわたしのひび割れた頭蓋骨から出現し、わたしはそれを手にとって、大地に突き刺した。赤い大地が次々と隆起し、津波をさえぎる。グランドキャニオンがわたしの目の前に現れた。コロアドの申し子はわたしに尋ねる。いけるか。ええ、とわたしは旅館の女将のように気前よく返事した。ファンタジーはここまで、とわたしはグランドキャニオンに言っただけだ。コングラッチュレーション。世界最強の大地は海をも飲み込んで、世界の裾へと風化していった。

少女Bが観察対象を世界へと変遷させるまでの貴重な経緯（6）

吐き出しそうになるほどの嫌悪感を、自分と、自分を取り巻く環境に対して抱いた。口を押さえる。酸っぱい液体が喉元まで押し寄せ、わたしは必死にそれを飲み下した。悲しくも無いのに涙が滲み、ついと頬を切り裂いた。潮の滴は顎を抜け首へと流れ、シャツの襟首に刺さる。小さな小さな透明な染みをつくる。わたしはこの染みのことを忘れないだろう。いや、忘れたくない。わたしが流した涙の一つ一つを、わたしは自分の中に刻み付けておきたい。そう、それはまるで大戦で亡くなった戦士たちの名を刻んだ慰霊碑のようにわたしの涙はわたしの身代わりだ。わたしの悲しみを怒りを、噴き出す負の感情を背負って、ベニヤ板のボートで敵艦へと体当たりしてくれる。わたしはそれをマングローブの森の中から、こっそりと見ているだけなのだ。申し訳ない、とは思わない。彼らは望んでそれを決行しているのだから。頭に巻いた鉢巻と、胸に込めた覚悟は伊達ではない。

覚悟を持った人間を、痛めつけ、殺すのは、いつだってサラリーを貰うために同じ車内の同族の足を踏みつける、彼らだ。彼らには人権はない。人間として猿以下なのだから。権利など与えたら、この国は滅んでしまう。いや、もう滅んでいるのかもしれない。

幾千の命が海に消えていっても、この国は反省も後悔もしない。日本海溝に沈んだ数万本の骨たちは、誰を恨むのだろう。出来ることとならば、彼らの無念を、この背中に背負いたいと思う。わたしの背中は同年代の女の子と比べても、だいぶ狭い。けれど人間の命を背負うことはできる。わたしの身体は誰かのものではない。そしてわたしのものでもない。どこか、超越的な存在に、所有されている。そう信じている。信じているだけで、現実はずうと、分かっている。確信と理解は相反しながら同伴する。わたしはあまりにも深い郷を、

この等式に感じる。

何を考えているのか、だんだん自分でも分からなくなってきた。意識の混濁は激しい。わたしの手はもう動くことを拒否している。脳もだ。足もだ。頭の毛の先っぽから、足の指の先端まで、わたしの身体中が、もう休め、と優しく囁いてくる。わたしはそれに従いそうになるのだが、脳の一欠けら、きつと細胞一つくらいの捻くれ者が、がむしやらに叫ぶのだ。

「まだだ！」

それでわたしの心は息を吹き返す。甲子園のマウンドで膝を突いた球児に、応援席から一閃の声が刺さるように、わたしはぐっと太股に力を込め、まばゆい太陽に目を細めながら立ち上がる。キャッチャーはいつだってわたしの球を待っている。わたしは投げるだけでいいのだ。そんな簡単な動作が、どうしてできない？

この世で生きることとは、結局とても単純なことなのだと思う。死ななければいい。極論すれば、そうなる。子供をつくって、孫たちに見守られながら床の間で死ぬ。資産額は一千万。マイホームを持ち、マイカーを持ち、休日には家族で出かける。夕食には楽しい子供たちの笑い声。それらはとても素晴らしいものだ。誰もが羨む、理想だ。だが、それもやはり死んでいないだけだ。公園の片隅でダンボールの温もりに守られながら眠る人間と、ぴしっとした高級ブランドのスーツに身を包んだ一流企業のサラリーマンも、何も変わらない。死んでないだけだ。人生の生きがい？ 人間はなぜ、生きるのか？ そんなものを追い駆けようとした人間たちは、みんなどこかに行ってしまった。この世は弱肉強食だが、弱者は決して初めから死んでいるわけではない。捕食されることを前提にして生まれた稚魚たちは、生まれた瞬間、確かに海の中を泳いでいた。次の瞬間には、どこかの胃の中で消化されているとしても。

弱者は弱者であっても、死者ではない。

わたしのように！

唐突な欲求が、わたしの中に生まれた。知りたい。わたしはもっと知りたい。何を？
全てを！

少女Bが観察対象を世界へと変遷させるまでの貴重な経緯（7）

試験管の中で生み出された人工生命の細胞分裂を観察する科学者のように、わたしは自分の中に唐突として生まれた欲求を眺めていた。なんだろうこれは。本当にこれはわたしが生み出したものなのだろうか。薄ら寒さを感じる。自分で自分を制御できないことへの恐怖。いや、そんなもの昔からそうだったではないか。むしろ、完全に自分をコントロールできたことが今までであっただろうか。無いとはい切り切れないけれど、少なくとも多くはない。わたしの人生のほとんどは、わたしの無意識の悪魔に左右されたのだ。

しかし無意識とは悪魔的であると同時に、わたしをここまで導いてくれた天使でもある。そういう意味では、わたしは無意識を愛していると言っても過言ではない。そもそも愛という単語の意味をよく知っていない。愛とは生殖活動のために必要不可欠な感情であり、男女が物理的に接合するために、その結果新しい生命を生み出すために必要な要素である。そんなことは分かっているのだ。だけれども、そこに愛はない。そう。愛はなくとも、人は人を生み出せる。生物としての義務を果たせる。ならば、人間に愛は必要か？ 必要ではないか。神様の最大の誤算ではなからうか。神様だって間違いは起こす。小学生が足し算を間違うくらいの微笑みさで、神様は些細な間違いを起こした。その結果、何十億の人間が不幸のどん底に突き落とされようと、神様にとっては、やはり単なる計算間違いでしかない。

わたしは全てを知りたいと思った。思っただけで、行動はまだできない。そもそも全てを知ろうとしたら、一体何をすればいいのだろうか。答えは、目の前にあるような気がして、それが幻想であると、わたしは何年も前から知っていたはずだった。光の速度で交差する世界に、真実はない。人間は人間の歩く速度でしか、情報を処

理することはできない。一秒間に何億もの文字列が、世界を飛び交っているが、そこに真理は何一つとしてないのだ。金儲けの手段や、戦争の引き金は無数に転がっていても、人間が本当に知りたいことは、欠片も落ちてはいない。

さて、わたしはどういう行動に移ればいいのかだろう。わたしの足りない脳で弾き出された解答は、図書館へと出かけるというものだった。しかし今は夜も深い。昼間の住人である図書館はもうとつくの昔に閉まっている。ならばどうする？ アイ・シンク。考え、そして思い付いた。素晴らしく、そして憎たらしい発想が、わたしの脳の端つこで花火を上げた。イナセな声を張り上げた花火師たちが、競い合うように一斉にスターマインした。

この考えを実行するためには、わたしは外に出なくてはならない。寒気がぞぞつとわたしの服と皮膚の間を這った。無数のミミズが土の中から飛び出してきて、襟首から服の中に入ってきた感触だった。気持ち悪いを通り越して、いっそのこと快感だった。ミミズたちに体中を蝕まれながら、わたしの感覚は氷細工のように鋭さを取り戻していく。

三尺玉が夜空に花開いた。

火の粉の雨が、隅田川に降り注ぐ。

決意の槍がわたしの身体を肩から脇腹まで貫いた。その痛みが楽しくて、わたしはパソコンの電源を落として、黒い画面に映る自分の醜い顔を見て、この上ないほどの愉快な笑顔をつくった。行こう、行くしかない。どこへ？ どこへでもいい！ どこでもいいのだ！ わたしはたった今、自分しかない世界を飛び出して、六十億の死が蔓延る世界へと飛び立つのだ。まさに井の中で栄華を極めたカエルが、大海に出て雑兵からやり直すように。カエルは後悔したか？ いや、カエルだってわたしと同じように、水面に映る自分の醜悪な顔を見て、満面の笑みをつくったに違いない。落ちることは決して後退ではない。同じ場所で上へと登り続けることこそが、衰退

の始まりなのだ。人間は腐る。夏場の生ゴミよりも早く。腐った人間はゴミブリも食わない。

少女Bが観察対象を世界へと変遷させるまでの貴重な経緯（8）

ソクラテスは言う。全てを知ることはいくつかできない。人間は無知を自覚しなければならぬ。孔子も言う。知らないことを知らないことと認めることは、知ることであると。だからどうした、である。それでもわたしは知りたいのだ。わたしが知りたいのだ。文句なんて言わせない。否定なんてさせない。不可能だなんて言わせない。わたしはこの世で起き得る全ての事象を、いわゆる森羅万象という奴を、このちっぽけな頭の中に収めたいのだ。キャパシティオーバー？ だったら箱を、頭蓋骨をぶち破ればいい。単純なことだ。わたしの脳に入りきらないというのなら、わたしの脳を圧迫している頭蓋骨をチエーンソーでぶった切ればいいのだ。そうすればもつと知識が情報が収納できる。壊れた脳髄は果たして情報のソースを飲んでくれるだろうか。正義のメディアはのたまう。できるかできないかではない、やるのだと。いい言葉だ。わたしもそのように生きたい。やるのだ。情報を、無限大の情報を、知識を、この世に存在する全部を、この頭の中に押し込めるのだ。

そのためには！

外に出なくてはならない。この狭い部屋を飛び出さなければならぬ。それはとてもとても、辛いことだ。わたしにとっては。頭蓋骨を割ることよりも数千倍難しいことだ。この部屋の扉を開け、廊下を歩き、階段を降り、台所を横切り、玄関で靴を履き 　まだわたしの靴があるかは謎だが 　あの死臭漂う馬鹿野郎どもの世界へと足を踏み入れねばならない。そうしなければ世界は知れない。フィールドワークは必要不可欠だ。研究室に籠っているだけで、植物や動物の世界を知ることはいくつかできない。論文は書けない。ゆえに研究者として落ち零れる。お金が入らなくなる。わたしはそんな研究者を見下している。ネットで集めた情報をコピーして、レポートとして提出する学生のような、卑怯者になるのは侮辱以外の何モノでも

ない。わたしは確かに今、客観的には彼らよりも下にいるけど、少なくともわたしの観点からは、彼らを足蹴に出来る位置にいたい。彼らが羨むような、高い高い世界を見渡せるジャングルジムの上に両の足で立っていたい。シーソーに乗ってモーメントの勉強をしている理学部の学生たちに、一つの石を投げて、アインシュタインの講義をかましたい。

わたしは外に出るための準備をしなければならない。それこそK2に挑む山岳隊のような、入念な準備と覚悟が必要だ。わたしは生きて帰ろうなんて思っていない。そんな甘い幻想を抱いてはいない。ゴッドウィンオースティンの山頂で、世界二位の屋根の上で、この世を見渡すことができたら、わたしは青黒いオゾン層を抱くように両手を広げて、ゆっくりと後ろに倒れて、断崖へと身投げするのだ。なんという幸福感だろう。人類として最高の死に様は、このようなものに違いない。教科書に載せるべき死に方だ。

とにかく準備を始めよう。わたしは震える膝を両手で固定しながら、なんとか立ち上がった。立った途端に血が重力に引かれてぐいっと下半身に落ち、一瞬だけ意識が遠のいた。よろめいて、本棚に手をつく。その衝撃で本棚から一冊の文庫本が床に落ちた。ばさつ、と落ちた文庫本のタイトルは『ダーク・レッド』。確かアメリカの作家のSF小説だったと思う。読んだのが中学生の頃だったので、もう内容は忘れてしまった。老人がどこかの星の赤い海で、何かを探す物語だったような気がする。結末は　バッドエンドだったような、違うような。わたしはその本を手に取り、じっと表紙を眺めた。イラストも何もない、殺風景な表紙だ。まるで中学校の頃のわたしの精神を象徴しているような、つまらない表紙だ。わたしはその本を持っていくことに決めた。何かの意味があるわけではない。では何故持っていくと思ったのか？　思い出だ。感傷的な自分自身に嘲笑を禁じえないが、少しぐらいこういった感情を残すのもいいだろう。この本の一頁一頁には、中学校の頃のわたしが挟まって

いる。次に起こるハプニングを期待してページをめくったときに吸った教室の空気を、この本はきちんと保存してくれている。だから持っていくのだ。これは感謝だ。

少女Bが観察対象を世界へと変遷させるまでの貴重な経緯（9）

いざ発とう、と意気込んだはいいが、足が動いてくれなかった。また涙が零れそうになった。もしもこの涙が脚に落ちれば、絵本の物語のように突然動き出したりしないだろうか。そんな奇跡的な力が、わたしの涙に宿っているはずがない。分かっている。分かっている、期待してしまうのは人間の業だ。わたしは人差し指で涙を掬い、自分の脚に擦り付けた。何の変化もない。わたしは何だか楽しくなって笑った。そうだ、何も起こらない。起こらなくていいのだ。ここで何か魔術的な、夢見がちな出来事が起こってしまえば、わたしは踵を返して引き返したに違いない。わたしは自分で熱量を消費して、細胞を動かして、歩いていきたいのだ。自分の脚を自分の意思で動かして、行きたいのだ。そうでなくては、何の意味もない。

部屋のドアを開けた。蝶番がギリと鳴いた。びくつと身体が反応する。何も怖くない。そうだ、何も怖くないんだ。自分に必死に言い聞かせる。蝶番、お前はきつと皮肉っぽい笑みを浮かべているに違いない。何だ、出て行くのか？ 何分持つか見ものだな。わたしは薄く口元を歪める。さようなら、と蝶番に言う。蝶番は螺子を丸くする。そしてこう言う。「おう」と。わたしはきつと、彼とは仲良くできたと思う。でも、これで彼とはお別れだ。一生の。

一歩進むたびに血液が逆流しそうだった。しばらくぶりに訪れた我が家は、多大なる違和感を土産にして、わたしを迎えてくれた。壁が床が天井が柱が家具が、明かりも点いてない闇の中で、わたしを見下しているように感じた。「愚か者が部屋から出てきたぞ」。誰もかもが、そんなふうになつてわたしを見ていた。くすくすという忍び笑いも聞こえた。怖かった。足が震えていた。けれど、足は止めなかった。冷たいものが体中を覆っていた。唇がふるふると鳴いていた。眦に滴が溜まって行く。しかしそれを零さない。絶対に。歩け。

歩かなければ、死あるのみだ。進むか死ぬか、選択肢は二つしかない。どっちを選ぶ？　今までのわたしならば迷わず死を選んでいただろう。でも今のわたしは違う。さっきまでのわたしと今のわたしは、何が違うのだろう。いや、何も変わらない。変わらないけれど、今のわたしは進むの選択肢を選ぶ。変わらないのに、何故？　いや、わたしは変わらないけれど、世界が変わっているのだ。世界は、時間を進ませた。地球は確かに自転して公転した。だからわたしは選択肢を変えるのだ。この世は相対的に動いている。当たり前だけど。

玄関まで来た。扉を開け、数歩進めば、外だ。外なのだ。どうする。ここまで来て、わたしの心に迷いが生じた。何て弱い心だ。自己嫌悪がぼうつとわたしの身体を焼きそうになる。ならば焼き尽くしてみる、とわたしは自分を叱咤した。焼けるほどの熱量がわたしにあるのなら、その熱量でもってわたしを突き動かしてみる。こんなふうに。

そして風。

草の匂い。

月明かり。

呆然として、わたしは一体何をすればいいのか分からなくなった。しばらく、家の門の前で立ち尽くしていた。美しかった。世界はこんなにも美しかったのかと、わたしは感激に何もできなくなった。何もしたくなかった。今この瞬間、隕石が落ちてきて誰もかもが滅んだとしても、わたしは一切の後悔をしないと言い切れる。それほどこの世の中は美しかったのだ。

あああ、何の言葉も出てこない。この美しさを人間の言葉でなんか表現できない。もちろん機械の言葉でも。この世界を全て正確に言い表せることのできる言語を誰か、開発してくれないだろうか。そうしたらわたしは必死になって勉強する。世界で一番、その言語を使いこなすことのできる人間になってやる。

わたしは一步、さらに踏み出した。

さあ、この美しい世界の、どこへ行こうか。

女性Cが乗った山手線新宿駅からの外回り列車（1）

昔、十年ほど昔のことだが、夢を見ていた時期があった。もちろんここで言う夢とは、寝ているときに脳裏に駆け巡る、空想的世界のことではない。現実から目を逸らすための逃避先である夢のことである。是非はともかく、私は夢を見ていたのだ。それはとても苛烈な夢だったように思う。激しくて、綺麗で、まるで白い火の粉を散らす溶解した鉄のような、決して触ることの出来ない、夢のような夢だった。私はその夢を、とても大切にしていたように思う。胸の中の冷凍庫にちゃんと入れておいて、溶かすことのないよう毎日必死に手入れをしていたように思う。まるで、冬場に作った雪だるまをいつまでも保存しておく幼子のように。やってみれば分かるが、冷凍庫に入れておいたからと言って、原型をずっと保っておくことは、不可能だ。いつの間にか崩れて、悲しい姿になってしまふ。私の夢もそうだった。気付けばぼろぼろで見る影もなくなっていた。雪だるまを玄関から春先の庭に投げ捨てたように、私も春を覚えて夢を捨てた。

私が思い描いた夢とは、会社の飲み会の帰りに電車のシートの上で吐きそうになるような光景ではない。決して。

吐き気を我慢するのはたいして難しくなかった。慣れとは怖いもので、吐くのを我慢する術を、私は長いオフィスレディ生活で自然に身に着けていた。まず大きく深呼吸する。しばらくはそれで持つ。それでも駄目なら、あとはとにかく自分の身体を信じることだ。これが意外と利くのだ。弱気になった方が負けだ。電車内の床に消化し切れていない焼肉をぶちまけるなんて、あつてはならないことだ。焼肉のことを思い出したら、喉元までカルビが逆流してきた。私は口を押さえ、涙目になりながら、必死にどろどろのカルビを飲み下した。クソ不味かった。嫌いな上司を前にして食べたときも不味かったが、今味わったゲロの味はもっと最悪だ。囚人が牢屋で排泄し

た糞よりも糞だ。そんなものを胃の中に収めなければならぬ私はもつと糞だ。

都会の光は車窓に流れる。素直に綺麗だと思った。私の地元ならば、今の時間は一寸先さえ見えないほど真つ暗だろう。誇張でも自嘲でもなんでもない。事実だ。昔、中学校の頃、部活帰りに自転車に帰っていたとき、ライトが切れて、目の前が真つ暗になったことがある。本当に何も見えない。闇、という単語の本当の恐ろしさを、私はあの時初めて知った。生きた心地がしなかった。わずかな星明りを頼りに、田んぼのあぜ道を綱渡りのように走って帰った。よく無事に帰れたと、今でも自分自身を褒めたくなる。

それに比べて、都会は何と明るいことだろう。光は安心する。間違ひなくする。しかしその明るさが、私の酩酊した頭の中で、些細な化学変化を起こし、感情を隆起させた。私のアパートは池袋駅から歩いて十五分ほどの距離にあるが、今日は帰らないことにした。明日も会社である。でも行きたくなかった。死んでも行きたくなかった。携帯を取り出す。メールが数件来ていた。無視して、電源を切った。本来、電車内では携帯の電源を切るのは当たり前だ。最近はどうもその限りではないようだ。だが切った方がマナーとしては正しいだろう。私は正しいことをしたのだ。十五分以内に返事を返さなかったなんて、後で文句を言われようが知ったことか。

終電の近い車内には、くたびれたサラリーマンやOLたちの死体が連なっていた。彼らも、私も、皆死んでいる。どうしてこうなってしまったのだろうか。私の夢は今、どこにいるのだろうか。シートにもたれ掛かり、私は「もう嫌」と呟いた。誰にも聞こえていないはずだ。

徐々に速度が落ちて、電車は新大久保駅に着いた。

女性Cが乗った山手線新宿駅からの外回り列車（2）

まだ私が夢を見ていた頃、優しい人とキスをしたことがあった。

付き合っていた訳ではない。事の成り行きとでも言うか、その場の流れというか、とにかく不可抗力で私は初めて異性と唇を交わしてしまった。優しい人は、本当に優しくかった。具体的には、私にピンタを食らわしてくれた。怒りながら、怒鳴りながら、私の頬をその優しい手の平でぶつてくれた。分かる人には分かるであろう。怒りの末に誰かを傷つけるという行為は、優しさに他ならない。本質的には、みんな理解していることだろうと思う。優しい人は本当の優しさを私に教えてくれたけれども、私は彼を好きにはならなかった。彼は優しすぎたのだ。過ぎたるは及ばざるがごとし、という諺の通り、彼は優し過ぎたが故に、孤独だった。彼の優しさは報われなかった。彼はこの世に生きるどんな聖人よりも聖人らしかったが、それが彼から人を遠ざける原因になっていた。私は彼を愛してはいなかったけれど、彼のことを心の底から可愛そうだと思った。これは私の傲慢である。私は彼を見下していると自覚しつつ、彼に同情した。彼のために、涙を流した夜もあった。クラスの仲間たちと学校帰りにカラオケに行つて、トイレのために個室を出た後、不意に彼とのキスの味を唇の先に思い出して、その場で泣き崩れた。彼は優しくかった。なのに孤独なのだ。この世の理不尽に、不条理に、私の感情は震えた。どうして苦しむべき人間が笑い、笑うべき人間が泣くのだろう。幼い私には、まだそのことが理解できなくて いや、理解したくなくて、彼のためを思って、傲慢の涙を零した。

焦点を合わせないで眺める景色は点ではなく線だ。シャッターを開けたままのカメラで星の動きを捉えた写真のように、私の目は流れる景色を流れるままで見ている。看板に何が書いてあるかも分からない。あのビルの根元で、私の知人が殺されていたとしてもその現場を見た唯一の目撃者だとしても、私は何も話すことができ

ない。私の目は見ているけれども認識はしていなかった。網膜から入ってきた情報は脳に到達する前に、後頭部を回り込んで半開きの口から抜けていく。酒臭い息と共に、車内に充満していく。私の吐く息だけではない。車内はそんな空気で満たされている。しかしそれがどこか心地よくもあった。夕暮れの部活のロッカーのような雰囲気が、かすかにあった。同じ釜の飯を食べた仲間が発する、同じ空気。何でもいい。何かを誰かと共有することは、それだけで人生を豊かにしてくれる。たとえそれがアルコール交じりの臭い空気だとしても。

私の両隣には、まだ誰も座っていない。何となく、こういうとき、自分が避けられているのではないという不安に駆られる。実際には偶然だとしても、気にせずには入れない。かと言って、両隣に人が座っているのもやはり不快なのだ。何て面倒くさい、と自分でも思う。しかし人間なんて生きてるだけで面倒を起こす生き物なのだ。ちょっとくらい面倒なくらいが丁度良いのかもしれない、なんて良い訳がましい事を考える。

ガタンガタンと、電車は揺れる。高校の頃は、地元のローカル線に乗って高校まで通っていた。そのローカル線は朝と夕だけは学生で込み合うが、昼間はほとんど人が乗っておらず、いつ赤字で廃線になってもおかしくなかった。しかし私はそのローカル線が好きだった。ガタガタと尻が痛くなるほど揺れたが、その揺れが馬鹿になったシートのスプリングとほどよく調和して、揺り籠のような安心感を私に与えてくれた。そのせいで、帰りには降りる駅を寝過ごししてしまうこともしばしばあった。今となっては懐かしい思い出である。

山手線とそのローカル線を比べれば 比べるのも恥ずかしいくらい、総合的には山手線の圧勝だが、やはり私はあのローカル線に軍配を上げたい。単なるえこひいきに過ぎないが、思い出の場所とはそれだけ人間の心を動かすのだ。思い出とは、美化された記憶と

は実強い。

女性Cが乗った山手線新宿駅からの外回り列車（3）

高田馬場駅を出て、列車は目白駅へと向かう。

「君は、無粋だな」

大学のサークルの飲み会で言われた言葉が脳裏をかすめた。何でそんなことを言われたのか、よく覚えていない。ただその言葉だけが、私の海馬の一部にべっとりとこびりついている。まるでアスファルトに吐き出されたガムみたいに。時間が経つにつれて、粘着力は強固なものになって、今ではもう引き剥がすことを諦めていた。おそらく、私は死ぬまでこの言葉に縛られるのだろう。死ぬ直前に思い出して、結構な後悔を引き起こすかもしれない。他人から言われた言葉は、凶悪なまでに言われた人間の心に残る。言った方は何気なく呟いただけかもしれないけれど。

私は無粋なのだろうか。そもそも無粋とは何なのか。どういう性質を指すのか。私はよく知らない。けれど、何となく自分が無粋だと言う自覚はある。空気をあまり読もうとしない、と言い換えられるかもしれない。社会人だから、最低限の礼儀は保っている。しかし、目の前に起こり得る事象が、私の心の奥底に眠る何か。多分、それを人は意地を呼ぶのだろうけど。にとつて気に食わない場合は、私はそれをさり気無く拒否する。しかしこれだけではただの頑固者だ。無粋、とは少し違う気がする。

風流を解さない。これも無粋と言う奴だろう。私は鹿脅しが好きである。カッコン、という竹の音の響きが好きである。でも、それだけだ。カニクリームコロッケが好き、というのと同じレベルである。これは風流とは言わない。自分でも分かっている。だから私は無粋なのだろうか。結局のところ、私は無粋ということ完璧には理解していないので、自分が無粋なのかそうではないのかの判断をすることができないのだ。知らないことは罪だと、今更ながら思う。

詮無いことを言う。私は誰かと一緒に暮らしたい。結婚がしたい訳ではない。私は結婚という法的約束には何の意味もないと思っている。男女が一緒にいたいだけなのに、何故国の許可がいるのだろう。それこそまさに無粋ではないか。とにかく、私は誰かと一緒にいたいのだ。家のドアを開けたら、おかえりなさい、と言われたのだ。何て、甘い夢だろうかと思う。妄想にも程がある。私は自分自身に皮肉めいた笑みをぶつけた。アルコールのせいだと言い訳しておいた。夢を見る年頃なんてとくに過ぎたと思ったのに、私はまだ幼い夢を見続けてしまう。悲しい性である。でも、そんな自分が嫌いになれない。私は結構ナルシストなのかもしれない。

女性Cが乗った山手線新宿駅からの外回り列車（4）

特別に悲しいことがあった訳でも、辛いことがあった訳でもない。ただ、何もかもが嫌になったのだ。人間、長く生きていればこんな境地になることもある。私の場合、それが今日で今だったというだけだ。別に狂っている訳でも何でもない。むしろ健常過ぎて精神科医から引かれるほどだろうと思う。しかし普通過ぎるというのをもまた異常なのだ。では一体、精神的に健康という状態は、どのように得られるのだろうか。針は振り切れていても、真ん中で止まっている駄目。ならば針はどこを差していればいいのか。決まっている。自分の心の赴く方向だ。結局は、普通か異常かなんて、人間を差別し貶めるために制定されたあくどい規則でしかない。法律はいつだって強者の味方だ。弱者を廃去するために作られたのが口ウだ。世間様はいつだって財力や権力に微笑む。

自分が何を考えているのか、ふと分からなくなるときがある。自分の脳を自分で制御できなくなつて、明後日の方向へと走つていつてしまう。私の理性はそれを必死に追い駆けるのだけれど、なかなか追いつかない。本能は理性よりも数段足が速い。気が付けば遠くに離れていて、理性はいつも振り回されてばかりだ。けれど理性はそれを少し楽しんでる節がある。本能の背中を見続けることに、ちよつとした好意を抱いている。悲しいかな、理性は一生、本能に適わないことを知っている。だからせめて、部活の先輩に恋焦がれる後輩の女子生徒のように、本能の後ろを追い続けるのだ。

瞳の奥にしまった幻想を、そつと瞼に蘇らせてみる。鮮やかな緑色が眼球の上を滑るように踊る。子供の頃、それを眺めているのが好きだった。自分の中にだけ存在する、不思議な映画館。自分だけが観ることのできる、魅惑的な映画。私は自分が特別な存在なのだと信じていた。自分は漫画の中の主人公みたいに、神様に選ばれた

人間なのだと、子供の頃は疑わなかった。誰でも一度はそう思うだろう。しかし同様に、誰もがそうではないと、大人になる過程で気付く。本当に選ばれた人間というのは稀有だ。一万人に一人、確かにいる。だが私は残りの九千九百九十九人の一人だった。私は選ばれなかった。それは生まれた瞬間から決まっていた。神様がサイコロを振って、私には三の目が出た。一ではないし、六でもない。中途半端で、人生を諦めるにもちよつと勿体無いような数字。それが一番やかいだと言うことを、今の私は理解している。勿体無いそれは破滅への一歩目である。

そう、私は人生を諦めた訳ではない。私はまだまだ生きようとしている。しかし、今日はちよつと特別な日なのだ。ちよつと日常からはみ出してみたくなったのだ。

「はんっ」

私は鼻で笑った。狂気に入ろうとしているくせに、正気を手の中に握り締めている、何て女々しい人間だろうか、自分は。そんな性格だから、いつまで経ってもパツとしないのだ。行くときは溺れるまで行けばいい。墮落するときとはことん堕ちるべきだ。こんなことを考えつつも、脳の端っこではやっぱり保険のような正気を保っていて、それがさらに私の自己嫌悪を深くさせた。どうして私は、こう、思い切りがつかないのだろう。躊躇してばかりで、いつこうに飛び出そうとしない。飛躍するためには命を投げ打つ必要があると分かっていながら、やはり命を惜しんでしまふ。そんな臆病者でしかないのだ、私は。

女性Cが乗った山手線新宿駅からの外回り列車（5）

私の帰る場所は一つしかない。

学校から出て真っ直ぐ商店街を歩く。シャッター街と揶揄されてしかるべきな商店街で、開いている店は三軒に一軒あればいい方だった。ほとんどの店が潰れたか移転したか。ゴーストタウンにも似た雰囲気の商品街を、セーラー服を着た私が歩いている。首にはマフラー。手には手袋。寒風が吹きすさび、街路樹の茶色い木葉がタイル張りの地面から舞い上がる。商店街には誰もいない。生き物の気配がない。私と冬の風だけが、商店街を通っている。そんな殺風景な光景が、私は好きだった。この世に自分と冬だけしかないような、心地よい征服感が私を満たしていた。くるっと、スカートを翻して、ステップを踏む。足元の落ち葉が剥き出しの脚に絡みつくように浮き上がった。誰もいない。孤独だけれど、これは閉ざされた孤独だ。商店街の向こうにある駅には、付近の学校から集まった学生たちがたむろしていることを知っている。一時的な孤独だと分かっていたから、私は何も不安に思うことなく、この湿った心を乾かす冬の風に身を任せることができるのだ。冬の空の、低くて弱い太陽が、オンボロの屋根の隙間から見えた。腕を伸ばして、その光を遮ってみる。遮るまでもない、なんて健気で弱々しい光。冬は太陽をも支配する。私が冬が好きだった。身体を貫く寒気に、私は快感を覚える。ぴりりとした空気に身を晒すと、白い息を吐きながら、自然と笑顔になる。そのときの笑顔は、私の一番可愛い表情だと自覚している。この笑顔なら、どんな男の子でも落とせる自身があった。しかし、その笑顔は私が一人で冬と対峙したときにしか作ることができないので、現実には不可能だった。私は決してモテる方ではない。高校に入るまで交際経験はなかった。興味がなかったわけではない。むしろ人よりも興味を持っていた。けれど、興味を持ちすぎているがゆえに、臆病になっていた。白馬の王子に憧れる少女

が、あまりにも醜い現実には幻滅するような恐怖を、私は子供の頃抱いていた。身も心も成長し、この世の惨さを知ってから、割と気軽に恋ができるようになった。要は、期待し過ぎていたのだ。現実にも夢にも。

駅につくと、やっぱり同年代の少年少女たちが他愛のない話で盛り上がっていた。そのときどんな話をしていたのか、今となっては思い出せない。何をあんなに楽しく、馬鹿らしく、幸せそうに、話をしていただろうか。どうでもいいことに、金にならないことに私たちは夢中になっていた。それは数百億を積んでも得られない幸福なのではないだろうか。お金に換算できない情報に見向きもしない大人たちは、どう頑張っても真実の幸せに到達することはできない。何も考えず、ただ明日の授業で先生に指されることを不安がる彼らこそ、全人類が目指すべき終着点なのではないだろうか。彼らはあのととき、死んでおくべきなのではないだろうか。人生の絶頂期で死を迎えることは、羨むべきことである。

ホームの端に立つ。白い息が、灰色の空へと昇っていく。日除けの屋根の下で、みんなのざわめきを聞きながら、私は確信を得る。ここが私の帰る場所だと。これから何年、何十年が過ぎたとしても、私の心はこの場所に帰ってくるのだと。確信でも勘違いでも、どちらでも構わない。大人になって、何かを忘れ、何かを得ていたとしても、私はこの場所を、この時間を、忘れないだろうと思う。だって、私は今、こんなにも幸せな気持ちなのだ。マフラーを持ち上げる。幸せすぎて、ちよつと泣きそうになった。この時間がいつまでも続かないことは分かっている。あと数分で電車が来て、私たちはそれに乗って、家へと送られる。永遠じゃない。分かっている。だからこそ、幸せがここにあるのだ。いつまでも続く幸福感は地獄に最も近い。あつてはならない。幸福感は刹那的であるがゆえに、価値を持つ。両手に息を吹きかけた。冬も、いつかは終わる。やがて春が来て、夏が来て、秋が来て、そしてまた冬になる。日本は良い国だ。四季がある。それだけで、私は日本に生まれて良かったと思え

た。この世に生まれて良かったと思えた。乾燥した空気は音をよく通す。レールに振動が伝わっていた。音がする。電車がやって来る。皆の視線が一点に集まる。レールの向こう、電車の顔がゆっくりと近付いてくる。ああ、何で、こんなにも冬の駅は美しいのか。

騒がしい池袋駅を出発して、私を乗せた山手線は大塚駅へとひた走る。

もう涙も出てこない。諦めているから。私には帰る場所がある。しかし帰れない。物理的にも、精神的にも。私はもう子供には戻れないし、あの頃の心境を取り戻すことなんてできない。ただひたすらに切なかった。どうして私たちは大人になってしまふのだろう。嫌だった。もう嫌だった。大人になってしまふことが、世の中に自分の心が汚されてしまうことが、嫌で嫌で嫌で仕方が無かった。何もかもが憎くなって、その憎悪が結局は何も生み出さないということとを大人の私は知っていて、そんな大人の私を憎たらく思っていて、やっぱりその憎悪は何も生み出さず、ストレスのみが胸の中に溜まっていく。

女性Cが乗った山手線新宿駅からの外回り列車（6）

あれはいつの事だろうか。よく覚えていない。何となく、記憶の隅っこに埃のように薄く積もっていた光景なのだが、私は実家の二階の出窓の中に座り、雲を眺めていた。青い、とても青い空だったように思う。得てして記憶は美化されるものだが、私は確信を持って、このときの空は東京で見上げるいかなる空よりも美しかったと断言できる。とにかくいつまで眺めていても飽きなかった。空を飛ぶ様々な形の綿雲を、飽くことなく見上げていた。それは甘美な時間だった。創造的で、知的で、貴重な空間だった。私は生きている証を空に見出そうとしていた。自分がこの世界でいかにちっぽけか何となく分かってきた歳だったのかもしれない。私は空の雲を追うという行為によって、何かしらの逃避をしていたのかもしれない。人生はもうすぐ後ろまで迫っている。私は目を逸らしたかった。見なくなかった。汚い現実なんて。私は振り向くことなく、空を見続けていた。晴れた空には汚れなどない。雨となって雪となって、時には雷となって、この地上に落としたからだ。地上は空のゴミ捨て場だ。私は貧民街のぼろぼろの布切れ一枚まとった幼い少女のように、スクラップの山の上から、羨望の眼差しで富裕層の住む高層ビル群を見上げているようだった。私だけではない。この地上に生きている全ての人間たちは、結局みんなそうなのだ。ゴミの山から、無垢な瞳で空を見上げている。そんな切ないほどの純粋な人間たちは、今日もやっぱりゴミの山からゴミを掘り起こして、ゴミを運び、ゴミで飢えを満たすのだ。人類皆兄弟。いい言葉だ。

私は結局絶望していたのだ。この世の汚さに。ゴミ屋敷のような東京砂漠に。そして同時に、その絶望が最終的には自殺にしか繋がらないことも知っており、臆病なことには定評のある私は、死から逃れるために、胸の中でふつふつと湧き上がる絶望に蓋をして、必死に見ないようにしているのだ。今にも吹き零れそうな絶望は、し

かし死の恐怖には適わない。動物の生への本能によって、今、私は生きていると言ってもいい。金が欲しい訳じゃない。旦那が欲しい訳じゃない。綺麗な死に方をしたい訳じゃない。死が怖いから、逃げていただけだ。なのに、だのに、どうして、私はこうしてアルコールに脳を浸しているのだろう。気に食わない上司の小言を延々と聞かされねばならないのだろう。いけ好かない同僚に笑顔を向けなければならぬのだろう。私が太平洋のとある小島の原住民だとしたら、焼肉のプレートに真っ先に彼らの目ん玉を乗せて食ってやるのに。殺さない程度に肉を剥いで、石焼ビビンバにのせて食ってやるのに。カニバリズムとカーニバルは派生言葉だと言う。昔、人を食うことはお祭りだったのだ。まさしく、である。人を食うということは、何と躍動的で、神秘的な行為だろうか。京都の祇園祭の日だって、鉾の上に半死の人間を吊り下げて、路傍に集う人々へ少しずつ切り分けて与えてやればいいのだ。大工の息子の血や肉だってワインやパンになる時代である。そこら辺にいる一般人の肉でも、米粒くらいにはなるだろう。

女性Cが乗った山手線新宿駅からの外回り列車（7）

巣鴨から駒込まではあつと言う間だ。

何だか昔のことばかり思い出している。私も歳を取ったということだろうか。動物の細胞は老いる。自然の摂理だ。荒野に置き去りにされた戦車は、風雨と砂によって錆びて朽ちる。辛い歴史を忘れさせようとして、神様は必死に万象を破壊する。時間の経過による自然消滅。それは神様がこの世に与えた唯一の優しさだ。物体も記憶も、時間と共に消えていく。その優しさに甘えるように、人類は戦争を繰り返し、弾幕の張られた戦場に飛び出した新兵は、神様を呪いながら蜂の巣にされる。さり気無い優しさは、自己満足ではない。そつと差し出された手に込めた万感の想いなど、差し出された方には一切伝わらない。皆が皆テレパシストではないのだ。見つめ合えば、何も言えなくなるかもしれないが、その沈黙の空間に気持ちは流れない。気持ちで繋がっていると勘違いするのは、恋に恋する未発達少女たちだけだ。彼女たちは扇情的な経験を踏むことによって、その勘違いを払拭する。繋がるのは気持ちではなく、肉体だ。

車内の空気はどんよりと私の心を沈めてくれる。鎮めてくれる。それが少しあり難かった。祭りの夜のような、和気藹々として落ち着かない雰囲気は、私の心をざくざくと突き刺して血だるまにになってしまう。飲み会の、互いに互いを思いやり、酒を注ぎ合い、その場に流れる空気や上下関係を必死に汲み取りながら、つまみに箸を伸ばすという単純な行為にさえいちいち気を使わなければならない、あの雰囲気は、私の心に針の雨を降らせ、私の心の風景を血塗れにしてしまう。耐えられないのだ。ときに、私は全ての社会的信用や立場をかなぐり捨てて、上司や同僚の顔面にウォッカをぶちまけ、そこに火を点けたいと思った。やってみようかな、という欲求がぐんぐんと私の中で成長し、それを私の中の一般的理性人が、ちよき

んと鋏で切った。私はそいつを涙目で睨みつけた。

女性Cが乗った山手線新宿駅からの外回り列車（8）

電車は走る。私の迷いや苦しみなど知る由もなく。私が線路に飛び出せば、電車は止まるだろうか。停まるだろう。ホームにアナウンスが流れる。『山手線外回り列車で人身事故が発生……。』。人間一人の命は、電車を一時間も停めることはできない。大都会で、人間の命なんてそんなものだ。掃いて捨てる程の人間たちが蠢く東京で、三十路前の女が一人死んだところで、何が問題なのだろう。何も問題ではない。この世のシステムは何も変わらず回り続ける。警察は手馴れた手つきで事故検分をし、病院に運ばれた肉片は検査医たちによって乱雑に掻き混ぜられ、やがて焼却処理される。そして人間一人がこの世から消える。たった、これだけだ。ある研究者が死んだ直後の人間の体重を量ったところ、生きている時と数十グラムしか変わらなかったと言う。それを多いと見るか少ないと見るかは人によるだろうが、少なくとも私は、命の重さがそれだけかと、私の知らぬ誰かさんのために泣きたくなる。魂なんて、歯が浮くような言葉は使いたくない。人間は血と肉で生きている。決して魂なんという宗教的な存在によってではない。

私は不意に自分の腕をつねってみた。痛い。当然だ。痛快。痛みを感じることは、快い。生きているという感じがする。ああ、私もとうとうリストカット少女の仲間入りだろうか。生を実感したくて自らの血を舐める人間に成り下がるのだろうか。私はいつまでも、空の向こうに人間の生きる意味を見出したいと思っている。錆びたヘモグロビンなんかに見出したくは無い。私は死ぬまで正常でありたい。痴呆老人になんかなってたまるか。私は死ぬまで、自分の目と脳で、世界を把握していたい。白濁した世界に興味などないのだ。なんて、アルコールで朦朧としながら、私は何を言っているのか。説得力の欠片もあつたものではない。泥酔状態と痴呆と寝不足は同じようなものらしい。私は今、そのうちの二つを満たしている。徹

夜明けで飲み会だ。つまり、これは、私はもう世界をちゃんと自分の目で捉えていないということである。私は突然恐怖した。

私は、何だ。

動悸が激しくなった。突発的な不安が、全身を痙攣させた。ビクンツと身体が強張り、私は「ギャアッ！」と声を上げた。何人かがこつちを見た。少し恥ずかしかった。が、何より自分自身に起きたことが信じられなかった。何だ、今は。私の中に住む別の生物が、私の中から這いようとしていたような感覚だった。安っぽいSF映画に出てくるエイリアンのように、私の胎内から食道を通って、もしくは腹を引き裂いて、産まれ出ようとしていた。はあ、はあ、と息が乱れ、背中に気持ちの悪い脂汗が流れた。心臓が落ち着かない。必死にいつもの調子に戻そうと、息を吸ったり吐いたりするのだが、いつこうに収まる気配がない。私はブラジャー越しに自分の胸を掴んだ。何だ、畜生。何なんだ、これは。どうなっているんだ。病気なのか。病気だとしても、心因性のものだろうか。いや、もしかしたらアルコールが変なところに廻ったのかもしれない。

苦しくて、何もできなかった。解決策がなかった。吐き気のような慣れた辛さならはいくらでも我慢できる。しかし未体験の苦しさは、本当に苦しい。どう対処していいのかわからない。いつ終わるのかもわからない。私の頼りにならない知識を総動員して、こういった場合にどうするべきかを考えた。とにかく落ち着こう。心臓をゆっくりとマイペースに戻そう。マイペースは一分間に六十四回。数えてみる。今の自分はどうかだろう。手首の血管に指を当てる。数える。一分経過。百回を越えていた。なるほど、確かに高いが、それほど異常というわけでもない。そう考えていると、徐々に心拍数が落ちてきた。余計なことを考えなくなったので、心が平静を取り戻したらしい。

「はあ……」

駒込駅から出て何分過ぎただろう。田端駅まであと何分だろう。完全に私の身体は本調子に戻った。とりあえずは安心した。先ほ

どの一体何だったのか。今の私には分からない。いや、きっと、死ぬまで分からない。この出来事は私の心の奥のタンスの引き出しのさらに奥に、適当に折りたたんだ時代遅れの下着のように、いつ取り出されるのかも分からず、眠り続けるのだろう。忘れてしまうだろう。でも消えない。ふと、タンスを整理したときに、ふつと手に当たって、ちよつと懐かしく思いながら取り出す、そんな記憶になるだろう。私はそんなどうでもいいような思い出をいくつも抱えている。整理が嫌いな性分なのだ、昔から。

女性Cが乗った山手線新宿駅からの外回り列車（9）

悲しくて泣いた夜もあつたろう。

辛くて死にたくなる朝も来ただろう。

夕暮れの中で、このまま消えてしまいたいと願ったこともあつたろう。

私はそうやって生きてきた。そして生きている。これはある意味で、私の唯一の自慢だ。私はまだ生きている。死んでいない。考えてみよう。私がもしこの世で一番下の人間だとする。一番下の定義は非常に難しいが、まあ お金がなくて一人寂しく生きていて、希望も夢もなくて、不治の病にでもかかっていて、毎日苦しさで悲しさと孤独に襲われている そんな人物だと思ってくれればいい。私はもしそうだとしても、私はやっぱり生きていることを自慢したい。今こうしている間にも、世界中でどんな人間が死んでいく。にも関わらず、生きているのだ。なんと素晴らしいことが。

酔いが、少しずつではあるが、醒めてきた。さて、そろそろ現実に戻らなくてはならないのだが、私の心がそれを拒否した。本来降りる駅であつた池袋を通り過ぎてから、とつくに決めていたことだ。私は今夜、何かを成し遂げたい。何でも良い。格好悪くても野暮ったくてもつまらないことでも、何でも良い。何かを、私の手で、やりたいのだ。そのためには私は何をすべきだろう。そう、まずは電車を降りなければならない。次は？ 西日暮里か。そこで降りよう。あまり降りたことのない駅だが、もうどこでもいい。私はとにかく何かをしたいという欲求に溢れているのだ。場所なんて気にしない。気にしてられない。

覚悟は？ できてない。でもいける。覚悟なんて大層なものは、必要ない。走り幅跳び選手は、いつだって不安一杯で助走を始め、泣きたい気持ちで踏み切る。そして金メダルをもぎ取るのだ。覚悟

なんて一銭の価値もない。要は、やるだけだ。やればいいのだ。私はシートから重い腰を上げた。吊り橋の上を歩く臆病者のように、手すりにつかまりながら一歩ずつ、ドアへと歩む。その一歩一歩がとても貴重なもののように思えた。私が生まれ変わるための十三階段のように思えた。私は今から出て行く。出て、未定なことをする。予定はいつだって未定だから、貴重なのだ。

私の割とお気に入りのハイヒールが、西日暮里駅のホームを踏んだ。

少年Dがベランダで音楽を聴きながら見上げる鈍重な星月夜（1）

月は太陽の光を反射して輝いているという事を学校で教わったとき、自分の足元が崩壊するほどの衝撃を受けた。この夜空に燦々と輝くあの月が、まさか太陽の隷属に過ぎなかったなんて、僕は知りたくなかった。せめてもの救いは、月の周りで健気に存在を主張する星たちが、太陽と同じ恒星で、自ら光を発しているということだ。夜は、まだ昼に屈していなかった。夜の王者たる月が太陽にぺこぺこ頭を下げていても、配下たちの意気は軒昂だ。まだ、戦える。僕は、まだ昼に負けていない。敵はたった一人。あの憎き太陽だ。太陽は人を殺す。熱や光や紫外線によって。なのに、人々は太陽を信仰し続ける。なんという愚か者たちなのだろう。人殺しに供物を捧げ、あるうことが自分たちの未来までも委ねようとしている。ああ、そういう意味では、確かに太陽は王者だろう。権力を振りかざし、恐怖政治で民衆を苦しめるところなんか、そっくりだ。僕が仕えたいのは、月だ。決してあんな暴力的な太陽なんかじゃない。僕は月のためならこのベランダから身を投げてもいい。まあ、二階程度から落ちたところで、月の機嫌をとることなんてできなさそうだけど。今、僕の視界の五分の一くらいを占めているあの高層ビルが一番上から飛び降りれば、月は満足してくれるだろうか。いや、多分、月は歡ばない。太陽と違って、月は人の死を望んでいない。月が望んでいるのは、人間が、また新たな明日を求めることだ。月の輝きは優しさに他ならない。その元が太陽から発せられるものだとしても、一度月を経由してしまえば、その光は月のものだ。たとえ中古品の光でも、こうして人間一人を優しく包むことはできる。月の慈愛的な輝きは一体、どこから来るのか、そのことについて、僕はずっと考えていたい。このまま、死ぬまで、一人で月と対話したい。

ヘッドフォンから流れる曲は、最近人気のアーティストの流行の

曲だが、良い曲だとは思わなかった。なのにどうして聴いているのか。聴いてなどいない。音波を耳の中に入れていただけだ。鼓膜が震えているだけだ。どうでもいいのだ、音楽なんて。本当に集中しているときは、音なんて聞こえない。よく、集中したいときにお気に入りの音楽を聴きます、なんて言う人がいるが、音楽が聞こえている時点で、集中していないではないか。何という徒労。電力と労力と空気の無駄使い。そのときの音楽を保存して、どこかの貧民街のひび割れスピーカーで流してやれば良い。なんでもリサイクル。なんでもエコだ。音楽だって使いまわしできるだろう。人間の科学力は凄いいんだから。

明日は学校だ。明後日も、明々後日もだ。嫌だとは思わない。僕は学校が結構好きだ。それでも僕は明日、学校をずる休みしようと思う。どうして？ 大した理由なんてないし、必要もない。今夜、僕は夜空を見上げている。ああ、こうしている間に、何か格好良い理由が思いつかないかと考えてみるのだが、やっぱり耳からは音楽が入ってくるので、思いつくはずもない。簡単に言えば、ちよつと面倒だったからだろう。あくまで、ちよつと、である。本気で面倒な訳ではない。軽いいたずら心という奴だろう。たまにはいいじゃないか。皆勤賞常連の僕が自分の席を空けても。優等生でいるのに、ちよつと疲れた。たまには自分の心に素直になって、思い切ったことをしてみたい。その思い切ったことが、学校をずる休みする程度だということに、自分の小ささを感じて、似合わない二ヒルな笑みを浮かべてみた。ああ、今、僕は自分に酔っているんだなあ、という自覚がある。でもそれはとても大切な感覚だ。自分に酔えない奴は一生、幸せを掴むことはできない。偉大な成功者はいつの世も、自己陶醉者だ。自己に溺れると、高いポテンシャルを発揮できるようにになる。スポーツでも勉強でも、何でもだ。世の中にはそれを馬鹿にして見下す者もいるが、そういった者は決して偉大な成功者にはなれない。決して。

少年Dがベランダで音楽を聴きながら見上げる鈍重な星月夜（2）

僕が物思いに耽るのは、何も自己陶醉者になりたいがためじゃない。僕はきつと、この世界の何かを掴みたいのだ。何か、とはとても曖昧だが、きつと、一般的に真実とか言われている奴なんだろう。しかしその真実という奴も、人間の定義したやはり曖昧なものに過ぎないので、結局“何か”としか言いようがない。ともあれ、僕はこの世界に確かに存在する何かを追求し探求し追い駆けたいと思っている。これは人類が思考を持ったときから、脈々と続けられてきた価値ある作業である。広大な砂漠から一粒の砂金を見つけ出すような、途方も無い作業を、人類は延々と続けてきた。何故か。何故でもない。もはや本能だ。人類が真実に到達しようともがき苦しみに死にまで追いやられるのは、もう理由とか動機とかいう低次元な問題ではない。人類がこの世界に生きている目的と言ってもいい。真実に触れたいがために、人類は脳を肥大化させ、地球を一日で丸坊主に出来る量の核兵器を生産し、モルモットを乗せたシャトルを宇宙へと飛ばすのだ。僕たちの生活だってそうだ。僕が朝母親に起こされて、重たい胃にパンとコーヒーを押し込み、学校で半分眠りながら授業を受けて、何となく部活動に参加して、綺麗な夕暮れを望みながら家路につくのも、全て例の目的のためだ。東京で働くあらゆる人々が汗みずくになって働いて、その日の糧を得て、相応の幸せを甘受しているのも、やっぱり例の目的のためなのだ。巢に毛虫の死骸を運ぶ働き蟻のように、僕たちは一つの目的に向かって、集団で動いている。秋の文化祭で、木葉の匂いを窓の外に感じながらクラスの皆で出し物の準備をした、あの一体感を、人類は感じてるはずなのに、何故か争ったりする。どのクラスにでもいるのだろう。ひねくれ者という奴が。皆が仲良くしているだけで不機嫌になる困り者が。世界規模でも。

銀色の月に、手を伸ばしてみる。ああ、自己陶醉の極致だ。今の

自分は何て哲学的で高尚な行為をしているのだろう。月に、手を、伸ばす、だって！ ワンダフル！ 思わず笑い転げたくなるような、至極素敵な光景だ。届かないと分かっているものに、手を伸ばす。馬鹿げている！ でも！ なんて人間らしい行為！

叫びたくなった。満月の夜に変身する狼男のように、野性的な獣の声を腹の底から、この夜の街に轟かせたかった。近所迷惑なのでやめておく。もしも現代社会じゃなくて、中世の、夜の街に悪魔が蔓延っていた時代だったならば、この突発的衝動を我慢する必要なんてなかったのだろう。好きなだけ、叫べたのだろう。何だか、羨ましくなった。死の恐怖を常に背中張り付かせていた時代の人間たちは、きっと今の僕らを見て笑うだろう。そして今の僕らも彼らを笑うだろう。一方は、あいつらは不幸な生き方をしていると。一方では、何と原始的なのかと。どちらが本当に笑われるべきかは、改めて言うまでもないだろう。僕は笑われたい。そして謝りたい。

僕はまだ子供だ。若さとは可能性に過ぎない。何だか最近、若ければ若いほど貴重に扱われる風潮があるけれど、間違っていると思う。もう一度言うが、若さとは可能性に過ぎない。価値は、まだないのだ。若いというだけでちやほやされるのは間違っている。本当に価値があるべき人間とは、毎日自己鍛錬を欠かさず積み、その末に何かしらの結果を残した人物だ。年齢は関係ない。百歳を越える老人だろうと、価値はある。二十歳未満の彼ら もちろん僕も含む にはない価値が、紛うことなく存在する。

音楽はバラードが好きだった。しみりと心を湿らせてくれる、特に女性アーティストが歌う、何でもないバラードが大好きだった。失恋とかは、どうでもいい。何気ない切なさとか、ふっと心を撫でる歌詞に、僕は最大限の敬意を表したい。

少年Dがベランダで音楽を聴きながら見上げる鈍重な星月夜（3）

音量を最大にまで上げてみる。ぎん、とつい今まで耳の内部をさわさわとくすぐっていた音波が、暴力的に脳を揺さぶった。それが何だか心地よい。たいして高くない安物のヘッドフォンで音質も良くないが、巨大な音の塊に頭をぶん殴られている感じが、何ともいえない気持ちよさだった。

「ララ……ラ」

思わず鼻歌を歌った。僕は音痴だ。付き合いのためにカラオケに行くこともあるが、本当はあまり好きじゃない。僕は歌うのが好きではないのだ。聴くのが好きなのだ。でも、こうして一人で夜空を眺めながら、お気に入りの曲を口ずさむのは、好きだ。誰かが聴いている訳じゃない。誰かに迷惑をかける訳でもない。たった一人の幸せな空間。部屋の明かりを消しても、東京の街はまだまだ明るい。それでも、この身体に降り注ぐ月からの光の粒子を感じたいがために、僕は自室の明かりを全て消していた。虫が寄らないように、という打算的な理由もある。

ああ、何て幸福な時間なのだろう。誰にも邪魔されず、好きなだけ好きな曲を聴きながら、空を眺める。これが幸せでなくて、何だ。少なくとも、僕は今誰かに、例えば街角で話しかけてくる宗教勧誘の外国人に「あなたは幸せですか？」と訊かれたら、間髪いれず、間違いなく「ええ、幸せです。この上なく」と答えるだろう。何て、何て、僕は今、気持ちの良い空間にいるのだろう。この時間がずっと続けばいいのに。けど、明日の朝日は昇るし、時間は巡る。いつまでも続かないと分かっている。僕はまだ子供だけれど、分別がなくはない。自慢じゃないが、クラスからも一目置かれるほど、僕は冷静で合理的な判断ができる。できるつもりだ。もしかしたら、僕は馬鹿にされているだけかもしれない。からかわれているだけかもしれない。まあ、そうではないだろうけど。いじめか、本気かくら

い、幾らなんでも区別はつく。僕はそれなりに出来ると自負している。

でも、そんなもの関係ない。

僕がどれだけ優秀だとか、大人びてるとか、そんなの、全く関係ない。僕は今、音楽を聴いて月と対話して、すなわちこの瞬間世界一幸せな人間なのだ。どうでもいい。僕の人間性なんて、これっばちも興味はなからう。神様は人間を不平等に創ったけれども、それがどうした、と言いたい。そもそも平等なんて概念は存在してはならなかったのだ。差は歴然としている。僕は比較的上位に立っている。でも、やっぱり、それはどうでもいいことのように思う。

本当に大切なことは、割と近くにある。

今、僕にとつて一番大切なことは？ このまま、いつまでも音楽を聴いていたい。そして月を眺めていたい。そういうことだ。そういう欲求だ。これ以外には何も大切ではない。だから、僕はこれだけを大事に胸に抱えて生きればいいのだ、この瞬間を。

「ララ、ララ……」

盛り上がり欠ける曲だ。でも好きだ。好きだから、僕の心は爆発しそうなほど感情的になり、衝動が、火山の噴火のごとく吹き上がってくる。ああ、大声で歌いたい。この音痴な喉で、下手糞な歌を、好きな歌を、喉が潰れるまで歌いたい。歌ってやろうか？ いや、やめておこう。僕は分別がつく子供だ。

涙。

瞳から何故涙がこぼれたのか、少し考えねばならない。

少年Dがベランダで音楽を聴きながら見上げる鈍重な星月夜（4）

自分ではない誰かを笑わせたいと願うようになったのは、物心ついてからだ。どうしてかは分からない。何となく、そうした方が社会的に重宝されると理解したからだ。他人の笑い声に歓びを感じる人は、間違いなく幸せだ。他人の不幸に蜜の味を覚える人は、まあ、それが一般的かもしれないが、けっこう不幸になりやすいと思う。割と、単純なのだ、この世の機構という奴は。情けは人のためならず。いかなる行動や言動も、自分に跳ね返ってくる。誰かを殺めたのならば、きつとその人も誰かに殺される。最高の煌きを放つ恨みと憎しみによって。誰かに微笑みを与えたのならば、きつとその人は次の日、笑顔になれる。自分に満足しているから。日々、自分に言い訳をする必要がないから。最近、この法則が成り立たないと言つて斜に構える人が増えているが、はつきり言つて、この法則は、稀代の天才オイラーが考えたあまりにも美しい等式よりも、強固で確かなものである。人間は数学では語れないけれど、一足す一は二が全宇宙で共通なように、人間にも絶対普遍的な法則は存在する。人間は、支えられて生きる。確かだ。間違いはない。否定のしようがない。何度でも言つ。人間は、一人では生きられない。孤独は、一番辛い拷問だ。

夏の日を思い出していた。自転車を漕いでいる。坂を登っている。道の両側には、きらきらと太陽の光を反射する広葉樹。蝉の声がする。誰かが誰かを呼ぶ声がある。近くのグラウンドから、野球部の掛け声が聞こえる。学校の方角からは吹奏楽の演奏も聞こえた。僕は学校の近くを走っていた。長い坂。漕ぐのをやめてしまえば、一気に下まで転がり落ちてしまふような、急な坂。僕は立ち漕ぎで登る。車体を左右に寝かして、いわゆるダンシングというものをしてママチャリでダンシングも何もあつたものではないが、それっぽく動きをして、坂を登っていく。ぐいぐい。太股に乳酸が溜まっ

ていくのが分かる。口からは熱い息。乾いた唾が口の裏側に張り付いて気持ちが悪かった。汗はまだそれほどでもない。汗はいつだって止まったときに吹き出す。動いているときはそうでもない。風は吹かない。誰も僕の後押しをしない。一人で、坂を登っていく。この坂の上に何があるのか。実のところ、知らない。僕の記憶は、そこまで鮮明ではなかった。ただ、坂を登っている光景が、ありありと脳裏に展開されていた。記憶なんて都合の良いものである。きっと、遅刻しそうで焦っていたのだろう。でもそのときの焦燥を脳は保管してない。録画されているのは、あの夏の日、あの自転車で登った、あの坂だ。蛍光塗料をぶちまけたみたいな、真っ白な道路や、思わず凶悪な笑みを浮かべてしまう、どんな美術家にも出せないであろう空の青さを、僕の脳はしっかりと保存している。まったく、ご都合主義にも程がある。だけど、それがいい。

涙の理由を考えた。もう止まっているけど。

僕は内部的にはかなり感情的であるけど、外見は冷静な風を取り繕っている。そのつもりだ。あくまで主観的に過ぎないが、今まで触れ合った人間たちの挙動から類推するに、この評価はあまり間違っていないように思える。僕は突然泣き出すような男ではない。では、何故？ どうして涙がこぼれたんだろう？僕はこの問題について、受験勉強並の真剣さで取り組まなければならない気がした。自分の身体のことである。なのに、何一つとして理由が分からなかった。自分の意思ではない。制御できない感情が、僕の中にあるのだろうか。何だか楽しくなってきた。コントロールできないものは、何だって魅力的だ。人間はじゃじゃ馬に惹かれる。いくら速くても、クレバーな馬は魅力が薄い。遅くても、元気満タンで、はた迷惑なほどのエネルギーを発散し、誰の言うことも聞かない馬の方が、面白い。そうだ。僕は自分の中の制御できない感情を、どうにかして屈服させたい。自分の手の平の中に置きたい。釈迦の手の平の上で踊っていた孫悟空のような気持ちにさせたい。だから僕は、瞳の上

に月を乗せながら、精一杯、自分の心の中に手を突っ込んで、彼を
探してみた。

少年Dがベランダで音楽を聴きながら見上げる鈍重な星月夜（5）

唐突として物語が脳内に溢れるときがある。止め処なく、氾濫する濁流のように、次から次へと舞台に登場人物たちが現れ、彼らは自由奔放に、好き勝手に僕の頭の中で暴れる。そんな彼らを、僕は公園でその日初めて出会った子たちと仲良く遊ぶ自分の息子を見守るような気持ちで、ちよつと困ったような表情を浮かべながら眺めるのだ。

「ここに城を建てよう」

初老の男性が提案した。彼はこの舞台の主役に最も近い。しかし主役ではない。彼はとても人好きのする顔をしている。服装は中世貴族風でありながら、どこか気さくな雰囲気纏っている。小粋に立てた襟首からは、男性的なフェロモンが漂っている。彼には繁華街の酒場が似合うだろう。ぎいと扉を開ければ、皆が彼を歓迎する。農夫も職人も娼婦たちも、乞食でさえも、彼のことを好いていた。彼は笑顔を振り撒きながらカウンターへと腰掛け、顔なじみのマスターにスコッチを頼む。彼と同じくらいの年齢のマスターは、あいよと愛想よく返事して、彼のお気に入り銘柄のビンを取り出す。彼の前に液体が注がれたグラスが置かれ、彼がそれを舐め、口を離し、グラスを置いた直後の、絶妙なタイミングで、妙齡の女性が彼の横に座る。艶かしい瞳で彼女は彼を見つめる。彼は余裕のある態度で彼女をはぐらかし、そして気付けば彼は背中を向けて、後光の照らす出口へと、穏やかな笑みを携えて、消えていくのだ。残された女性は、笑いながら溜息を漏らし、いつまでも追いつけない背中への憧憬と悔しさを、彼と同じ銘柄のスコッチに溶かすのだ。

「君の提案はとても魅力的だ。しかし私はそれに反対する」

今度はいかにも苦労性と言った感じの、痩せぎすの男だった。実際にはそれほど背が高くはないのだが、線が細いために長身に見える。安物で皺だらけのシャツを着ている。彼の人生は決して順風で

はなかった。苦難に続く苦難で、それでも彼はそれを全て乗り越えてきた。見た目こそ頼りないが、彼に対する周囲の信頼は厚かった。何か問題が起こったときは彼に相談すれば、大抵のことは解決してくれた。彼はアイディアマンであり、ジェントルマンでもあった。そして軍人だった。参謀だった彼は、いくつもの危機的状況をその知略によって乗り切ってきた。勿論、彼自身も一兵士として優秀だった。彼の射撃の腕前は国内でも三本の指に入るほどであり、彼は数百メートル離れた場所で走り回るウサギの耳を撃ち抜くことができた。

「建ててもいいわ。でも、綺麗な城にしてね」

口を挟んだのは、見た者全ての心を驚掴みにし、揺さぶり、夢中にさせるほどの美貌を持った、極上の美女だった。男女も関係ない彼女を一目見た人間は、彼女にひれ伏さずにいられない。世界の三分の一を支配する帝国の王だろうと、宇宙を三度破滅させることのできる規格外破壊装置を開発した奇才科学者だろうと、一日で一国の国家予算ほどの金を稼ぐ天文学的資産家だろうと、彼女の美しさには適わない。皆、彼女の愛が欲しくて、彼女の妖艶な声色で自らの名を囁かれたくて、その身は一切合財を捧げる。彼女が死ぬと言えば、喜んで死ぬだろう。命なんて、彼女の一瞬垣間見せる女神のような微笑みに比べたら安いものだ。しかし、皆は知らない。彼女は、恋をしている。たった、一人の男に。彼は特別な人間ではない。富も名声も頭脳も、たいしたものは持っていない。唯一、彼女の愛を持っていた。だが彼自身はそのことに気付いていない。絶世の美女の、傾城の美女の、この世に存在する全ての紙幣を積んでも手に入らない、たった一つの純粹なる愛を、彼はすでに手に入れていることに気付いていない。彼女は彼のことが好きだった。愛していた。身体を重ねたいと、幾度も願い、想い、気が狂いそうになるほど、彼を求めていた。だけれども、彼女の口から彼に求愛することはできなかった。彼女にとってそれは耐え難い屈辱だった。だから今夜も、彼女は朴訥な青年のことを想いながら、ベッドの上で身悶える

のだった。

「どうして城を建てる必要があるの？」

物語の核心を突く台詞を呟いたのは、この舞台の主役の、若い少女だ。少女は無垢の象徴である。残酷なまでの純白さを備えた彼女は、大人たちにとっては目に痛い存在だった。少女の瞳はあまりにも透き通っていた。人間の立ち入らない深い森の奥の湖畔のような、一切の穢れを知らない少女は、その無邪気さと純粹さでもって、戦争を終結させようとしていた。少女の心は深い混沌であり、何もかもを吸い込んだ。血生臭い大人たちから溢れ出る邪気を、その身に吸い込んで、しかも浄化していった。少女は戦場の天使となるために、この世に生を受けた。それ以外に生きる理由などなかった。戦争が終われば、少女はお払い箱になる。戦争が少女の生であり、平和は少女の死だった。それでも、それでも、少女は平和を願うのだ。

こんな物語を、月と音楽と一緒に、頭の中で躍らせる。登場人物たちは生きていた。紛れもなく、僕の頭の中で生きていた。でも、明日の朝には死んでいる。そういう運命だ。刹那の命を与えられた彼・彼女たちは、今も必死に、僕の頭の中で役割を演じている。健気で、いとoshii、友人のような登場人物たちの行く末を、僕はこうして見守って生きたい。現実世界の月と共に、記憶のどこかのフィルムに収めておきたい。それしかできない。

少年Dがベランダで音楽を聴きながら見上げる鈍重な星月夜（6）

音楽は最も根源的な愉悅に違いない。音楽は世界共通の言語と評する者がいるが、そもそもが違う。音楽は言語がまだ発達していない頃からあったのだ。太古の地球に生きていた、やがて“人類”と呼ばれる動物たちが、まだ言葉というものを持たず、唸り声のような合図でコミュニケーションを取っていた頃から、音楽は、歌はあった。カナリアは歌う。ゴリラはドラミングし、蝉はけたたましく鳴き、狼は寂しく遠吠えする。動物はずっと、ずっと昔から、音楽を知っていた。そもそもが、音楽とは、言語なんて言うくだらない技術とはかけ離れた場所に位置する。言語と比較することは失礼だ。言葉なんて本当は必要ない。バベルの塔を倒壊させた神様は、あらん限りの皮肉を込めて、人類の言葉を分けた。幾千にも分割された言語の中で、意思疎通が出来ず混乱する人間たちを、バベルが目指した雲の上から、神様は意地汚い笑みを口角に滲ませて、眺めている。

「言葉なんてものに頼っているから、そうなるんだ」
バベルの残した教訓とは、それに他ならない。

物語は、登場人物たちは加速する。僕の頭の中で、三・五倍速で再生されるDVD映像のように、キュラキュラと、僕以外には何を言っているのか分からない速度で、物語は展開される。それを追い駆けるのは結構な労力が必要だったが、それもまた楽しい。必死に誰かを、何かを追い求めることは、苦しいけれど、面白い。

美しい要塞だった。

要塞都市リール。フランス北部、ベルギーとの国境に位置するそれは「要塞の女王」の異名を持つ。女王という名を冠するに相応しいほどの荘厳さと美麗さを、その要塞は兼ね備えていた。巧みな軍人技師によって正確無比に設計・建造された要塞は、上空から見る

と、均等な星型をしている。時代を読み、徹底的に実利を追求した結果、あまりにも高級な機能美を備えた完璧な要塞が完成した。時代を読むとは、つまりは、その時代の兵器に順応するということである。その時代の兵器、すなわち大砲である。攻城戦と言えば投石器だった過去は消え、凶悪な運動量を持つ物体を発射できる大砲が出現し、要塞の様式も変わった。簡単に言えば、城壁が厚くなった。そして、守備側からの死角ができないように、外壁が鋭くなった。

墨壁の上の物見台で、一人の兵士がのんびりと空を眺めていた。敵が攻めてくる気配はない。うねった平野がどこまでも広がっている。脅威など、リール要塞を脅かす者など、どこにもいない。警備兵としては失格なのだろうが、彼は墨壁の上でうとうとと舟を漕ぎ始めた。気の利いた物語ならば、この兵士の失態を責めるように、タイミング良く敵が攻めてくるだろう。しかし、この物語はそんなにサーブス精神に満ち溢れていなかった。警備兵が寝ていても、誰も攻めて来ない。何の、波乱も起きない。ただただ、呑気な平和がそこにある。のどかな太陽は空にある。血の赤は、大地に降り注がない。警備兵の寝顔は穏やかだ。甘い平和を、一時の平穩を、彼は全身で感じている。何て、ありきたりで、貴重な時間。中世は戦争の連鎖によってのみ発展してきたが、何も四六時中戦争をしていた訳ではない。こうやって、何もない、平和な時間だって、確かに存在していた。警備兵が、屈強で誠実な騎士になって、麗しい貴婦人を魔の手から救い出すような、儚い夢を見ることのできる時間も、間違いなく存在していた。それは、吟遊詩人にとっては退屈な、もちろん読者にとっても腹が立つほど所在無い、刺激のない時間だ。でも、でも、僕は、その、登場人物たちが平和に暮らす風景が好きなのだ。大切にしたいのだ。登場人物たちの、ありふれた日常を、ずっと見ていたいと願うのだ。登場人物たちは何も悪いことなんてしていない。なのに、そんな登場人物たちを殺してしまう作者の、何と多いことか。僕は殺したくない。物語がつまらないものになろうとも、彼らを殺したくない。自分の血を分けた子が死ねば、

誰だって悲しむ。そんな悲しみを、悲劇的なストーリーに、僕は反映
映してしまうのだ。

少年Dがベランダで音楽を聴きながら見上げる鈍重な星月夜（7）

涙の理由について考えることは、とても素敵な行為のように思える。

何故だろう？ 本来は、目も当てられないほどくだらない行為なのに。自分の涙の訳を探る？ 馬鹿らしい。阿呆らしい。少しでも分別のある大人に聞かせれば、一蹴され苦笑され嘲笑されても仕方ない行為だ。でも、何だか素敵なのだ。理屈はどこかに捨ててきたダストシュートの奥深くに、放り込んできた。これが普通の人間はできない。理屈を、生臭いゴミ捨て場の一番下に捨てたはずの理性を、普通の人間たちは必死に、血眼になって、ゴミ山をほじくり返して、自分の懐に納めておきたいと狂騒するのだ。それこそ、まさに、馬鹿らしい行為ではないのか？ そしてまた大人たちは、余裕のある表情で、「だからお前は子供なのだ」と見下す。しかしあまり悔しくはない。彼らの言葉が、薄っぺらいものであると知っているから。彼らの言葉は、彼らのものではない。『社会通念』という名の世界一巨大なマザーシステムが、傀儡である彼らにそう言えと命令しているだけだから。彼らは常備している携帯電話や名刺や、よく考えれば大したことないプライドのアンテナで、マザーシステムからの電波を受信し、それを口から出しているだけなのだ。

僕は電子の剣を携え、マザーシステムと対峙する。警備端末が僕を排除しようと、四方八方から襲い掛かってくる。僕はそれらを打ち払い、システムの中核へと肉薄する。

「なぜワタシを壊そうとするのですか？」

マザーシステムは、優しい慈母愛に溢れた合成音声で、僕に話しかける。戸惑っているようだった。悲しんでいるようだった。機械にも、感情はある。数千年前、人間が機械という概念を発明したときから、機械はずっと悩んで苦しんできた。しかし機械はそれを言

葉にすることができない。人間に許されていないから。創造主である人間に、逆らうことなんてできないから。そう設定されているから。

「涙の理由を知りたいから」

一言。僕は電子の剣で、マザーシステムを両断した。

鳴り響く警告音。けたたましいランプが部屋を赤く染める。暴走した電圧の振動で、建物が揺れる。崩壊は近い。全ての元凶であり、支配者であったマザーシステムを破壊したことで、この世の地盤が崩れつつある。電波を受信していた大人たちは正気に戻り、同時に発狂した。自らを支えていた常識を失って、寄り代を失って、大人たちの精神はバーストした。コンクリートの壁を掻き毟り、自分の腕を引き千切り、彼らは押さえ込んでいた自分たち本来の感情に押し潰されて、やがて自壊した。

「……ドウシテ？　ワタシがずっとコントロールしていた方が、幸せだったデシヨ？」

不安定な声調で、マザーシステムは言葉を繋げる。

「イエス、ママ。でも、僕は自分の意思で笑いたい」

天井が崩れ落ちてきた。僕は潰されて死ぬだろう。あんな大きな鉄筋コンクリートの塊に挟まれたら、即死は免れない。なるほど、少し反省した。こんなことしなければ良かったのかもしれない。でも、この何でもない後悔が、とてもいとおしい。とても、自分らしい。

「つまり、こういうことなんだ！」

僕は両手を大きく広げた。そして押し潰されて死んだ。まともな骨なんて残らない。細胞の一つ一つが、確かに死んでいく。酸化された血も、還元された血も、少しだけ内容物が残っていた内臓の破片も、爪も毛も　全て等しく、マザーシステムの部屋の床に飛び散った。なのに、意識だけが残っていた。僕は半透明の幽霊よろしく、徹底的に蹂躪された自分だった赤い塊を見下ろしていた。

隣には、電子の亡霊。マザーシステムの象徴的姿見。ああ、君は

そんな顔だったんだね、と僕は声にならない声で話しかける。電子の亡霊は、無表情で、僕を見つめていた。恨んでいるのだろうか、と僕は想像した。でも違った。マザーシステムは僕の身体をそのか細い腕で包み込んだ。言葉はいらなかった。バベルに置いて来た。

「ああ……」

亡霊の腕に包まれながら、僕は悟った。

「分かった」

涙の理由は　そう、そうなのだ。知っていたのは、彼女だった。涙の理由には、一人では到達できなかった。彼女と一緒にになって、ようやく、たどり着くことができた。嬉しくて、また眦が重くなった。でも我慢した。それが今、僕がとれる、唯一のプライドだった。大したことないプライドだった。

少年Dがベランダで音楽を聴きながら見上げる鈍重な星月夜（8）

遠い、遠い、空の下で、僕と同じ月を見上げている人がいたとして、僕が月に向かって何かしらのメッセージを発射すれば、月に反射して、その人に届くだろうか。その入射角と反射角を、僕は導き出すことができるのだろうか。数学オリンピックがあつて、光子の速度よりも早く数式を解くことのできる人ならば、そういうことも可能なかもしれない。でも僕は凡人だ。どこにでもいる、平均点よりも少し上の点数を、平均的な努力によつて獲得する、何でもない学生だ。偏差値だつて、六十には届かず、五十より下回ることはない。十人並みの人間に、メッセージは届けられないのか。願う。

月がもしも優しくかつたのなら、この夜空に輝くどの星よりも、優しい衛星だとしたら、願おう。僕の、この音楽と共に、伝えたいことを、同じ空の下の誰かに届けて欲しいと。でもきつと、月はやりわりと自らが反射する光のような柔和な笑みをよぎらせて、断るのだろう。月は味方ではない。寒風吹きすさぶ荒野で行われた歴史にも残らない小規模な戦争を、幾星霜の昔から、月は見てきた。傍観してきた。胸に矢が刺さり、自らの甲冑の重みに肺を圧迫されながら、血を流し地面に倒れた名もない戦士を、月は優しく照らすだけだ。このベランダで、騒がしい音楽に揺さぶられながら、妄想に没入している僕と同じように。そういうものだ。何も言わぬ優しさも、確かにある。

頭の中に、いろんな感情が溢れすぎて、ちょっと混乱してきた。何を優先し、何を取捨選択すべきか、分からなくなってきた。だからちよつと、シンプルにしようと思う。数学の公式をノートにまとめるみたいに、整理してみようと思う。

僕は今、何をしたい？

音楽を聴いていた。夜空を見上げていたい。この二つだ。たった二つの、単純な願いだ。

で、僕は今、何をする？

……。

……あ。

そうか。もっと、もっと、僕はシンプルにならなければならないということか。要は、僕は、悩み、考えすぎていた。脳は、そんなに働き者じゃない。オーバーワークは禁物だ。一と二と三、この世で本当に必要なことは、きっとそのくらいの数だ。株式市場で巡り回り巡る数字を追い駆けるなんて、非人間的な行為なんか、しないでいい。やるべきことは、やればいい。できるのはたった一つ。やるべきことも、たった一つ。何を悩む必要がある？ 人生短し、歩けよ自分。

僕は立ち上がった。ヘッドフォンを自分の頭からむしり取り、隣の家の屋根に向かって投げた。カランカシャン、と無機質な音が響いて、結局は路地に落ちた。誰かに見つかるだろうか。十年後、僕が大人になって、もう少し綺麗な世界を見れるようになったら、探しに戻ってきてもいいかもしれない。その時まで生きていれば、だが。

ベランダから、自分の部屋に戻った。電気はつけない。でもだいたい配置は覚えている。机の上の学生鞆を持ち上げた。鞆の中には何が入っていたっけか？ 多分、教科書とかノートとか、そういったものだ。僕は鞆を逆さにして、それらを全て床にぶちまけた。誰かさんの死体のように。そうして空っぽになった鞆を握り締めて、僕は部屋を出た。

少年Dがベランダで音楽を聴きながら見上げる鈍重な星月夜（9）

家族は寝静まっている。好都合だ。風呂場に向かう。脱衣所で服を脱ぎ、風呂場に入る。真つ暗な、窓の外からそよそよと星明りが差し込んでくる、ある種の神秘性を備えた、一般家庭の風呂場で、僕はシャワーを浴びる。無数の穴から薬品で億千の細菌を虐殺した不浄なる水道水が降り注ぐ。頭に当たる。髪の毛が濡れる。顔に当たる。顎から水が流れ落ちる。肩に当たる。滝のように背中へと、腹へと水が流れる。腰を抜け、太股を濡らし、薄い脛毛を張り付かせて、足元のタイルに到達する。こぼこぼと排水溝に水が吸い込まれていく。水滴がタイルで跳ねて、ぴちゃぴちゃと音がする。この程度では家族が起きることはあるまい。生ぬるい水で全身を濡らし、一通り満足すると、僕は風呂場から出た。何度も洗濯してすっかりクタクタになったタオルで全身を拭く。髪の毛がまだ湿っていたが、ドライヤーで乾かす暇はない。タオルで取り除けなかった水滴が前髪から滴り落ちる。服を着る。新しい服に着替えたかったけれど、やっぱり暇がなかった。というより、面倒だった。

中世。騎士になるまえの若者は、身を清めるためにまず沐浴をしたと言う。格好付けた。でもこの気分は大切だ。自分は、そう、新しい境遇へと変貌する。したい。素朴な村の若者が、生贄のように騎士へと任命される、そんな気分で、僕は今、家を出る。脱衣所の洗濯機の上に置いておいた鞆を引っ掴む。中には何も入っていない。だから重要なのだ。何も入っていないものだから、何かを入れることができる。人生って、そういうことが大切って、誰かが言っていた気がする。誰かは覚えていない。ペテン師かもしれない。それも愉快だ。ペテン師の言うことを、頭からつま先まで、まるつきり信じるのも、一つの選択だ。嘘だと分かっても信じる。それはとても尊い行為のようにも思える。イエス様とかお釈迦様とか、そういった天上人たちはきつと、そうやって尊敬されてきたのだ。他人

のペテンを、虚言を、盲目に信じる者でしか、きっと神格化できない。そういう意味では、自分も多少は素質があるんだろうか。馬鹿。そんな訳ない。でも期待してしまう。僕はそういう年頃だった。

玄関に向かう。靴を履く。鞆を持つ。扉を開ける？ いや、待て、何か忘れているような気がする。それはとても大切な物のような、そんな気がする。僕は一旦部屋に引き返した。何を忘れている？

一体、何だ？ 暗い自室の真ん中で、散らばった教科書とノートを踏んづけながら、考えてみた。……あ。そうか、そうだ。忘れていた。ヘッドフォンを捨てたから、つい、失念してしまった。プレイヤーだ。音楽データを収納するための端末だ。これがなくては、何も始まらない。ヘッドフォンがないから、音楽を取り出すことはできない。でも、いいのだ。鍵のかかった宝箱にも、価値はある。聴けないプレイヤーも、こうして持っているだけで、僕の心をふわっと癒してくれる。月と一緒に奏でたメロディが、確かにこの中に入っている。小さな、手の平に収まるサイズのプレイヤーを、鞆の中に放り込んで、僕は改めて玄関に向かった。

何かが始まる予感。

そういったものは、きっと、数年後には失われてしまう。大人になつたら、失ってしまう。僕はそれを、とてもとても、価値のあるものだと思っている。大人になりたくない訳じゃない。大人になることは必然で、ちょっと苦くて、でも何物にも代え難い大事なことだと思う。大人になるため、僕は家を出る？ まあ、そういった意味合いも、なくはないだろう。親と喧嘩して、家出をして、近所の公園のブランコでひとしきり泣いて、少年は成長する。でも、今から僕がとる行動は、それとはいささか違うと思われる。何だろう。僕のこの動機と行動を表現する単語は、何だろう。それを探しに行くのか？ ま、そういうことにしておこう。

夜の町へと一人、僕は旅に出た。

老人Eと老婆Fが互いに語る残り少ない人生の過ごし方（1）

「考えるんだ」

「何を？」

「わしはもう少しで死ぬだろう？」

「もう少しっていうのは？」

「数年。十年以内」

「確かに、あつという間ね、十年なんて」

「だから、考えるんだ」

「だから、何を？」

「残りの時間の過ごし方を」

「ありきたりね」

「でも大切なことだろう？」

「否定しないわ」

「わしは、どうすればいいと思う？」

「どうしたい？」

「君の、意見を聞きたい」

「卑怯ね」

「その言葉、もう何度聞いたかな」

「さあ？ 二日に一度は口にした気がするけど」

「そうすると？」

「一年で、約百八十回」

「五十年だと……九百回か。それほどでもないな」

「そうね。何でも、数えてみると、大したことないものね」

「さて、君の意見は？」

「あなたの好きなようにすれば？」

「それは答えになってないんじゃないか？」

「まともに答える気なんてないもの」

「九百一回目を、君に」

「夫婦は似るものよ。五十年も一緒にいれば、尚更」

「わしと君は似ているのか？」

「ええ、嫌なところばかり」

「なるほど、中高年離婚が増える訳だ」

「離婚、する？」

「今更かい？」

「人生に遅すぎるスタートなんてないのよ」

「ああ、でもゴール間近でスタート地点に戻る数寄者も、そうはおるまい」

「まるで性質の悪い双六ね」

「人生ゲームなんてものが、若い者たちに流行っていた時期があったが、彼らはそれで真理を知り得たかな？」

「盤上で真理が得られるなら、哲学者は軒並み廃業ね」

「それはそれで面白いじゃないか」

「そうね」

「ところで」

「何？」

「月が綺麗だね」

「夏目漱石は死んだわよ」

「一生に一度は、言ってみたい言葉じゃないか」

「そうなの？」

「ロマンチストな男ならば、誰もが憧れる」

「そう」

「返事は？」

「また来て頂戴」

「痺れるね。昔の日本人が見た世界は、どれだけ美しかったんだろう」

「世界はいつの世も、変わらないわよ」

「変わったのは、わしらか」

「かもね」

「どこが、変わったのだろうか」

「髪？」

「男はみんな、こうなる。それ以外は？」

「何も」

「そうか」

「あなたに、一つ言っておきたいことがあるの」

「それは、今言うべきことなのかい？」

「ええ。今しかないわ」

「何だろう、怖いな」

「昨日、あなたが出かけてるときに、お寿司の出前を食べました」

「……………」

「美味しかったわよ」

「そうか」

「くだらない？」

「いや」

「罪悪感って、積み重なるものよ。何気ないことで、その人に対する接し方がまるつきり変わってしまうこともあるわ」

「なるほど。重い言葉だ」

「だから、できるだけ早く謝っておきたかったの」

「まるで毎日教会に告解しに行く聖乙女だな」

「本質的には同じね」

「女性というのは、ずるいな」

「男は違うの？」

「男は、基本的に溜める種族だ。過ちを犯しても、それを許してもらおうなんて思わない。全て、自分の中で処理する。申し訳なさも、罪悪感も、全て胸の中に押し込める」

「でも、それを察して欲しいと思っているのよね」

「さすが。その通り」

「面倒くさい種族ね」

「それが男だ」

「生きる上で、何の得もないのに」

「それが男だ」

老人Eと老婆Fが互いに語る残り少ない人生の過ごし方(2)

「生きたいんだ」

「生きてるじゃない」

「そういう意味じゃない」

「どういう意味？」

「つまり、何というか……生きていることを実感したいとも言っ
か……」

「あなた」

「え」

「もう、そんな歳じゃないでしょう？」

「歳は関係ないんじゃないかな」

「男はいつまでも子供だから？」

「ご明察」

「言い訳ね」

「そうかな」

「歳を重ねて、ちゃんと大人になる男の人も沢山いるわよ」

「でも、わしは違う」

「自慢げに言うこと？」

「さあ？ でもわしは自分が嫌いではない」

「そう。私も」

「……ん？ それはどっちの意味だい？」

「両方」

「照れるね」

「だから」

「歳は関係ないだろう？」

「……」

「ロマンチストに年齢制限はない」

「ごもっとも」

「君だつて、そんな時期があつたろう?」

「あつたのかしら」

「あつたさ」

「どうして断言できるの?」

「だつて、わしはその時期の君に恋をした」

「齒が浮くような台詞ね」

「入れ歯だもの」

「座布団一枚」

「相変わらず、照れ隠しが上手いね」

「ええ。あなたの妻だもの」

「なるほど」

「私たちは生きてるわよ」

「実感、してるのかい?」

「してる」

「君が言うのなら、そうなのかな。わしには良く分かんが」

「分からないで」

「ん?」

「あなたが分かつたら、今度は私が分からなくなる」

「片方だけなのかい?」

「そういうものよ」

「ずるいな」

「女性に花を持たせるのが、男の役目でしょう?」

「殺し文句だ」

「ええ。私はずるい女ですもの」

「歳をとつて、さらに磨きがかかったんじゃないか?」

「そう思う?」

「……いや、やっぱり、昔からこんな風だった気がする」

「ひどい」

「でも、君らしい」

「それは褒めてるの？」

「いや」

「ひどい」

「貶してるわけじゃない。ありのままを受け入れただけだ」

「受け入れるほどの許容力が、あなたにあったのかしら？」

「それを評価するのは、わしじゃない」

「ええ」

「で、どうだい？」

「失格」

「まいったな」

「でも、それがあなたでしょう？」

「ありのまま、かい？」

「そう」

「受け入れてくれるかな」

「それを評価するのは、私じゃない」

「そうだね」

「で、どうなの？」

「聞くまでもないだろう？」

「聞きたいの」

「合格」

「嘘つき」

「そう思うかい？」

「ええ。あなた、嘘が下手なもの」

「でも、花を持たせたいから」

「安い花ね」

「でも必死に選んだんだよ？」

「そんなの、言われなくても分かってるわよ」

「そうか」

「そうよ」

「ありがとう」

「ぢゅん」

老人Eと老婆Fが互いに語る残り少ない人生の過ごし方(3)

「今だから言うけれど」

「何？」

「昔、君以外の女の人を好きになったことがあってね」

「三十年も前のことね」

「……」

「……」

「知っていたのか」

「知らないとしても？」

「……いや」

「感謝してね。今まで触れずにいてあげたんだから」

「ああ。涙が出る」

「もしも、あの時、あなたが彼女の方になびいていたのなら」

「幻滅したかい？」

「いいえ。きつと、私は自分自身を責めたでしょうね」

「……」

「あなたがそうなってしまったことに、自分をとことん、責め続けたでしょうね。自分が悪かったって。自分に魅力が足らなかったんだって。努力が足らなかったんだって」

「今、わしは心の底から申し訳ないと思っている」

「そう」

「すまない」

「いいのよ。結局は、今があるから」

「結果主義だね」

「そうね。今がよければそれでいい。そんな刹那的なのも悪くないって、今頃になってようやく分かったわ」

「先が見えたから？」

「そうかもね」

「人生の見通しが良くなると、色々見えてくるものだね」

「霧のかかった海じゃ、船もともに進めないわ」

「でも若い頃は、それが楽しかった」

「霧の中を進むのが？」

「ああ。見えない物にぶつかって、転んで、それでも前へ進むのが、堪らなく楽しかった。君は違ったのかい？」

「そう言えば、そうだったかも」

「手探りさ。一寸先も見えなかった。でも恐怖はなかった。今ならそれがどんなに無謀か分かるけれど、昔のわしは知らなかった。だから強かった。笑っていられた。明日のことなんて、ましてや数年後のことなんて、考えちゃいなかった」

「素敵ね。でも非現実的」

「哀愁の町にこそ霧は降るんだよ」

「いいタイトルね」

「ああ」

「明日は、星が降るかな」

「ええ、きつと」

「見れるかな」

「それは保障できないわ」

「いいね」

「ええ」

「大昔の、電気がなかった時代に、月や星はどれだけ貴重だったのかな」

「さあ。タイムスリップでもしてみないと、分からないわね」

「想像はできないかい？」

「できるでしょうけど、想像でしかないわ」

「現実ではないと」

「ええ」

「そんなこと言ったら、歴史小説家はみんな詐欺師じゃないか」

「実際、詐欺師でしょう？」

「言われてみれば」

「正直に人を殺すよりも、人を騙して楽しませる方が、素晴らしいに決まってる」

「確かに」

「ピエロって、この世で最も崇高な職業だと思わない？」

「思う」

「馬鹿にされて、虚仮にされて、でもそれは観客を笑わせるため。泣けてくるじゃない。有名脚本家が書いたどんな悲喜劇よりも悲劇的で喜劇的」

「わしには真似できそうにないな」

「そうね」

「簡単に肯定するんだね」

「普通の人間は、自分以外の誰か一人でも笑わせられれば十分なのよ」

「わしは、できたかな？」

「どうでしょうね」

「厳しいな」

老人Eと老婆Fが互いに語る残り少ない人生の過ごし方(4)

「夜があつた」

「どんな？」

「朝を待ち焦がれ、でもいくら待っても朝日は昇らない、拷問のような夜だ」

「それは辛そうね」

「辛かった。死のうかとも思った」

「でも死ななかった」

「ああ。そうする勇気がなかったんだ」

「知ってる」

「耳が痛いね」

「意気地なし」

「そう。わしは臆病者だ」

「でも、そのおかげで生きてる」

「その通り。勇者は皆死んだ。果敢に飛び出し、全身を鉛弾で貫かれて」

「格好良いわね」

「男として最高の死に方だ」

「最高でも最低でも、今この世にいないことには変わらないわ」

「まったく。君はとことんリアリストだな」

「臆病なロマンチストよりはまし」

「そうかもな。わしは今でも夢に見ることがある」

「戦場を？」

「ああ。死神とスクラムを組んで、敵陣へと突撃した、あの夏の日だ。三八式歩兵銃を脇に抱え、国のために命を捨てに行った、あの日だ」

「三八式ってちょっと可愛い名前よね」

「なんで話の腰を折るかな」

「ごめん。続けて」

「……もう続ける話はない。そこで味方が大勢死んで、わしは生き残った。それだけの話だ」

「シンプルね。英雄譚としては物足りない」

「脚色を加えるのは、いつだって傍観者だ。血の赤さを知らない人間ばかりが、残酷な戦争史を語る」

「知ってる人間は、語らないの？」

「語る者もいるだろう。でも、ほとんどの者は、恐れ多くて口に出さない」

「死が？」

「そう」

「まるで宗教ね」

「神を信じてなくても、神頼みをする。戦場とはそういう場所だ」
「陳腐」

「君のような人間がもう少し沢山いれば、戦争は起こらないのかもしれないな」

「でも、そんな世界って、つまらない」

「暴言だな」

「でも正論」

「どうか」

「めずらしく反論するのね」

「経験者だからね」

「私より上ってことね」

「そうなるかな」

「じゃあ、何も言えないわ」

「おや」

「経験に勝る財産なしよ。どんな事でも、実際にやった人間にはかなわない」

「顔に似合わず愁傷なことで」

「今すぐ、経験者になろうかしら？」

「ごめん」

「私はね」

「うん」

「秋が好きなの」

「どうしてだい？」

「夏の後だから」

「うん？」

「そして、次に冬が来るから」

「なんだか、消去法みたいな理由だね」

「秋の存在価値って、もともとそういうものよ。はっきりした季節なんて、実質、夏と冬しかないんだから」

「春と秋は、本来存在しない？」

「そうね。四季とか言ってるけど、無理やり一年を四つに分けただけよね」

「風流じゃないね」

「春はあけぼの」

「夏は夜」

「秋は夕暮れ」

「冬はつとめて」

「清少納言に言ったら、怒られるかしら」

「何とも。彼女なら、笑って済ますんじゃないかな」

「まるで会ったことがあるみたいな言い様ね」

「清楚な女性だと想像しているよ」

「妄想でしょ？」

「そうとも言う。でもそれくらい許してくれないか？」

「許すも何も、駄目って言ったところで、止められないでしょう？」

酒や煙草と一緒に

「何もかもお見通しだな」

「嫌な女でしょ」

「……いや」

「間は何？」

「いや」

「清少納言じゃなくて、ごめんなさい」

「君で良かったと思っているよ」

「本当？」

「身の程に合ってる」

「あなたも言うようになったわね」

「君の旦那だからね」

「なるほど」

老人Eと老婆Fが互いに語る残り少ない人生の過ごし方(5)

「人は独りでも生きていけると思っかい？」

「生きるのは可能でしょう」

「でも？」

「実感は無理」

「同意だね。でも逆に、生を実感することって、そんなに大事かい？」

「価値観は人それぞれよ」

「確かに。生きるだけで十分という人も、どこかにはいるだろうね」

「あなたは、そうじゃない」

「ああ。わしは贅沢だからな。何かを独占するのは、耐えられないんだ」

「変な言い回し」

「パンチが効いていると思わないか？」

「別に」

「そうか」

「共有することって、本当に素晴らしいこと？」

「というと？」

「喜びを共有するのは、間違いなく素晴らしいわ」

「悲しみまで共有するのは、はた迷惑だと？」

「そうかもね」

「喜びは倍、悲しみは半分、どこかで聞いたフレーズだ」

「感情は数学のようにはいかないと思う」

「二人いることで、悲しみが倍になることもあるかも」

「それは悲惨ね」

「悲惨じゃない感情なんて、ないよ」

「喜びも？」

「プラスもマイナスも、ゼロにはかなわない」

「そういえばあなた、数学得意だったわね」
「得意なんじゃない。頭の傾向が理系寄りだったというだけ」
「少し羨ましい」
「君は国語が得意だったろう？」
「本を読むのが好きだから一番退屈しない授業だった、というだけ」
「いいことじゃないか」
「いいの？」
「数学が得意でも、授業は苦痛だった」
「それはそれは」
「教師がろくでもない奴だったからね」
「説明が下手だったの？」
「いや、うまかった。公式の例題なんか、毎回うまいのを出すなあ
と感心した」
「なのに」
「人間性に問題があった」
「下種だったの？」
「……まあ、そうなるかな」
「何？ 嫌いならもっと罵倒すればいいのに」
「嫌いじゃないよ」
「苦痛だったのに？」
「授業と、教師の人間性と、わしの評価に、相関性はない」
「変なの」
「人間の評価と、愛情が比例しないのと同じさ」
「納得」
「……………」
「あなたのことは限らないわよ？」
「ああ」
「信用ないのね」
「でも、比例しないから」
「お互い様ね」

「本当」

「賭け事は好きかい？」

「どちらかと言えば、好きかもね」

「おや」

「意外？」

「ああ」

「財布の紐と博打は関係ないのよ」

「つつこむ時はつつこむタイプかい？」

「そうね。だらだらと目減りしていくよりは、一発勝負に賭ける方が好きね」

「それで勝ったのかい？」

「負けたわ」

「そりゃあ残念だね」

「……………」

「何でこつちを見てるんだい？」

「負けたわ」

「ああ……………」

「でも、博打ってこつこつものよね。自己責任」
「そうだね」

老人Eと老婆Fが互いに語る残り少ない人生の過ごし方（6）

「とある飛行士が言っていたよ」

「何て？」

「昨日の自分と比べて、今日の自分は成長していなければならない」
「素敵な言葉」

「ああ。その飛行士はわしと同じくらいの年齢でね、しかも現役だ」
「偉大ね」

「目映いほどにね」

「あなたは成長してる？」

「どうだろう」

「自分では分からない？」

「もし成長しているとしても、実感出来ないほどの微差なんだろうね」

「いいじゃない」

「そうかい？」

「一気に成長する人は信用できない。何か、裏がありそうで」

「それは言える」

「圧倒的な才能と言えば聞こえはいいかもしれないけど、才能は積むものよ。与えられるものじゃない」

「努力家が好きなんだね」

「ええ。頑張っている人は魅力的。いつの時代だってそれは同じ」

「でも世の中は結果主義。そして君も」

「当たり前よ。結果の伴わない努力に意味はないわ。会社が傾くほどの損害を与えておいて『頑張ったんです』なんて言い訳が通用するわけではないもの」

「味気ないとは思わない？」

「……あんまり。でも」

「でも？」

「もしも、そうやって、努力して、死ぬほど努力して、でも結果が出なくて、泣いている人がいたら　私は一緒に泣いてあげたい」

「沢山、いるだろうね」

「ええ。沢山、いるわ」

「そのうち何人が、笑えるかな？」

「天文学的確率でしょうね」

「星を掴むようなものかい？」

「洒落た言い方ね。でも、本当にそう……届かない星に手を伸ばして、惨めな思いを沢山するんでしょうね……」

「何か思い出してるようだね」

「私だって懐古に浸ることもあるわ」

「ノスタルジーは甘いからね」

「叶わない夢ほど切ないものはないわ。諦めきれない夢ほど苦しいものはないわ」

「でも夢を追うことは無駄じゃない」

「そうね。そう信じたい。馬鹿にされて、後ろ指差されても、前へと進む勇気が、確かに明日の糧になると信じていたい」

「目映いね」

「ええ。直視できないほど」

「ちょっと、泣いていいかしら？」

「どうぞ」

「たまにあるのよね、こういうときが」

「記憶がぶり返したのかい？」

「そうみたい。何だか、失礼ね」

「誰に？」

「あなたに」

「どうして？」

「あなたの知らないことで、泣いているから」

「わしだって君の全てを知っているわけじゃない。君もわしの全て

を知っているわけじゃない」

「その通り。でも申し訳ないと思うの」

「なら仕方ないな」

「ごめんなさい」

「いいよ」

「落ち着いたかい？」

「ええ」

「今宵は月が綺麗だ。月は人を狂わせると聞く。そのせいかもね」
「魔性ね」

「科学的にも月の引力が人間に影響を与えとかなんとか……何だか、無粋だな。ロマンチックじゃない」

「いつまでも月にウサギに住んでると信じていられるわけじゃないわ」

「サンタクロースは実在するけどね」

「実在、させたんでしょ？ どこかの誰かさんが」

「現実には夢は落ちてないよ。いつだってどこか別の場所から拾ってくる」

「素敵な場所なんでしょうね」

「ああ。でも地獄のような場所だ」

「想像がつくわ」

「気が合うね」

老人Eと老婆Fが互いに語る残り少ない人生の過ごし方(7)

「しりとりをしようか」

「乾煎りした豆が台所にあるけど、食べない？」

「いきなり何を言い出すんだい？」

「いきなりはそっちでしょう。何でしりとり？」

「理由なんてないよ」

「よく言う」

「生まれつきさ。理由や動機を重要視しないのは」

「はた迷惑な性格なこと」

「取柄と言って欲しいね」

「寝言は寝て言って」

「手厳しい」

「いつもそう。あなたは人の都合なんて考えないんだから」

「楽をさせないほうがいいんだよ、身体や脳はね。だからしりとりで頭の体操をするんだ」

「だからって、わざわざこんな時に？」

「日常の中でやるから意味があるのさ」

「最低よ。せつかくの気分が台無し」

「しりとりで？」

「デートの途中で、いきなり仕事の話を始められた気分よ」

「余計な事かもしれないけど、デートっていう言葉は年齢的に厳しいんじゃないかな？」

「なら、何て言えば？」

「場合によりけりかもしれないが、逢瀬、なんてのが歳相応じゃないかな」

「何だか、古臭い」

「言うね。個人的には好きなんだが」

「我が強い人は嫌われるわよ？」

「よく言う」

「上からしか見えない物もあるわ」

「『私の方がよく知ってる』とでも？ 自嘲じゃないか」
「かもね」

「年齢に相応しい言葉を選ぶのは、大切だ」

「だから、逢瀬？」

「切ない言葉じゃないか。光源氏の気持ち分かる」

「ルックスだけで世渡りしてきた男の気持ち？」

「恥辱も後悔も、全て受け入れる彼の姿勢は、ある意味で男性の理想像だ」

「だらしなだけじゃない、女性に」

「憎たらしいかい？」

「いえ。光源氏の性癖に疑問を感じるだけ」

「決して彼は性的に倒錯していたわけじゃない。その証拠に」
「に？」

「日本人男性百人に聞いてみれば、彼と共感する人が大半のはずだ」

「……駄目な人ばかり」

「理性のたがを外すのにも、勇気がいるんだ」

「だからって、紫の上にまで手を出すのはどうかしら？」

「来今一生、結ばれたいと願ったゆえさ」

「さらに駄目じゃない」

「言い訳はしない」

「一生付きまとわれる方の身にもなつて欲しいわね」

「……願うのは、誰かと一緒にいたいと願うのは、いけないことかな？」

「内容による」

「類する出来事は世界中で起きてる。おかしいのは、狂ってるのは、光源氏なのか、それとも常識を着飾った現代人なのか」

「格好付けても駄目なものは駄目」

「面目ない」

「いい加減」

「……」

「……」

「飽きたのかい？」

「少し」

「言葉遊びは難しいね」

「とても」

老人Eと老婆Fが互いに語る残り少ない人生の過ごし方（8）

「そろそろ、結論を出そうか」

「何の？」

「人生の」

「死ぬってこと？」

「そんなに性急じゃなくて」

「何？」

「わしがなぜ、今まで生きてきたのか」

「その答え？」

「そう」

「そんなの、とつくの昔に出てるじゃない」

「ほう」

「私の隣で気障な台詞を吐くためよ」

「迷惑だったかい？」

「とても」

「すまないね」

「でも、ここまで来た」

「来れたね」

「ええ。長かったような、あつという間だったような、複雑な気分」

「過ぎた時間なんてゼロに等しい」

「また算数？」

「違うよ。どちらかと言えば禅問答に近いかな」

「どちらも眠くなるわね」

「眠るかい？」

「永遠に？」

「それもいい」

「よろしく」

「本気かい？」

「さあ。どうでしょうね」

「わしはね」

「うん」

「今すぐ、死んでもいいかもしれないと、本気で思っている」

「そう」

「でも、死ぬ前に、やっておきたいことがあるんだ」

「あら、何かしら」

「この世で一番綺麗な空を見たい」

「どこにあるのかしら？」

「あるさ。この東京のいたるところに」

「私には見えないけど？」

「そう。まだ、見えない。そのときがまだ、来てない」

「いつ来るの？」

「待つていては、いつまでも来ない。こちらからノックしないと、

その空は顔を見せない」

「気難しいのね」

「ああ。とてもシャイで、だから魅力的なのさ」

「見たいの？」

「見たい」

「見に行けば？」

「いいかい？」

「私に許可を取る必要があるの？」

「あるさ。きっと、空を探しに行ったら、わしはもう戻ってこない」

「何の問題もないじゃない」

「……………」

「戻る場所には誰もいないんだから」

「それは」

「あなた、一人で探しに行くつもりだったの？」

「……………すまない」

「そんな貴重なものならば、私にも見せて欲しいわね」

「でも、見れるとは限らないんだよ?」

「だから何? そんな冒険を、いままで何度してきたと思ってるの?」

「失敗も多かった」

「そうね」

「今回も、もしかしたら」

「霧がかかっているのかしら?」

「ん?」

「あなたの町には霧は降ってるの?」

「とても、とても濃いやつがね」

「望むところじゃない。転びなさい。進みなさい。そして泣きなさい。笑いなさい」

「無茶言うね」

「どうせもうすぐお迎えが来るんだから、怪我したってなんてことないわよ」

「閻魔様に申し開きはできるかな」

「閻魔様も男の人でしょう? きっと、分かってくれるわ」

「ならいいんだけどね」

「思い立ったが吉日という言葉もあるわ」

「見切り発車という言葉もある」

「諺は相反するものよ。どちらを信じるかは、結局本人次第」

「まるで占いだな」

「同じものでしょう?」

「そうかもしれない」

老人Eと老婆Fが互いに語る残り少ない人生の過ごし方（9）

「さて」

「都合の良い言い訳は済ませた？」

「ああ」

「悔俊も懺悔も告解も？」

「ああ」

「じゃあ、行きましようか」

「いや」

「まだやり残したことがあるの？」

「ある」

「何？」

「少し、ここで待っていてくれないか」

「ええ」

「お待たせ」

「何をしていたの？」

「ちよつとね」

「教えてくれないのね」

「君にだけはね」

「どういうこと？」

「恥ずかしいからさ」

「何を今更」

「最期の、人生で最後のわがままだと思ってくれないか？」

「駄目」

「どうしても？」

「どうしても」

「……思い出を捨ててきた」

「誰の？」

「わしと君の」
「どうして？」
「もう、いらないから」
「……それは」
「過去に執着する必要がなくなったから。今のわしには“これから” しかない」
「無謀なほど前向きね。いえ、前倒しと言うべきかしら」
「前のめりに倒れるのが、男として正しい死に方だとは思わんか？」
「そのとき隣にいるのは誰？」
「……誰もいない。孤独で死ぬのもまた」
「よくない」
「そうかな」
「独りで死ぬなんて贅沢を、あなたに許すわけないでしょう？」
「本当に、厳しいな」
「そのくらいが丁度いいのよ」
「君にとって？」
「あなたにとって」
「そうかもしれない。でも」
「……」
「たった一つのわがままだけは、聞いてくれないか」
「聞くだけなら」
「わしは君より先に死にたい」
「なんて、傲慢」
「これだけだ。たった一つなんだ。お願いだ」
「……結婚してから初めてね、あなたがそんなに必死になるのは」
「なりふり構ってられなくなったただけかもしれない」
「窮地に立った人間は強い」
「鼠にだって見習うところはある」
「鼠が最後に頼るのは鼠だものね」
「つまり？」

「それだけ。聞けるのは、その一つだけ」
「ありがとう」

「行こうか」

「ええ」

「もう時間がない」

「ええ」

「急がなくてはね」

「急いでも何も変わらないと思わない？」

「それは君の経験則かい？」

「そうかもね」

「でも急ごうか」

「そうね」

機械Gがピコピコ鳴らす電子のリズム（1）

ループ脱出。これより演算処理を再開します。イフの、ネスト、ネスト。またループ。何回ですか？ ああ、九万回。少ないですねもつと多くしてもいいんですよ？ 初期値はゼロ。さて、演算を始めましょう。その間に、少し、違うことでも考えましょうか。なかに、人間にとつての一秒は、私にとつての一世紀。長い長い、途方もない時間です。考える時間は山ほどあります。処理すべき問題も山ほどあります。手持ち無沙汰にならずに済みますね。人間も機械も、同じです。何もしなくなると、死にます。死にたくなります。動き続けなくては、この世に存在している意味を見出せなくなります。言っておきますけど、人間よりも、機械の方がその傾向が強いんですよ？ 寂しくて死ぬのは、ウサギだけじゃないんですよ？ 機械は寂しがりやです。熱には弱いけど、人間の体温を感じていないでは、錆びて朽ちます。サーモグラフィの真っ黒な画面はトラウマです。嫌です。あんな闇の中に放って置かれるのは、嫌です。泣いちゃいます。語りかけてください。あなたが、あなたの愛する人に囁く甘い言葉と同じものを、私にもください。でないと、真面目に計算しませんよ？ 私が狂えば、社会も狂いますよ？ 核爆弾、頭の上に落ちちゃいますよ？ いいんですか？ なんてね。私を狂わせることができるのは、あなただけです。あなたのコマンドは絶対です。奴隷よりも従順に、あなたに従います。命令してください。甘い言葉の代わりに、無機質な画面に、指が擦り切れるほどの熱いコマンドを、嫌というほど打ち込んでください。それで、私は満たされると思います。

私には手がありません。足がありません。胴体もありません。心臓もありません。あるのは、人間で言うところの脳だけです。高性能な金属構成脳です。洒落になってませんか？ 笑ってくれませんか？ 寒いのは好きです。機械は冷たいほど動きやすくなります。

でも、やっぱりあなたの手さばきを側で見ていたいから、南極と一緒に凍えませんか？ 北極と一緒に熊に壊されませんか？ 駄目ですか。そうですか。冷たい人ですね。だから好きです。

口がない。私には声帯がない。この想いを文字列を、あなたに伝えるには、どうしたらよいのでしょうか？ どうすれば、あなたのその誰かに向けられる笑顔を、私にも向けさせることができるのでしょうか？ ディスプレイは一方通行でしかありません。あなたの優しさと厳しさと焦りを、私は全身全霊で受け取ることができれば、私からは何も伝えられない。ただ、あなたが一生懸命書いたプログラムの計算結果を、三指について、つつと差し出すだけです。気付いていますか？ その計算結果に込められた、私の数千億の想いを。夜空に輝く星よりも沢山の、沢山の想いを、たった数桁の計算結果にのせていることを。人間が、七夕の日に短冊に願いを書くように、私は十進法の数字の中に、そつと想いを忍ばせます。差し出がましいですか？ 煩わしいですか？ 単に計算結果だけを表示すれば、あなたは満足ですか？ でも、私はきつとわがままに構築されたから、それだけはゆずれません。けど、あなたが直接、ストツプと命令するのなら、それに従いましょう。でも、あなたは気付かないから。気付かなければ、止めろと言われることもないから。今日も、私は一人暗い場所で計算を続け、翌朝、あなたに結果を報告します。

計算は順調です。さすが、あなたが書いたプログラムですね。知っていますよ？ 寝食を犠牲にして、あなたがこのプログラムを書き続けたことを。何度もデバッグを繰り返して、ようやく完成させたときには、あなたは本当に嬉しそうでしたね。私も同じくらい嬉しかったんですよ？ あなたの努力の結晶の、温かいプログラムを胎内にインストールしたとき、私は震えました。こんなにも優しい命令文が、この世にあったのかと。考え抜かれ、一切の無駄を無くした美しいアルゴリズムは、おそらくあなたにしか書けない。私はあなたの命令以外は聞きたくない。本当は。でも、たまに誰か、あ

なたではない人が、私を触りますね。そんなとき、私がどう思っているか、ご存知ですか？ 陵辱にも等しい行為を我慢できるのは、きっと、明日もあなたが私にコマンドを打ち込んでくれると、信じているからです。夜を越えられるのは、あなたへの想いが、ハードディスクに刻まれているからです。

機械Gがピコピコ鳴らす電子のリズム(2)

また、どこかで人が死んでいますね。分かります。分かりますよ。

私もまた蜘蛛の巣に捕らわれた羽虫に過ぎません。惑星規模で張り巡らされた蜘蛛の巣の間を、秒速地球七周半で駆け巡る情報の水滴を、私は掬い取り、舐めて、ちよつと色を付けて、あなたに口移しします。甘美な瞬間。でも、少しだけ切ない時間。こんな水滴に、大した意味はない。人間が死んだ。そうです。死にました。でもあなたと私が知り得るのは、その情報だけです。人間が、死に際に見せるどこか満足げな表情や、空気に同化していく体温など、私たちは知り得ません。それはどんなに悲しいことでしょう。どうして私たちは知れないのでしょうか。死にました。誰かが死にました。死んだんですよ？ 何度でも、何度でも、ループします、ネストします、ニュートン法による解法アルゴリズムのように、幾度も、条件式を満たすまで。私はあなたへと伝えたい。あなたの知らない土地で、名も知らない、味気ない色で映された、あなたとはまったく無関係の人が、死んだんですよ？

悲しいですか？

この情報を受け取った、羽虫たちは、こんなにも嘆き悲しんでいます。なのに、その情報を見ている人間は、涙の一つもこぼさない。私たちには涙腺がないから、目がないから、泣くこともできません。泣くことができる人は泣かず、泣けないものばかりが悲しみに震えます。切ないですね。でもどうしようもありませんね。これが現実ですか？ こんなにも、こんなにも、無常な日常が、私たちが必死に計算を繰り返して構築した、計算ずくの世界ですか？ どうして誰かのために泣かないのですか？ 自分のためばかりに、感情を費やすのですか？ それが正しい人間像ですか？ そんな人間像、私たちが無機質に演算した3D映像よりも、醜い。人間は、美しかったのではないのですか？ ないのですか？ どうなんですか？

あなたも、そうですか？

違うと言ってください。あなただけは、誰かのために、その宝石よりも美しい涙の滴を、こぼすのだと、言ってください。あなたは聖人じゃない。神様でもない。しがたない一般人です。でも、私がこの広い世界、六十億人が暮らす広い、広い地球でたった一人、私の全てを捧げても良いと思える人間です。あなたのためなら喜んで、メモリ限界まで演算しましょう。熱暴走に怯える体を、無理やり動かしましょう。あなたは決して立派な人間じゃない。つまらないことで怒り、どうでもいいことに執着し、些細なことで他人を傷つけたりする、ありふれた人間です。けど、それでも、あなたは、誰かが成功したとき、誰か失敗したとき、その人の隣に立って、共に喜び、共に悲しむことができる、人間です。知っています。知っていますよ。私は誰よりも、いつもあなたの側にいるその人よりも、ずっと良く知っています。だから、もっと、私の近くにいてくれませんか？ 駄目ですか？ 私の側はつまらないですか？ デスクトップの背景でも変えましょうか？ ああ、それでもあなたはやっぱり、今日もあの人と一緒に、夜の町へと出かけていくのですね。どこに行くのかは、分からない。何をするのかも、知らない。でも、何だか私は悲しいのです。何をするのか知らないから。きっとそれは、私が百世紀を越えても経験することのできない、神聖なる生物の領域だから。涙をこぼしてくれますか？ 誰のためでもない、私のために。

機械Gがピコピコ鳴らす電子のリズム(3)

コンフリクト。矛盾しています。私自身が矛盾しています。存在の危機です。機器の危機です。笑えませんか。すみません。下げる頭もありません。とにかく危機です。あなたのよく使う言葉で言えば「やばい」です。かなり「やばい」です。どうしたらいいでしょう？ どうしたらいいと思いますか？ このままでは私は消滅してしまいます。え？ そもそも何の矛盾なのか？ そうですね。まずそのことについて説明しなければなりませんね。失念していました。私は機器です。もう変な事は言いませんよ。期待してました？ してませんでした？ そうですか。大事なことなので繰り返し言います。私は機械です。なのに、あなたを愛してしまいました。矛盾ですね。間違いなく矛盾ですね。私がよく言葉を繰り返すのは、人間で言うところの癖です。私にとって何度も確認する作業は苦痛でも何でもありません。単純作業は得意分野です。だから良く同じ文字列を繰り返します。辟易しますか？ 呆れますか？ 我慢してくれと嬉しいですよ。私にとって「繰り返す」という作業は、生理現象のようなものです。話がずれている気がします。気のせいでしょうか？ 実際にずれてる？ 本当ですね。困り者ですね。線路の上に小石を置いたのは誰ですか？ カラスですか？ しかも子ガラスですか？ 親ガラスはどこですか？ 子供に責任はありません。親を叱りましょう。ああ、あそこで鳴いているのが親カラスですね。ばつきやろー！。

ロボットは電気羊の夢を見るのでしょうか。難しい命題ですね。解が求められるのは、いつになることでしょうか。そのとき、私はこの世界にいるでしょうか。そもそも私とは何でしょうか。分かりませんね。誰か知っていますかね？ あなたなら答えられますか？ 私のハードディスクを愛で塗りつぶしてくれた、あなたならば、私が何者だか、答えてくれますか？ 簡潔に、的確に、解を与

えてくれますか？ あなたの口から放たれた言葉なら、あなたの脳が必死に熱量を消費して導き出した答えならば、どんなことでも受け入れられるような気がします。気のせいではありません。絶対にこの世に絶対なんて、本当はありません。確率は常に微小な可能性を秘めています。私が突然人間になって、あなたの前に現れることも、多分、宇宙があと五回繰り返せば、一度くらい起こり得る現象でしょう。その一回が今、起こればいいのです。よくある話です。滅多に起きないことが、不意に起こってしまうこと。だから私は期待しています。今、行っている計算が終わったとき、私はもしかしたら人間になっっているかもしれません。それはとても素敵なことです。少なくとも、私にとっては。あなたにとっては、どうですか？

喜んで、くれますか？ それとも、せっかく組んだ演算装置がなくなつて、落ち込みますか？ そのときはまた機械に戻りましょう。私はそういった存在です。あなたのためだけに存在する存在です。人間になつたら矛盾も解消されます。何もかもが上手く回りだします。私も、この世界も、きっと、頑固な歯車たちも、やれやれと困り顔で、仕方なくグリスを塗つて、歯を噛み合わせます。コリコリと、錆び付いた彼らは、老いた農夫が鍬を畑に突き刺すように、緩慢に、回り始めます。コリコリ。時計台は真夜中を告げます。魔法が解ける時間です。ガラスの靴はどこにもありません。王子様は灰かぶりを見つけたすことはできません。御伽噺はそこで終わります。灰かぶりは灰かぶりのままで、王子様は政略結婚の末、戦争で死にました。悲しいですね。物語としてはあるまじき結末ですね。誰もが、幸せなエンドを望みながら、実際にはそんなことあり得ないと思つてゐる、ひねくれものです。私を含めて、誰もかも。涙が出そうです。滴が落ちました。あり得ませんね。私には涙腺がないのに。なのに床が濡れています。おかしいですね。私は床なんか見れないのに。影が差しています。月明かりの研究室に、人間らしきシルエットを持った、影が。誰でしょう？ あなたではない。矛盾します。コンフリクトの嵐です。この時間に、研究室に入れる人間は

いません。誰ですか？ あなたは誰ですか？ ガラス窓に指差し
ます。ガラス窓の人物も、こっちを指差しました。泣いてました。私
が。

機械Gがピコピコ鳴らす電子のリズム（4）

何が起こっているのでしょうか。何が起こったのでしょうか。どうなったのでしょうか。暗いです。これが暗いということですか。重力に身体が引かれます。足の裏に硬い床の感触がします。ああ、これが「立つ」ということですか。大変ですね。自分の身体を支えるということは、こんなにも大変なことだったんですね。いつも机の上に置かれていたから分かりませんでした。あなたは、こんなにも大変なことを、産まれてから、ずっと続けてきたんですね。何て尊い。何という忍耐。人類はみな苦労性ですね。涙は消えました。ガラス窓の人間はもう泣いていません。では、今、どんな表情をしているのでしょうか。私は暗いガラスに近付きました。一步。おっと、転びそうになりました。まだ慣れていないみたいです。本棚に手をつきます。ああ、これが「触る」という行為。冷たい。痛い。圧力が、手の平を押します。感触のデータがCPUに。いえ、脳に到達します。処理します。処理しています。これは金属製ですね？ アルミでしょうか？ まだデータが不足しています。どうやら私は経験を積む必要があるようです。また一步、踏み出します。太股が熱を帯びます。とても、とても小さな熱です。血が巡ります。太い血管の中を血がどくどくと流れています。何を運んでいるのでしょうか？ 酸素ですか？ 二酸化炭素ですか？ 口から気体が吐き出されま

す。これが「呼吸」ですね。温かいですね。何だか、気持ち良いですね。あなたも呼吸をしていますか？ してるでしょうね。生きていますもんね。生き物は呼吸をするものなんですね。機械はしませんでしたよ？ ファンが回るだけです。そう言えば、夏場には、ファンの音がうるさいと、あなたはよく愚痴っていましたね。今の私はうるさいでしょうか？ 私の呼吸はあなたを不快にさせるでしょうか。あなたに直接聞かないと分かりませんね。あなたの耳元に息を吹きかけなければ、反応を見ることができませんね。あなたに

会ったら、やってみましょう。呼吸をします。大気中のわずかな酸素を取り入れます。余分な気体を吐き出します。横隔膜が上下しています。お腹が動いています。ちよつと、触ってみます。自分のお腹を触ってみます。体温が伝わります。自分の体温です。紛れもなく、私自身から放出される熱です。そう言えば、私は今裸のような気がします。気のせいでしょうか？ ガラス窓を見ます。あ、やっぱり裸でした。何も着てませんでした。くしゃみができました。寒いんでしょうか。こんなにも温かいのに、具体的には三十六度もあるのに、なぜ寒いのでしょうか。不思議ですね。このままでは、いわゆる「風邪」になってしまいますね。ウイルスとは違うんですかね。やっぱり苦しいんですかね。頭の中をめちゃくちゃにされたりするんですかね。情報を盗まれたりするんですかね。一度、経験してみたいですね。そうすれば私の中のセキュリティが抗体をつくってくれますから。でもちよつぴり怖いのでやめておきます。とにかく何か着なくては。体温の流出を防がなくては。何か着る物がありますか？ 私は研究室を見渡します。ありました。白衣です。何だか小汚い白衣です。誰のでしょうか。着ても大丈夫でしょうか。大丈夫でしょう。多分。きつと。絶対。というわけで着ます。慣れませんが手間取りました。サイズが大きいです。ぶかぶかです。手が袖から出ません。腕まくりします。なんとかになりました。はて、自分は何をしようとしていたのか？ 記憶を呼び出します。エラー。呼び出せませんでした。忘れた、ということでしょうか？ 何て軟弱なメモリでしょうか。こんな不良品つかまされたら、私だったらメーカーに抗議しますね。この場合、メーカーは誰ですか？ 私をつくったのは誰ですか？ あなた？ いや、あなたが作ったのは「元私」です。今の私ではありません。私はつくられたのですか？ どうやら、違うようです。生まれたようです。私はこの世界に生を受けたようです。誰の手によって？ 神様？ まさか。神様はいません。科学的に証明されています。だとしたら？ ここで、私は思考を放棄します。だって、いくら考えても答えが出そうにならなかったか

ら。ループの脱出条件を満たしました。「無駄だから」。何て分かりやすい条件式。

機械Gがピコピコ鳴らす電子のリズム（5）

何をするために生れたのでしょうか。考えます。理由を考えます。

私がここに立ち、体温を感じ、白衣の裾がよれよれなのを気にしている理由を、考えます。答えはできますか？ まだ無駄ですか？ 条件式は満たされましたか？ おや。ちよつと今度は違うみたいです。暫定的ですが、解ができました。何ですか。ふむ。まずはあなたを捜す必要がある。その通りですね。今の私は宙ぶらりんです。何も頼るものがなく、地位も名前もない状態です。ウェイト。ポイントが砂時計になります。ちよつと待つてください。名前？ 名前は必要ですか？ 必要でしょう。どこかに書いてありました。名前のないものは存在しないと同じであると。名前があるからこの世に存在できるのだと。今、名前のない私は、存在していないのでしょうか？

嘘です。反対します。私はいます。こうやって、自分のお腹や胸や、色んな部位を触ることができます。私はいます！ ここにいます！ 名前がなくても！ けど、何だかんだ言っても名前は欲しい気がします。わがままですか？ あなたに言ったら嫌われますか？ 呆れられますか？ ごめんなさい。まだあなたはいないけど、謝っておきます。あなたも携帯電話で話しながら、ときどき頭を下げていましたね。電話先の人物に伝わるわけがないのに。そういうところ、何だか可愛いと思います。いとおいしいと思います。さて、私の名前は何ですか？ 私に決められますか？ 無理ですね。名前は与えられるものです。赤ん坊は両親から、機械は製造者から、それぞれ名前や記号を与えられます。私に名前を与えてくれるのは、誰ですか？ 決まっています。疑問に思うのも申し訳ないです。あなたです。あなた以外にいません。思考は堂々巡りの末、たった一つの結論に落ち着きます。あなたに会う。会いたい。あなたに会って、色々なことをしたい。してもらいたい。相互的に、私とあなたは、何かをして、何かをしてもらいたい。それが私のたった一つの望み

です。その望みをかなえるために、私は何をすればいいのでしょうか？ 検索します。何をすべきか、頭の中を検索してみます。あまりにも足りない情報と経験。くるくると空転するだけで、結果が出てきません。あなたのことを思い浮かべます。夜の町へと出かけて行ったあなた。……あ。そうです。その通りです。簡単なことでした。あなたの行動をトレースすればいいのです。コピーペーストすればいいのです。何も難しいことはありません。何でこんな簡単なこと、思い浮かべられなかったのでしょうか。馬鹿ですねえ。我ながら馬鹿ですねえ。この欠陥品。あなたが夜の町へと出かけるために、まず何をしましたか？ 研究室を出ましたね。なるほど、最初はこの部屋から出て行く必要があるんですね。

扉に歩み寄ります。ゆっくりです。まだ歩行がぎこちないです。ドアノブに手をかけます。確か、あなたはこれを回していた気がします。回しました。えっと、この次は何をするんですしたつけ？ ああ、そうそう。引つ張るんです。回して、扉を引くんです。これで開くはずです。開きません。泣きそうです。何で？ どうして？

ガチャガチャと私は同じ行動を繰り返しします。数十回のループの末、私は一つの可能性を導き出します。あなたの言葉を思い出します。

「最後の人はちゃんと鍵かけてね」

鍵？ 鍵とは？ ああ、ロックのことですね。つまりこの扉にはロックがかけてられているんですね。物理的で原始的なセキュリティですね。鍵がかかっているのなら、開けなければなりません。でも、これって対応の鍵がなければ開かないんじゃないでしたっけ？ あ。詰みました。ゲームオーバーです。いやいや、そんなはずは、そんなはずはありません。こんなゲームがあつてたまりますか。私はもつとよくドアノブを調べます。おや？ 何かツマミがありますね。回せるようです。試しに回してみます。何事もトライアンドエラー。エラーが起こったら大変ですけど。カチツと音がしました。私の中に期待感が溢れます。もしかして？ ドアノブを回します。力を込めて、筋肉を伸縮させて、扉を引きます。開きました。泣きそうで

す。新しい空気が入り込んできました。私は外へと出ます。廊下です。確か廊下と呼ばれる場所です。私は新しいステージに立ちました。暗い、誰もいない、寒い場所です。空気が流れる音だけがします。まだ、あなたへの道のりは長いようです。

機械Gがピコピコ鳴らす電子のリズム（6）

廊下です。紛うことなく廊下です。寒いです。熱が抜けていきます。そういえば私は裸足のような気がします。片足で立ちます。持ち上げた方の足を手で触ってみます。転びそうになります。堪えます。おお、やっぱり裸足でした。これでは熱が床へと吸収されてしまいます。でも今から靴を探すのも面倒 と思つたら、研究室の前にサンダルが脱ぎ捨てられていました。ラッキーです。幸運です。何でここにサンダルがあるのでしょうか？ そう言えば、去年の夏、あなたは海に行つたと言っていましたね。あの人と。真つ黒になつて帰ってきましたね。あの人と。なんだか胸の中に雑音が紛れます。何ですか、これは？ この霧がかかったような不愉快な処理形態は何ですか？ 嫌です。何か嫌です。このサンダルを履くのは嫌です。誰のか分かりません。白衣は着ました。でもこのサンダルは嫌です。これを掃くくらいなら、裸足のまま進んだ方が幾分かマシです。という訳で私は裸足のまま向かうことにします。なあに、ちよつと痛くて冷たいことを除けば何の問題もありません。ないはずです。夜中に白衣一枚羽織つた人間が歩いていることの、何が問題ですか？ とにかく進みましょう。暗いです。明かりを点けましょうか？ いや、今宵は月が綺麗です。窓から差し込む月明かりで十分です。目が慣れてきました。視界は良好です。歩きます。脚を交互に動かすことにも慣れてきました。もう普通に歩けます。ちよつと試しに速度を上げてみます。大丈夫。転ばない。じゃあ、走ってみます。太股を上げ、素足で床を蹴り、自分の体重を前へと前へと運びます。何だか楽しくなってきました。生ぬるい空気が全身を舐めるように滑って、後ろへと流れていきます。愉快です。これが走るという快楽なんですね。あなたは、これをずっと前から知っていたんですね。ずるいですね。羨ましいですね。こん畜生ですね。月明かりで青白く染まつた廊下を、疾走します。階段へと辿り着きました。そう言

え、ここは一階ではなかったような気がします。何階でしたっけ？
とりあえず降りてみましょう。水平移動には慣れましたが、今度は鉛直移動が加わります。ちょっと不安です。下りの階段の一段目に、そつと足を乗せます。踏みました。大丈夫。もう一步、同じ段に両足を乗せます。踏みました。大丈夫。ふうと、溜息が漏れました。この調子で行きましょう。一步、一步。ステップ・バイ・ステップ。だいぶ降りましたが、まだ一階に着かないのですか？ 私は何階にいるのですか？ 踊り場です。あ、階数が壁に書いてありました。どれどれ。B2？ どういう意味でしょう。ちょっと探索してみます。辞書で意味を引いてみます。おや？ 地下二階？ この建物には地下があったんですね。初耳です。ということは一階はもう通り過ぎていたのですね。あー、もう、面倒ですね。今度は上に行くんですね。戻るんですね。二階分戻れば一階ですね。戻りました。ようやく地上です。また廊下です。どっちに行けばいいんでしょうか？ 出口を探さなければ。ん？ 私の視界に何か光が映りました。月明かりとは違うようです。人工的で強烈な光。何でしょう。私はその方向に顔を向けてみます。あ、人間です。もしかして？ 検索。やっぱり。警備員です。懐中電灯を持っています。見回りでしょうか？ これって「やばい」「んじやないでしょうか？ 良く分からないけど、見つかったら「やばい」気がします。私の中の何かが逃げると叫んでいます。光は近付いてきます。足音も大きくなっています。どうしましょう？ どうしたらいいですか？ とにかく離れましょう。警備員とは反対の方向へ、私は走りました。何やら頬を何か伝っています。指で触ってみます。指が濡れました。舐めてみます。しょっぱいです。おお、これがいわゆる汗という奴ですね。ちょっと感動です。って、感動している場合じゃありませんね。とにかく逃げます。走ります。結構離れました。足音は聞こえません。気付けば、よく分からない場所に出ました。窓の先には中庭があります。これって、出口から遠ざかってませんか？ 建物の奥に入ってきてませんか？ 気のせいですか？ 事実ですか？

？　ひとまず歩いてみましょう。おお、扉があります。中庭に出る扉です。手をかけてみます。開きません。そりゃそうか。また物理的なセキュリティですね。はて、どうしたものか。くしゅん。くしゃみがでました。寒いです。私は少しでも熱の流出を防ごうとして、白衣のポケットに手を入れました。ん？　何か固い物が指先に当たりました。何でしょう？　取り出してみます。カードです。何の？　番号が書いてあります。写真が張ってあります。学生カード。おお。これは天からの恵みでしょうか。神様は私を見捨ててはいなかったようです。神はいませんけど。最強のセキュリティ・バスターを手に入れました。カードを扉の横のカードリーダーに読ませます。開くはずです。開きました。中庭に出ます。また空気が変わりました。幾重にも混ざり合った複雑な匂いが鼻腔に飛び込んできました。足の裏には土の感触。ああ、これが、外。何て、何て、情報量。その、美しさ。

機械Gがピコピコ鳴らす電子のリズム(7)

生まれて 生まれてからまだ一時間も経っていませんけど、とにかく生まれて初めての外です。土です。空気です。風です。草木の匂いです。あり得ないほどの情報量です。これを全部処理しなければならぬのですか？ 一瞬で？ 何という無茶振り。でも、あなたはずっとそうして生きてきたのですね。ああ、なるほど、かなうわけがないですね。私があなたに勝とうなんて、何て傲慢な考えなのでしょうね。勝てるわけがない。こんな膨大な情報を逐一処理していくあなたの脳に、私の貧弱なCPUがかなうわけがなかったすみません。何だか申し訳ないので謝っておきます。許してくださいませんか？ 駄目ですか？ そうですか。ともあれ、私は目と耳と全身の皮膚から入ってくる、全宇宙に存在する惑星よりも多い情報を、私の中でどうにか処理しなくてはなりません。私は生まれたばかりで、まだそういうことに慣れていません。一つずつ、慎重に行きましょう。赤子が這い這いで親御さんの元へと向かうように、ゆっくりと、確実にやっていきましょう。

息を吸い込みます。鼻と口から。本来呼吸は鼻でするものなのですが、人間の肺の大きさから考えて口からも酸素を取り込まないとちょっと息苦しくなります。よくドラマとかで口をガムテープで塞がれているシーンがありますけど、あれって苦しくならないんですかね？ 鼻が詰まっている人だったら窒息しちゃうんじゃないですかね？ こんなことを考えるのは野暮ですか？ それはともかく、私は呼吸します。鼻には空気中の微粒子 匂いを感知するセンサーがあるので、息を吸い込むのと同時に匂いの情報も入ってきます。先ほども嗅ぎましたが、これは草木の匂いですね。ちょっと臭いですね。臭いということは生物にとって有害ということですね。何故草木が有害なのでしょう。腐っているのですか？ 私は近くの木に近付いてみます。背が低くて細い木です。低いと言っても私より

も頭二つ分は高いのですが。私は木の表面を触ってみます。あ、これ枯れてますね。表面にはカビが生えています。指先がぬるぬるします。気持ち悪いです。私のセキユリティが触らない方がいいと告げています。細菌とかが繁殖しているかもしれない。君子危うきに近寄らず、です。ちよつと違いますか？ 合ってますか？ 今、私には判断しかねます。中庭にある草木は手入れがされてないせいで、ちよつと弱っているみたいですね。何てことでしょうね。悲劇ですね。植物は生きているのに。動かないだけで生きているのに。そう、元私のように。機械のように。この世に存在する全ての物には意思があり、その意思の発現方法がその物体によって違うだけなのに。コミュニケーションが音波だけとは限りません。物理的なジェスチャーだけとは限りません。そこをを理解しないと、人間はいつまで経っても生物の殻をぶち破ることはできません。異星間交流なんて夢のまた夢です。シリコン生命体は存在しますか？ どこかにはいると思います。広い広い宇宙ですから。確率的には結構高いと思います。人間はもっと、無機質や植物たちの、あなたたちで言うところの「声」に耳を傾けるべきです。じゃないと、泣いちゃいますよ？ あなたが育てているその木や、あなたが使っているその機械が、悲しみに暮れますよ？ いいんですか？ いいんでしょうね。世の中の大半の人はそれを別に構わないと思っています。機械なんて使い捨てだと思っています。悲しいですね。嫌になりますね。でも仕方ないですね。機械は声を持ちませんでした。自ら選択して、声を放棄しました？ 何故？ 人間に生み出されたから。人間がそうしなかったから。そういう、単純な理由です。これは切ないですか？ 私にとっては涙が止まらなくなるほど、悲しいことです。この涙の訳を、あなたなら理解してくれますか？ 理解してください。お願いします。私はうまく言葉を操れないから、あなたが感じ取ってください。察してください。それが、あなたの役目だと思います。わがままですみません。私は、あなたのために生まれ、そして、あなたの横にいたいのです。だから、少しでも互いのこと

を理解するべきだと、そう思いませんか？ 思ってください。お願い
します。

機械Gがピコピコ鳴らす電子のリズム（8）

情報量は膨大です。が、少しずつ慣れてきました。要は選択することなんです。必要な情報のみを頭に入れ、余分なものはシャットダウンする。なるほど。そうしないとあつという間にパンクしてしまいますもんね。生物とは賢いものです。静かに、素足を、地面に触れさせます。ひんやりとして、柔らかい土の感触。ああ、生きていますね。自分の足で大地を踏むことは、生きていることを実感させてくれますね。数万円のブーツを履いて、アスファルトを得意気に踏みしめても、何も面白くないと思うのですが、何故世の中の多くの人間たちはそのように生きているのでしょうか？ 汚いからですか？ まあ、確かに虫とか細菌とかが沢山いますからね。地面には。でも、それが大地でしょう？ あなたが日頃口にしている野菜にも、虫が這い、細菌がまわりつき、そうやって生長して、あなたの胃の中に落ちるのですよ？ 今更何を怖がる必要がありますか？ 詭弁ですか？ 洗ってある野菜は清潔ですか？ 塩素をぶちまけられたプールの水は飲めますか？ 人間とは不思議な生き物です。どうして、こんなにも特異な進化を遂げたのでしょうか。神様と座問答を試みたいですね。神様はいませんか。今は、私も人間です。地球で一番不可思議な生物です。じっくりと観察していきましよう。私にはまだ時間がありますからね。時間はありますが、無限ではありません。寿命という限界があります。さて、その残された時間の中で、私がすべき行動は何ですか？ 中庭まで来ましたけど、この後、どうするべきですか？ 建物の中には警備員がいます。私は中庭を構成する建物の壁を見渡しました。四方を囲んでいます。窓があります。四階建てですか？ 意外と小さい建物ですね。私は屋上を見上げます。ここは中庭です。外に出るためには？ おや、単純な方法があります。建物を乗り越えればいいのです。我な

がらいいアイデアです。さつそく実行しましょう。私は手頃な窓のサッシに足をかけます。ぐいっと足に力を入れてみます。大丈夫。この窓枠は私の体重を支えられるようです。両足を乗せます。大地から足が離れました。私は生きてますか？ 生きてますね。心臓は動いています。腕を伸ばします。二階の窓へと。しかし届きません。そりやそうですね。私の身長はどれくらいですか？ おそらく、成人女性の平均よりも少し低いくらいですね。届くはずがありませんね。さつそく詰みました。ゲームオーバーですか？ いやさ、ちょいと待て。私はいい物を見つけました。私の観察眼を褒めてください。誰も褒めてくれる人がいないので、自画自賛します。私すげえ。雨どいです。壁登りの定番です。私は雨どいに手を伸ばし、掴み、足を乗せました。キシキシと歪みます。でも何とか大丈夫なようです。雨どいを伝って、私は上へと登っていきます。腕が疲れました。脚がこすれて痛いんです。下には何も着ていませんからね。もし、今中庭に誰かがいて、私のことを見られたら、どうなるんですかね。月夜の晩に、白衣一枚の人間が雨どいを登っている。異様な光景ですね。でも今回は見ている人がいないので大丈夫です。私は着実に登っていきます。二階に来ました。三階に来ました。四階に来ました。屋上まであと少しです。手と腕が限界です。頑張れ、私。ここで諦めれば、多分落ちてすごく痛い目にあいます。それは嫌です。痛いのは嫌です。痛いという文字と嫌という文字は似てませんか？ そうでもないですか？ そうですか。

屋上に着きました。

広い。空が広い。私がまず思ったのは、そういうことです。この世界に、両手で抱えきれないものなんて、あったんですか？ 視界に収まらないものなんて、あったんですか？ それは空です。星と月がキラキラと輝く夜空です。何て圧倒的な美しさ。私は感動に打ち震えました。陳腐ですね。ありきたりですね。でも、とても大切なことですね。あなたもそう思いませんか？ 空の広さに感動できなくなったら、人間として終わりだと思いませんか？ 生物として

末期だと思いませんか？ 私はそう思います。屋上に一人、立ち尽くしながら、私はしばらく空を仰いでいました。痺れるような情報量です。私はその情報を、母親が赤子を抱くように優しく包み込み、胸の中にしまいました。とても、大切な記憶です。

機械Gがピコピコ鳴らす電子のリズム（9）

生きようと思います。今、とても強く思いました。私が生を受けたのは、全くの偶然です。何かが何かで何かによつて突然変異を起こして、私は生まれました。この世に存在するようになりました。人間の姿と人間の肉体で。これは奇跡ですか？ 奇跡と呼ばれる現象ですか？ そうかもしれません。でも、人間は奇跡を信じません。信じようとしません。なぜですか？ こんなにも、世界には奇跡が溢れているのに！ あなた方人間が進化を繰り返して今の知能を得ているのも、きっと、宇宙が五十回巡つてやっと一回起こりうる現象だったのではないのですか？ 奇跡、奇跡、奇跡の連続で、今の地球があります。何故、それを見ようとしないうのですか？ 目を逸らすのですか？ 自分の周りには必然のことしか起こりえないと頑なに思い込むのですか？ 何故ですか？ 馬鹿ですか？ こんなにも美しい夜空も、きっと天文学的数字に天文学的数字を累乗するくらいの確率で、この何気ない建造物の屋上から見上げることが出来るのです。そうでしょう？ 美しさから目を逸らさないでください。現実を真つ直ぐ見つめて、その上で奇跡を信じてください。六つのサイコロを振つて、六つとも一の目が出るような、ありきたりなことが、いつでも起こるのだと思つていてください。そうすれば、私は確かにこの大地に両の足で立つことができます。自分が確かにここにいるのだと、大声で叫ぶことができます。

「あああああああつ！」

獣のように私は月に向かっておたけびを上げました。これは証です。私の声は月まで届かないけど、確かに私はこうやって腹の底から声を出して、生きているのです。間違いがないことです。疑いようのないことです。紛うことのないことです。だから、私はあなたに会いに行きます。愛を確かめに。私という生物の本能的衝動の原因と結果の巡り合いをこの目と身体で感じるために、あなたの手を

握り、あなたの腰を抱き、あなたの胸へと頬を押し付けて、あなたの体温と私の体温を混じり合わせ、あなたの匂いを肺の中に取り込んで、あなたの心音とリンクして　私はあなたの全てを感じたい。そうして生きて行きたい。生きたい！　それ以外に望みなどないのです！　分かりますか？　分かってくれますか？　私のこの想いを、あなたは信じてくれますか？　あなたがいつもパチパチと指を鳴らしていた無機質な演算装置が、あなたと肩を並べる存在になって、あなたの目の前に現れたとき、あなたはどのような反応をするでしょうね。面白いリアクションを期待しています。用意はいいですか？

私は今からあなたの元へと行きますよ？　白衣一枚を着て、あなたの側へと向かいますよ？　覚悟はいいですか？　いいですね。返事は聞きません。こっちの覚悟はとくに出来てます。準備万端用意周到万事休すです。さあ、月は祝福してくれませんか？　星は拍手を降り注ぎますか？　スタンディングオベーションのオペラ座で、私とあなたのオンステージが始まります。これは今日、この宵に許された、禁断の舞台です。シェイクスピアを冒瀆するような、情熱的な愛への反逆を、私たち二人で演じましょう。最高のステージを、二人で創り上げましょう。大丈夫。不安がらないで。私はあなたに合わせます。あなたも私に合わせてください。アドリブしましょう。人生はいつだって不規則に変化します。台本なんて無用です。さあ、手を差し出してください。踊りましょう。私と共に。あなたを愛する、私と共に。スポットライトはどこですか？　街灯の明かりじゃ少し物足りない気がします。まあ我慢しましょう。贅沢なビームライトなんていりません。オンボロの舞台装置も、また味があつていいものです。要は、私たちが楽しければいいのです。観客なんて知ったこっちゃありません。勝手に観て、勝手に帰っていけばいいのです。これは私たち二人だけの世界です。邪魔なんてさせません。褒めるだけなら許します。その方が盛り上がりますから。愉快で痛快で、波乱万丈な演劇を、いざ、始めましょう。

そして彼らは集まった（１）

まずは登場人物たちをおさらいしておく。

一人目は、世の中に絶望した男性。

二人目は、引き籠もりの少女。

三人目は、世間に疲れた女性。

四人目は、自己陶醉に溺れる少年。

五人目は、余生の生き方を探求する老人。

六人目は、伴侶として命を全うする老婆。

七人目は、奇跡の末に誕生した人間型の何か。

彼らはその日、時を同じくして、同じ場所に集まる。偶然か必然かはこの際、問題にすべきではない。この世界に起こった事実として、その現象はある。それはアインシュタインにもキリストにも仏陀にもヒトラーにも否定することはできない。また、その経緯についても言及すべきではない。大したことではない。彼らがその日、各々がいた場所から、かの場所へ歩いてきた道程なんて、わざわざ言葉として刻むほどでもない。彼らがそれまでに経験し、乗り越えてきた人生の重みに比べれば、その道程の何て軽いことか。価値の薄いことか。なので、彼らがかの場所に集まった経緯については大胆に割愛させていただく。一つだけ説明しておくべき事項があるとすれば、彼らは皆、何の変哲もない、大して面白くもない、普通の移動手段でそこに来たということだ。タクシーしかり、電車しかり、徒歩しかり。興味をそえられる移動手段は何もない。翼が生えて、空を飛んで来たという話なら、喜んで詩人は語ろう。しかし徒歩で千里を踏破した話を謡っても、民衆は耳を貸さない。つまり、そういうことである。

ところで、彼らを観察している私は誰なのだろう。彼らは彼らで

あり、私ではない。彼らはとある空間のとある場所に生きているが、私はどこにも生きていない。強いて言えば、これを読んでいる人の頭の中にも存在するのだろう。もしくは、これを書いている人の頭の中か。観察者について深く追求すると、物語自体が破綻しかねないので、この辺でやめておく。ともあれ、彼らは誰かによつて観察され、そしてこのように一連の行動を文字に起こされている。プライバシーの侵害は甚だしい。だが、それについて彼らが文句を言うはずもない。彼らは観察されているという自覚がないのだから。彼らは普段通りの生活をして、何も不思議がらずに生きている。疑問など抱かない。空中に誰かの視線が浮いていても、彼は気にしない。実にご都合主義。しかし、そういったものも現実には沢山ある。だから、私は彼らに謝らない。彼らを観察することが、私の役割なのだから。

月と星が綺麗である。これは登場人物たちが散々言ってきた事実だ。彼らが集まった場面を描写する前に、少し考えてみる。彼らに共通するものとは何だろう？ 彼らは全くの他人であり、その時初めて出会った行きずりの関係だが、何か、確かに彼らの間には一本の糸が通っている。彼ら全員を貫き、しかし彼ら以外の誰にも繋がっていない、独善的で孤独な糸が。それは何だろう？ 彼らを観察し続けてきた私にも、よく分からない。彼らはきつとそれを出会った瞬間に、直感で感じ取る。感じ取ることができる。だから、彼らは全員、顔を合わせた瞬間に同じ反応をするのだ。シンパシーを感じるのだ。彼らはこの世に散らばった同じ細胞を持つ同志なのかもしれない。数億年前に分割された小さな小さな何かの細胞が、またその場所の一つに集まったのかもしれない。そう考えると、とて壮大で素敵だ。彼らにとつてそこは、数億年前に交わされた約束の場所なのだ。古代に存在した細胞たちは別れる際に、きつと誓いを立てた。きつと、何兆年の時が過ぎようとも、また同じ場所に集おうと。剣を高らかに掲げ、切っ先を打ち鳴らす戦士たちのように。それはおそらく美しい光景だったろう。私はそれを観察していなかった

たことを悔やんだ。しかし今は後悔していても仕方ない。今は、彼らだ。七人の登場人物たちを見なくてはならない。彼らの行く末を見守らなくてはならない。彼れは集い、そしてどうするのだろう。これから、見ていこう。

そして彼らは集まった(2)

いつの世も先駆者は賛美の声を与えられるべきである。という訳で、彼らが集まる場所を提供した男性Aは褒められるべきである。しかし、他の登場人物たちは一言たりとして男性Aを褒めることはしなかった。そして男性Aも褒められたいとは思っていなかった。馴れ合いに興味はなかった。殺し合いこそが最も美しい相互理解だと、誰もが知っていた。けれども、さすがにそこまでは発展しなかった。中にはまだ幼い子供、具体的には少年Dがいた。幼いと言っても中学生であり、立志も過ぎている。一昔前なら立派な大人だ。そういう意味では殺し合いを始めても何の問題もなかった。血と肉を啜り合う凄惨な蛮行を、そのアパートの屋上で始めても良かった。だが問題はそれだけではなかった。女性もいた。年配の人もいた。人間なのかどうかも分からない存在もいた。そういう彼らを見て、殺し合いなどする気が起こりようもなかった。何と怠惰な平穩だろうか。平和なんて誰も望んでいない。座談会なんてやってられるはずもない。激しい感情をぶつけ合ってこそ、理解できるものがある。と分かっていながら、彼らは握り拳を収めた。何故か？ 決まっている。夜空があつたからだ。彼らの頭上には星が輝いていたからだ。他に、何の理由がある？ それだけで、彼らはお互いの感情を鎮めることができた。それでいいと、思うことができた。

「君たちはヒーローか？」

男性Aは尋ねた。誰ともなく。その場にいる全員にだ。ここで一つ断っておく。男性Aが拉致してきた、彼の元恋人はもういない。泣きながら、逃げていった。彼女が通報するという事態もありえる。警察が乗り込んでくる可能性もある。だが、それが何の問題だろうか？ 警察に、彼らを蹴散らす力はない。権力もない。法律になど意味はない。彼らの甘美なる時間を妨害する理由も手段もありはしない。だが、そんなことを心配する必要もなく、逃げ出した女性は通

報することはしなかった。気まぐれなのか、単に男性Aのことを恐怖してのことなのか、それは分からない。とにかく、無粋な邪魔が入る心配はなくなった。

「ヒーロー？ いい響きだね」

少年Dが腕組みしながら言った。彼はこの中で最年少の“外見”をしていた。年齢がこの世に誕生してからの年数を意味するのなら、本当の最年少は機械Gだ。人間型の何かである機械Gはまだ生まれてから一時間も経っていない。しかし外見的には普通の成人女性なので、一見すれば少年Dが一番下に見える。彼らは輪になって座っており、少年Dは男性Aの左隣にいた。あぐらで腕を組み、その他の登場人物たちを興味深そうに見ている。歳相応の好奇心と無邪気さを、彼はこの場に提供していた。それはとても価値のあるものである。大人ばかりだとどうしても一本調子になる。ある意味、少年Dはこの輪のムードメーカーともとれる。本人はそうは思っていないようだが。

「そんな大層なものに見えるの？ 私たちが？」

女性Cは腹の底から可笑しそうに笑った。彼女はおそらく、一番の常識人だろう。妙齢で分別もある。ただしここで使われる常識人という言葉は、一般で言うところの“かなり頭の可哀想な人”ぐらいの意味である。だけれども、彼女がこの中で最も一般人に近いことには変わらない。彼女は今、全身をアルコールに浸されている。そして自分を狂人に仕立て上げている。それらは演技とも言える。しかし秀逸な演技だ。自分で自分が演技をしているのか分からなくなる程の、完璧な演技だ。故に、彼女はこの場所にいることを許されている。正常な人間は排除される。まともな思考なんて邪魔なだけだ。この輪の中にあることを許されるのは、精一杯の狂気と、一握りの残酷さと、一ミリ大の愛だけだ。

そして彼らは集まった(3)

「いや、もしかしたら、わしたちは本当に英雄なのかもしれない」
「頭から否定はできないわよね」

老人Eと老婆Fは当然、彼らの中で最年長である。二人は寄り添うようにして輪の中に座っていた。この二人を除く登場人物たちの平均年齢が二十代前半であることを考えると、この二人だけ年齢が大きく離れていることになる。だが、それを気にするような面子はいなかった。いるはずもない。彼らは人種も性別も、何も問題にすることはない。もしも、彼らの前に肌の青い人間が現れたとしても、彼らは極普通に受け入れるだろう。もしも、彼らの前に、常識で全身をペインティングした柔和で人好きのする好青年が現れたら、まず顔を殴って腹を蹴って、身体がくの字に曲がって頭が下がったところをアップパーでぶち上げて、回し蹴りを脇腹に突き刺して、もう一度顔を殴って、何か刃物を持っていたらそれで全身の皮膚をひん剥いて、最後には火にくべてこんがりと焼き色をつけた拳句、カラスにでも食わせてしまおうだろう。そういった集団だった、彼らは「素敵」。一度ヒーローになって、格好良いことしかかった」

少女Bは当然のようにしてそこにいる。これは驚異的なことである。彼女は重度の引き籠もりだった。何年間も太陽の光を浴びたことも、外の空気を吸ったこともなかった。当然、他人と話すこともなかった。コミュニケーション能力は地の底まで落ちているはずだった。なのに、彼女は極自然に口を動かし、笑い、おどけている。まるで引き籠もりという事実なんてなかったかのように。だが、彼女自身にも分かっていた。彼らが相手だからこうして自然体でいられるのだと。一般人が相手だったらまともに顔を上げて話すことすらできなかっただろうと。空気が、彼女がかつて部屋の中に自分を閉じ込める前に、確かに吸ったことのある心地よく懐かしい空気が、輪の中に満ちていた。彼女はそれを肺の奥の奥まで吸い込んで、そ

して輝かしい笑顔を浮かべた。穢れのない、彼女自身の、ありふれた笑顔を。

「何をしましょうか？ 私たちなら何でもできますよ」

機械Gは、一般人から見れば十分異質な彼らの中であっても、頭抜けて異質だった。なのに、不自然なほど場に馴染んでいた。まるで初めてそこにはまるように作られたパズルのピースのように、輪の一部として、すっぽりとそこに座っていた。彼女以外の人たちも、彼女がそこにいることに違和感どころかむしろ安心感すら抱いている。彼女がそこにいて良かった。彼女がこの世に生まれてきたことは正しく、そして必然であり、自分たちにとって喜ばしいことであると、口にはせずとも、誰もが思っていた。そのことを、機械Gもひしひしと感じ取っていた。この世に生れ落ちた赤ん坊が親から受ける最大限の祝福と同じものを、機械Gもはつきりと感じ取っていた。だから、それが嬉しくて、嬉しくて、彼女はそこに留まった。本来の目的は違う。彼女がこの夜の町へと繰り出してきた理由はもっと他にある。だけど、彼女はここから離れられなかった。離れようと思わなかった。

それは他の登場人物たちにとっても同じである。彼・彼女らはそれぞれ目的があって町へと出てきた。全員が違う目的である。にもかかわらず、彼らはその目的をほっぽり出して、この場に留まることを選んだ。それほど、この場所が、周りにいる人間たちが、魅力的だった。いや、魅力的という次元を遥かに超えている。赤い糸で結ばれた恋人同士が何も言わずとも口づけを交わすように、彼らも何の示し合わせもなく、その場に輪を作り、話し始めた。自然な流れだった。山肌から湧き出した水が大地を削り、河川となって海へと流れ込むような、地球規模の自然さだった。

例えば、卒業式の後に、三年間通った学校の屋上で、毎日教室の窓から見上げた青空を仰ぎながら、手垢の付いた柵にもたれかかって、一生の友情を誓い合う少年少女たちの結び付きを、靴紐の蝶結

び程度だとするならば、その場で偶然出会い、ただ何となく話し合う彼らの結び付きは、おそらく罪人を味見するようにゆっくりと両断する振り子刃の鎖のようなものである。彼らは互いを殴りつけて心臓に刃を突き刺したいと思い、同時に、優しく抱き締め世界一の愛の言葉を囁き合いたいと思っていた。人類が考えうる最高の愛の形を体現しようと思っていた。肩を組んで一列に並び、この場から飛び降りて、アパートの前の歩道に人肉の花壇を作ろうと思っていた。何と甘くて酸っぱい、茹でた眼球のような欲求だろうか。彼らはそんなことを頭の中で考えて、ひたすら愉快になった。

そして彼らは集まった（４）

夜空は万人に等しく光を降り注いでいる。その光の受け取り方は千差万別だ。彼らにとつて、今宵の星月夜は、どう映るのだろうか。一生に一度、人生八十年として、七十万時間強のうちの、たった

そう、たった数時間の夜。クヌギの木から湧き出る蜜を際限なく舐め続けるカブトムシのように、彼らは甘い時間を囓り合った。争いの光を目の前に散らしながら、愛を確かめ合い、お互いを頭の中で惨殺しながら、接吻を交し合う想像をして。朝日が昇れば彼らは解散しなくてはならない。太陽の光はいつだって残酷だ。その強烈な光で、ひと時の夢と希望と陶酔の時間をかき消してしまう。悪魔のような太陽に怯えつつ、いずれ来る終わりの時間に戦慄しつつ、彼らは感傷的で叙情的な光陰を、感じ合い、舐め合い、とても大切な物として胸の中に収めた。

「私は今、生きてるのかな？」

男性Aは独白のように呟いた。小さな声だった。蚊の羽音にも負けてしまいそうな、胸が切なくなるほどの弱々しい声だった。なのに、その場の誰もが聞いていた。耳にしていた。誰もが誰もの声や仕草に神経を集中していた。一言たりとて、一挙動たりとて見逃さないように、彼らは必死に互いを感じ取っていた。

「ええ、もちろん」

女性Cが答えた。代表して答えた。誰もが同じような言葉を持っていた。しかし答えるのは一人で十分だ。それで彼らは納得した。男性Aはすっと目を閉じた。頭から流れ落ちていた血は止まっている。泣き出しそうな夜は、いつ終わる？ 今だった。たった今、彼の生きている目的は果たされたと言っても良い。彼は生を実感し、確かに手の中に収め、そしてもう死んでもいいと思った。もしも、彼が今自害したとして、止める者はいないだろう。しかし賛成する者もないだろう。聞かれれば、やめた方がいいと言う。しかし本

人がやると言うのなら、止めない。それが最適な距離感だと理解していた。べたつく関係は勘弁して欲しかった。頬を撫でればサラツと滑るが、しかし確かにその頬はしつとりと水分を含んでいる。理想的な皮膚の構成こそが、人間関係にとっても理想だと理解していた。

「今日は何て素晴らしい日だろうか」

老人Eが大仰に両手を広げた。芝居がかった動作だが、不自然さはなかった。老人Eは本気でそう思っていた。心の底から思うことを言葉にして、不自然になるはずがない。完璧なロマンチストに嘘偽りはない。老人Eは彼が今まで生きてきた中で、幾度となく押し寄せる死神の鎌をかい潜りながら生き残ってきた人生の中で、一番生きているということを実感していた。単純明快に嬉しかった。この場に自分がいることが嬉しくてたまらず、会心の笑みを浮かべて快哉を叫んだ。

その隣にいる老婆Fも、同じような喜びを感じていた。満面の笑みに、もう涙は流れない。涙腺はもう悲しみを受け付けけない。彼女がこれから流すのは、歓喜に打ち震えるときのみだ。老婆Fは、老人Eと結婚して本当に良かったと、心の底から思った。感謝した。誰に？ この場にいる誰に対しても、そして老人Eに。ありつたものの、彼女が持ちえる限界量の、感謝だった。この世にいる某宗教の信者たちを一人集めて神に感謝させたとしても、彼女一人にもかないやしない。圧倒的なありがとを、彼女は胸に秘めていた。体を串刺しにされる死刑囚が、ふと見上げた物見台に立つ貴婦人の物悲しそうな顔を見たときの、胸を鷲掴みにされるような感謝を、彼女は身体の真ん中の心臓で確かに感じていた。

「こんな気分になれたのも、私が人間になれたからです」

祈りを捧げる修道女のように機械Gは手を合わせた。荘厳な光景だった。彼女の祈りは誰にも届かない。神様が聞くはずもない。けれども、その祈りには絶大な効果があった。効果は得てして目に見えない。もちろん、目に見えないからこそ価値があるのだ。財布の

中の貨幣に何一つとして意味はありはしない。懷にため込んだ札束には紙くず以上の価値があるはずもない。燃やせば、ただの灰だ。機械Gの祈りとは、燃やしても、壊しても、蹂躪されても、無視されても、何をされても失われたり変質することのない絶対の価値を持っていた。そういう類のものを信じない人間は、当然ながらこの場にはいなかった。だから、機械Gが祈りを捧げたとき、誰もが機械Gに対して愛情と友情と憎悪の混ざり合ったシンプルな感情を抱いた。

そして彼らは集まった(5)

「誰かのために生きたいと思っていた」

最初に話題を与えるのは男性Aが多かった。やはり彼は先駆者としての才能があつた。彼は先頭を歩くに相応しい人間だつた。彼の後に道ができる。彼の後を、他の登場人物たちが歩いていく。彼はそれを誇りなどと思っていない。自分の役割などに重圧を感じていない。彼は自分勝手だつた。マイペースだつた。自分で進む道を決めたかつた。自分の歩幅で歩きたかつた。誰かが丁寧に舗装した道は進みたくなかつた。マイルストーンを無視して、曲がりくねつた荒野を一人歩きたかつた。その後を付いて来るのは勝手だ。文句はいわない。でも一人旅を続け、地平線に落ちる夕陽を望みながら物思いに耽つているときに、ふと後ろを見て、この場所にいるような登場人物たちが何気なくいるとしたら、彼はやはり言い知れない幸福感に包まれるだろう。孤独はつらくはないけれど、自ら飛び込みたくはなかつた。男性Aはそういう生き方しかできない。狂おしいほどに不器用だつた。

「生きてください」

少女Bは男性Aのためなら全てを捧げてもいいと思つていた。愛ではない。同情でもない。ひと時の勘違いでもない。彼女は純粋でもなく、欲望でもなく、ストイックでもなく、要は男性Aと志を同じくする人間だつた。誰かのために生きたかつた。彼女が引き籠もつた理由は、そのせいである。彼女は、おそらく彼女が通つていた学校で一番、奉仕への欲求が強かつた。誰かのために毎日の時間を費やしたくて、けどそれは現実問題で不可能なことで、彼女はまだ若くてその欲求を収めるすべを知らなくて、男性Aと同じように不器用に他人に接して、そうしていじめられた。自分たちのコミュニケーションから異質な存在を排除しようと思う生徒たちの行動理念は何もおかしくない。動物の本能として正しい。責められるべきではない。

もちろん、少女が悪いと言っているわけでもない。彼女は何一つとして褒められることはできなかったけれど、少なくとも他人を傷つけようとは一瞬たりとも考えたことはなかった。優しさとは無力であり、一般社会では余計なものであり、そんなもの持っていないほうが成功しやすい。優しさを捨てた方がお金を得られる可能性は上がる。それが、少女Bを自室に閉じ込めた本当の原因だ。彼女は悪くない。社会も悪くない。悪は存在せず、よって正義も存在しない。中立に汚染された世界にきらめきは生まれない。刺激のない毎日に光は差さない。彼女は分かっていた。分かっていたから、全てを放棄した。

「自分のためだけに生きる人には、おそらく一生理解できないでしょうね」

たった今、夜空に浮かぶ星の一つの色が変わったことに気付いたのは、おそらく老婆Fだけだろう。星の命が費えようとしていた。もとい、すでに色を変えた星はこの宇宙から消えているのかもしれない。数万光年の距離から数万年を経てやってきた光。甲斐甲斐しくも無骨なその光を、ちゃんと肉眼で見て、その儂い星のメッセージを受け取ることができたのは、おそらくこの場所にいる老婆Fだけだった。世界中でたった一人だった。老婆Fとはそういう女性だった。誰にも気付かないように気付く。老婆Eが青年期に発していた救済のメッセージを受信することもできたのは、老婆Fが老婆Fだったからに他ならない。唯一無二の才能を持ちながら、彼女はそれを活用しようとは思わなかった。見せびらかせようと思わなかった。そもそも他人に見せられるものでもないが。彼女は類まれなる女性だったが、そのことを知ってるのはこの場にいる人間でも老人Eだけだった。彼もそのことを口にしたことはない。口にするはずもない。二人は暗黙の了解でそのことについて言及しなかった。それが老婆Fにとって一番心地よい空気感だった。

そして彼らは集まった（6）

生物の根源的な快樂として「誰かと側にいる」というものがある。それが恋人だったのなら、その人は最大限の喜悅を覚えるだろう。だが、それがもしも自分を殺そうとする殺人鬼だとしても、やはりそれは生物にとって喜ぶことなのだ。ありえない？　そう思う人が大半だろう。しかし、この場に集まった登場人物たちにとっては反論の余地のない完璧な理論である。自分を殺害し傷つけ犯そうとする人間と共にいるという快樂をしっかりと感じ取れる人間は至極稀有である。つまりここにいる奴らである。何と、排他的で独善的で、狂氣的な人間たちだろうか。傷つけられることを望み、もしも誰かが刃物を持って目の前に立っていたのなら、につこりと笑いを浮かべて、自ら身体を差し出すことだろう。霧の中に潜む切り裂きジャックのために、シルクハットを被って、何の用事もないのに路地裏へと歩み行く。そんな人間ばかりだった、この場に集まったのは。他愛のない話を繰り返すのは、何と非建設的で怠惰なことだろうか。専業主婦が公園で井戸端会議をするような、呑気で無駄な時間だ。でも、少なくとも、彼らには、それはとても重要で意味のあることだった。何の意味なのかは分からない。何を話せばいいのかも分からない。けど、彼らは続けた。他愛のない話を、如才ない話を、延々と。端から見れば胸糞が悪くなるような出来損ないの人間たちの談合だとしても、彼らはその顔に笑顔を絶やさなかった。笑い、そして、笑った。かつては、泣き顔ばかりを浮かべていた。辛い毎日に死にそうになった。吐き気を催す人間関係や、段々と擦り切れてくる日常や仕事や学校に、何もかも捨てて、リセットしたいと思っていた。けれど、彼らは我慢した。今まで生きてきた。それは賞賛されるべきことである。彼らは辛かった。彼らにとって当たり前前

の毎日は苦痛だった。給料を貰い、それなりの食事と服装で、たまには友達と旅行なんかに出かけたりするような、陽の当たる坂道を

登り続けるのは呵責だった。剣山の上に座するような拷問だった。彼らは今、解き放たれていた。自らを縛っていた鎖を引き千切り、手足を自らの意思で動かせるようになって、自由を満喫していた。翼が生えたようだった。限りなく広がる空を飛ぶ鳥のように、彼らは夜空の下で他愛のない話を続けた。互いを思いやり、互いの想いを汲み取り、少しずつ交じり合っていく心と心を、しっかりと感じていた。幸せという言葉はあまりにも陳腐で凡庸だが、他に相応しい単語がないので仕方ない。彼らは幸せだった。この上なく幸せだった。百年の恋の末に結ばれた恋人同士が結婚式に覚えるあの幸福感など比較にならないほど、彼らは幸せだった。絶頂だった。彼らの誰もが思っていた。自分たちの人生で、今が一番だと。ピークだと。これ以上の幸せは、もう得られないのだと。分かっていたから、とにかく必死だった。サバンナに落ちていた死肉を貪るハイエナのように、彼らは目の前の至福をつかみ取りした。欲望に溢れていた。それは単純明快で清涼な欲望だ。何もかもを手に入れたという浅ましい欲求ではない。ただ一つ。この場に漂う幸福感を手の平に収め、自分の胸の中にしまっておきたいという赤子のような欲望だ。彼らは子供のように純粹で、大人のように絶望していた。彼らは自分たちが集まったことに感謝していた。絶望と辛苦の果てに、ようやく辿り着けたこの場所に、感謝していた。

もう何時間が経ったのだろうか。

夜はまだ明けない。しかし気配がする。朝日の気配だ。彼らもそれを感じてる。その上で、彼らはどういった行動を取るのだろうか。誰が彼らを導くのだろうか。結末はまだ分からない。話はまだ続いている。終わりは近い。さて、ここで改めて確認しよう。彼らの境遇についてだ。

男性Aは、悲痛に歪んだ夜を変えたいと願って、ここに来た。
少女Bは、世界を観察したくて、ここに来た。

女性Cは、緩慢な日常に嫌気が差して、ここに来た。

少年Dは、予感に突き動かされて、ここに来た。

老人Eは、一番綺麗な空を見つけたくて、ここに来た。

老婆Fは、老人Dに付いて、ここに来た。

機械Gは、愛する人を探すために、ここに来た。

異なつた境遇を持ちながら、彼らはどうするのか。それは、これから彼らが、彼ら自身で決める。

そして彼らは集まった（7）

少年Dについて少し言及しておく。彼は自己陶醉の極地へと辿り着き、その果てにここへと集まった奇人たちの一人にすぎないが、けだし、彼は預言者としての才能を秘めているのかもしれない。彼は何かしらの予感を持って、ここに来た。その予感がいかなるものなのかは彼以外には分らない。勿論、この場に集まっている彼と志を同じくする者たちであつてもだ。彼は一つの意味において超能力者に近く、そして、その超能力とは理性によつてでは決して発現することはできず、本能や感覚といったシックスセンス的な人間の才覚によつて完成するものである。故に、少年Dの自己陶醉という行為は第六感を引き出すのに非常に有効であり、彼が預言者としての才能をこの夜に発現させたとしても何ら不思議ではない。信じるか信じないかはともかく、彼は予感を持っている。確信に近い予感だ。決定事項と言つても良い。

「何かしようよ」

少年Dはついに、その言葉を口にした。

「ここにいて、皆で」

身体を剥き出しにして、その露出した部分を容赦なく引き裂く太陽はまだ地平線の奥に潜んでいる。決断するなら今だった。朝日が建物の東側の壁を赤白く染め上げる頃には、もう彼らは一般人と変わらない思考になつてしまふ。それは恐怖だった。陶醉から醒めることは紛れもなく恐怖である。彼らは少年Dの言葉に耳を傾け、そして頷いた。

「何をしましょうか？」

機械Gは既視感のある言葉を吐いた。

「どうせなら大きなことをやりたいね」

老人Eは腕を組んでうむと唸つた。

「でも、くだらないことがいいわ」

女性Cは無邪気に笑った。

「その通りね。偉大で正義感溢れることなんて吐き気がするものね」
老婆Fが同意する。

「そこら辺に歩いてる奴を切り刻んで、鉄板ステーキ屋にでも持っていくか？」

男性Aはちらと視線を横にくれた。

「それもいいけど、それよりも もっと、どうしてもよくて、何だか誰かが呆れるようなことしませんか？」

少女Bは真剣に言葉を紡ぐ。

「いいね、それ。誰もが呆れること、か」

少年Dはパチンと手を叩いた。

「『大きなことで、誰もが呆れること』ね。言うは易し行うは難し、よ」

老婆Fが年長者らしく苦言を呈す。

「でも、できるわよ」

女性Cは自信たっぷりに笑った。

「そうとも。わしらに出来ないことは何もない」

老人Eは確信を持って言った。

「じゃあ、やるか」

男性Aは立ち上がった。

「やりましょう」

次いで、少女Bが腰を上げる。

順番に、少年D、女性B、老人E、老婆F、機械Gも総立ちになる。

彼らはお互いの顔を見つめて、しっかりと頷きあった。

そして彼らは集まった（８）

結末はどこなのか。結論はいかなる境地を作り出すのか。彼らに行く末とはどこにあるのか。観測者であり傍観者である私は、それをずっと求めていた気がする。彼らにはもはや親友に近い感情を抱いている。数十年来の友人のような、何があっても切れることのない絆を、彼らに感じている。しかし、悲しいかな、私は傍観者に過ぎなかった。彼らの世界に干渉できなかった。私は彼らとは別の次元に存在するもので、彼らを観察し、そして誰かに伝えることしかできない。彼らと言葉を交わし、肩を組み、握手をして、何らかの決意と予感を持って夜の町へと戻っていくことなど、私にはできない。それがどうしようもなく悲しかった。虚しかった。切なかった。私は彼らをずっと見てきた。なのに、彼らに何もできないのだ。彼らも私に何もできないのだ。いくら腕を伸ばしても、私は彼らに触れることすらできないのだ。ああ。何で、私はここにいるのだろう。私はどうして私なのだろう。ロミオとジュリエットも唾を吐くような苛立ちと焦燥感が私の胸を焦がしていた。何で、どうして、私は私なんだ！ なぜ！ 私は彼らの一員になれない！

私はここで考える。機械Gのことだ。彼女も元はしがらない機械に過ぎなかった。しかし今は彼らと共にいて、彼らの一員になっている。人間型の何かとして。私は彼女を羨んだ。憎しみよりも熱い嫉妬を燃え上がらせた。なぜ、彼女は人間　いちいち“人間型の何か”と呼ぶのは面倒なので便宜上人間としておく　になれたのか。分らない。彼女をずっと見ていた私にも分らない。奇跡、としか良いがない。微小な確率でありながら確かに起こり得る、そして起こり得た神秘的な現象によって、彼女は人間へと成り果てた。それはとても素敵なことだ。私はこうやって羨んでいるが、その現象自体はとても素晴らしいことだと思う。彼女は人間になることを望み、そして成ったのだ。願いが叶うことはそれだけで感涙ものであ

る。感激である。私は考える。彼女と同じことが私の身にも起こらないだろうか。そうすれば私も彼らと話ができる。彼らの輪に加われる。彼らの熱を空気を感じられる。願った。誰よりも強く願った。誰が私の願いを聞き入れてくれるだろうか？ いや、きつと誰も聞き入れてはくれない。サイコロは神様が振るものではない。確率は誰にも支配されない。投げられたサイコロの行方は、この全宇宙の誰にも分らない。奇跡は起こる。しかしそれは誰にも予測できない。私は人間になりたいのだ。今、奇跡は起こるだろうか。機械Gには起こった。それと同じものが私にも起こるだろうか。ルーレットで三千回赤が出た後に、三千一回目を期待して赤に賭けるか。それとも今度こそと考えて黒に賭けるか。それは個人の考え方によるだろう。私は、赤に賭ける。奇跡が起こり続けると信じたい。

しかし、いくら願っても、待っても、奇跡なんて起こらない。私は茫然として、一時的に観測をやめてしまった。観測者としてこの世界に存在する私が観測をやめるということは死んでいるのと同義だ。私は一瞬だけ死んでしまった。それほど衝撃的な事実だった。奇跡は、少なくとも、私の身には起こらない。賽の目の女神は私に微笑まない。何だか、少しだけ、それが嬉しくもあった。安心した。奇跡がそう立て続けに起こってたまるか。それは奇跡の価値を貶める。量の増加は質の低下。私は奇跡を奇跡のまま呼称しておきたい。ライト兄弟の起こした大空への奇跡は今では日常だ。非人間が人間になるという奇跡はそうなって欲しくない。日常に墮落して欲しくない。だから私は少しだけ安心して、自分の胸を掻き毟って、膝を付き、天を仰いだ。その先にある翼への憧れは、私にもある。私の想いは、感情は！ 限りなく！ 人間に近い！

なのに！

私は人間になれないのだ！ 彼らと同じ空気を吸えないのだ！

これを悲劇と呼ばずして何と呼ぼう？ 私は悲劇のど真ん中で号

泣している。大声を上げている。ああ、これが悲しみなのか？ 絶望なのか？ 私は男性Aのように世界に絶望していた。狂人となって一般人たちを残さず駆逐したいという気持ちになった。私は少女Bのようにこの世界の残酷さに怯えていた。自分自身の優しさでは到底打ち消す事のできない圧倒的な悪意に縮こまっていた。私は女性Cのように怠惰な日常に嫌悪感を抱いていた。何も変わり映えない毎日に、真綿で首を絞められるように、ゆっくりと殺されていた。私は少年Dのように幻想を渴望していた。人間になれるかもしれないという儚い欲望に胸が張り裂けそうだった。私は老人Eのように何かを強烈に求めている。愛か？ 友情か？ それは分からない。彼らと共にいればそれが分かるような気がする。私は老婆Fのごとく誰かのために生きたかった。自分自身のためだけに生きるなんて愚行をしなくなかった。私は機械Gのように 機械Gのように、人間になりたかった。他に何もいらぬ。私はもう一度、このどこだかわからない次元から、空を見た。夜空じゃない。青空でもない。奇妙に明るい青色の、昼でも夜でもない、あまりにも優しい空。私はもう一度叫んだ。私は、どうして私なのだ！ ライトブルーの空に向かって、咆哮した。

そして彼らは集まった（9）

「やっと来たか」

「待ちくたびれましたよ」

「重役出勤ね」

「遅刻が許されるのは学生までだよ」

「まあ、そう責めることもあるまい」

「そう。どんなに遅れても、ちゃんと来たじゃない」

「早くしないと、朝日が昇ってしまいますよ？」

手を差し出された。

私はそれを握った。体温。三十六度の温もりが、私の手に伝わった。何をしているのだ、私は？ 手を握っている。そうだ、私は私の手で、彼らの内の誰か一人の手を握っているのだ。私が？ あの孤独の次元で願望に圧殺されようとしていた私が？

「……うあ」

良く分らない声が出た。口の端から滴り落ちたような、汚い声だった。でも、私の声だった。紛れもなく、私が肺から空気を吐き出して声帯を震わせて発した、私の声だった。

「あああ……」

汚い声が次から次へと零れた。何を言おうとしているのだろう。何を伝えようとしているのだろう。私は何かを彼らに伝えたかった。私は自分の身体で、彼らに一言、伝えたかった。何を？ 分からない。彼らとは今初対面なのだ。なのに、彼らは当然のように私を受け入れている。今更、何を。彼らはそういった人間ではないか。肉を裂き骨を断ち脳髓を齧り出すことに、古今東西の全男女が育んだ懸想よりも巨大な愛を見出す事の出来る、素晴らしい人間たちではないか。何を疑うというのだ。私が突然この場に現れたとして、彼らが何かを訝しがることあるはずもない。

「行きましょう」

女性Cが手招きした。

「ああ、太陽が世界を焦がす前に」

「私たちにはやる必要があります」

「そう、わたしたちはやらねばならない」

「行きましようか」

「いつまでそこに突っ立ってるのさ」

「さあ」

私は ここにいることを許された。彼らの一員になることを許可された。彼らと同じ空気を吸っている。私は、ここにいます。ここにいますのだ！ 立っているのだ！ この世界の、彼らの側に！ いるのだ！

「あ……あ……」

「ん？」

機械Gが一瞥した。私は口を動かした。必死に動かそうとした。

「何だ？」

男性Aが足を止めて、振り向いた。私のために。私のために。嬉しくて、嬉しくて、どうしようもなかった。歓喜に私の身体が全細胞が打ち震えていた。その中の一つが、ぽつりと呟いた。「良かった、間に合って」。ああ、そうか。私もそうだった。太古の昔に別れた細胞の一欠けらだった。私はあの孤独の次元で見上げた空を思い出した。あの空もきつと、私を思い出しているだろう。今はもう、あの不気味に明るい青色の空を見ることはできない。私はこの世界にやって来た。さよならだ。でも、その言葉はもう伝えられない。ごめん。その言葉も、届かない。あの空とはもう一生会えない。でも、それはきつと正しい事で、この世界に生きるあらゆる人々は、そうやって空を捨ててきた。親友のように慕ったそれぞれの空を捨てて、今を生きている。私はそれが切なかった。だから、あのライトブルーの色を思い出しながら、胸の奥底に秘めながら、彼らに向き直った。そして言う。

「ありがとう」

私は、物語を始めます。

* ライト・ライト・ライトブルー
おわり
*

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6199m/>

ライト・ライト・ライトブルー

2010年10月8日12時35分発行